

求来里の遺跡Ⅴ

— 県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(5) —

町ノ坪遺跡A・C区の調査

2018年

日田市教育委員会



町ノ坪遺跡A区全景（北から）



町ノ坪遺跡C区全景（南東から）

序 文

この報告書は、当委員会が平成 15 年度に県営経営体育成基盤整備事業求来里地区の町ノ坪 2 工区の工事实施（圃場整備）に伴い、発掘調査を行った町ノ坪遺跡 A・C 区の調査内容をまとめたものです。

この調査では、古墳時代中期の朝鮮半島系の土器の出土や近世の生活の様子を窺うことのできる大量の陶磁器が廃棄された状況など、長い期間にわたり、求来里川沿いに広がっていた集落の様子がわかりました。

本書が文化財の保護、地元求来里地区の歴史解明や学術研究にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際してご協力いただきました、地元の方々や求来里地区圃場整備組合をはじめとする全ての関係者の方々に心よりお礼申し上げます。

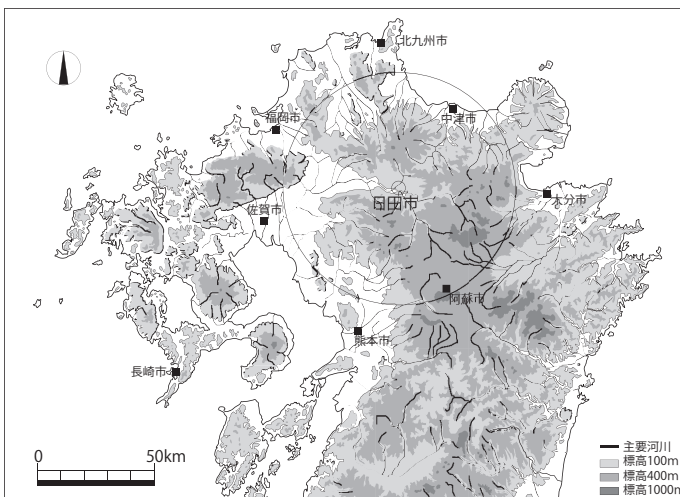
平成 30 年 3 月

日田市教育委員会

教育長 三笥 眞治郎

例 言

1. 本書は日田市教育委員会が平成15年度に実施した町ノ坪遺跡A・C区の発掘調査報告書である。
2. 調査は県営経営体育成基盤整備事求来里地区の工事実施に伴い、大分県日田地方振興局（現、大分県西部振興局）の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査に当たっては、求来地区圃場整備組合、日田市経済部農政課にご協力いただいた。
4. 発掘調査は土居・若杉が担当した。
5. 調査では、基準点設置作業を大分技術開発株式会社に、平面遺構実測・個別遺構実測・土層実測を雅企画有限会社に、空中写真撮影を九州航空株式会社に委託して実施し、その成果品を使用した。
6. 遺構写真撮影は担当者が行った。
7. 遺構製図のうち、全体図作成は雅企画有限会社に、個別遺構図（一部断面起こし込み）の一部は株式会社イビソク大分営業所に委託し、その成果品を使用した。また、個別遺構図の一部は担当者及び整理作業員が行った。
8. 遺構実測図の中には、レベルの記載漏れ等により、断面図や断面見通し図が作成できず、未掲載のものがある。
9. 出土遺物実測は株式会社九州文化財総合研究所及び雅企画有限会社、遺物実測製図・写真撮影は雅企画有限会社、遺物実測・遺物写真の割付は株式会社イビソク大分営業所にそれぞれ委託し、その成果品を使用した。
10. 挿図中の方位、文中の方位角は真北を示す。
11. 写真図版の遺物に付した番号は、挿図番号に対応する。
12. 出土遺物及び図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
13. 本書の執筆・編集は若杉が行った。



日田市の位置



大分県の行政区

本文目次

I 調査の経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘作業の経過	1
(3) 整理等作業の経過	2
(4) 調査組織	2
II 遺跡の位置と環境	4
III 調査の内容	6
(1) 調査の概要	6
(2) A区の遺構と遺物	7
(3) C区の遺構と遺物	18
IV 総括	50

挿図目次

第1図 調査地周辺地形図及び調査区配置図(1/5,000)	1	第25図 C区3～6号竪穴建物実測図(1/80・1/40)	26
第2図 求来里川流域の遺跡分布図(1/20,000)	5	第26図 C区3・4号竪穴建物出土遺物実測図 (1/2・1/4)	27
第3図 A区遺構配置図(1/200)	6	第27図 C区7号竪穴建物実測図(1/80)	28
第4図 A区1～3号竪穴建物実測図(1/80・1/40)	8	第28図 C区1・2号掘立柱建物実測図(1/80)	29
第5図 A区1～3号竪穴建物出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/4)	9	第29図 C区3・4号掘立柱建物実測図(1/80)	30
第6図 A区4号竪穴建物実測図(1/80)	9	第30図 C区5・6号掘立柱建物実測図(1/80)	32
第7図 A区5・6号竪穴建物実測図(1/80)	10	第31図 C区7・8号掘立柱建物実測図(1/80)	33
第8図 A区1・2号掘立柱建物実測図(1/80)	11	第32図 C区9号掘立柱建物実測図(1/80)	34
第9図 A区3・4号掘立柱建物実測図(1/80)	12	第33図 C区土坑実測図(1)(1/40)	35
第10図 A区5～7号掘立柱建物実測図(1/80)	13	第34図 C区土坑出土遺物実測図(1) (1/2・1/3・1/4)	37
第11図 A区土坑実測図(1/40)	15	第35図 C区土坑実測図(2)(1/40)	38
第12図 A区土坑出土遺物実測図(1/4)	15	第36図 C区土坑出土遺物実測図(2)(1/4)	40
第13図 A区1号溝実測図(1/100)及び 出土遺物実測図(1/4)	16	第37図 C区土坑実測図(3)(1/40)	42
第14図 A区2・3号溝実測図(1/80)	17	第38図 C区土坑出土遺物実測図(3)(1/4)	43
第15図 A区その他の出土遺物実測図(1/4)	17	第39図 C区4号溝土層実測図(1/60)	44
第16図 C区南壁土層実測図(1/40)	18	第40図 C区溝実測図(1/80・1/100)	45
第17図 C区遺構配置図(1/200)	19～20	第41図 C区溝出土遺物実測図(1) (1/2・1/3・1/4)	46
第18図 C区1号A竪穴建物実測図(1/80・1/40)	21	第42図 C区溝出土遺物実測図(2)(1/3)	47
第19図 C区1号A竪穴建物出土遺物実測図(1/4)	21	第43図 C区溝出土遺物実測図(3)(1/3・1/4)	48
第20図 C区1号B竪穴建物実測図(1/80・1/40)	22	第44図 C区ピット出土遺物実測図(1/3・1/4)	49
第21図 C区1号B竪穴建物出土遺物実測図(1/4)	22	第45図 C区水田層出土遺物実測図(1/3・1/4)	49
第22図 C区2号A・B・C竪穴建物実測図(1/80)	23	第46図 C区その他の出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)	49
第23図 C区2号A・C竪穴建物カマド実測図(1/40)	23		
第24図 C区2号A・B・C竪穴建物 出土遺物実測図(1/4)	24		

表 目 次

第1表 主要遺構変遷表	52	第6表 出土土器観察表 (5)	57
第2表 出土土器観察表 (1)	53	第7表 出土磁器観察表 (1)	57
第3表 出土土器観察表 (2)	54	第8表 出土磁器観察表 (2)	58
第4表 出土土器観察表 (3)	55	第9表 出土石器観察表	58
第5表 出土土器観察表 (4)	56		

写 真 図 版 目 次

巻頭写真図版

- 上 町ノ坪遺跡A区全景 (北から)
- 下 町ノ坪遺跡C区全景 (南東から)

写真図版 1

- ① A区垂直写真 (上が北東)
- ② A区1号竪穴建物発掘状況 (北西から)
- ③ A区1号竪穴建物カマド発掘状況 (南西から)
- ④ A区2号竪穴建物カマド発掘状況 (南から)
- ⑤ A区4号竪穴建物発掘状況 (南から)

写真図版 2

- ① A区5号竪穴建物発掘状況 (北から)
- ② A区1号掘立柱建物発掘状況 (上が北西)
- ③ A区3号掘立柱建物発掘状況 (北西から)
- ④ C区垂直写真 (上が南東)

写真図版 3

- ① C区1号A竪穴建物完掘状況 (南西から)
- ② C区1号A竪穴建物焼土・炭検出状況 (南西から)
- ③ C区1号B竪穴建物発掘状況 (南から)
- ④ C区1号B竪穴建物発掘状況 (東から)
- ⑤ C区2号A B C竪穴建物発掘状況 (西から)
- ⑥ C区2号A B C竪穴建物完掘状況 (南東から)
- ⑦ C区2号C竪穴建物カマド発掘状況 (南から)
- ⑧ C区2号C竪穴建物遺物出土状況

写真図版 4

- ① C区4号A竪穴建物発掘状況 (南東から)
- ② C区4号B竪穴建物カマド発掘状況 (北西から)
- ③ C区4号C竪穴建物カマド発掘状況 (北西から)
- ④ C区6号竪穴建物発掘状況 (南東から)
- ⑤ C区1～6号竪穴建物、
4～9号掘立柱建物発掘状況 (上が南)

写真図版 5

- ① C区1～3号掘立柱建物発掘状況 (上が南)
- ② C区1～3号掘立柱建物状況 (南から)
- ③ C区1号土坑発掘状況 (南西から)
- ④ C区1号土坑遺物出土状況
- ⑤ C区7号土坑完掘状況 (北西から)

写真図版 6

- ① C区11号土坑遺物出土状況
- ② C区20号土坑完掘状況 (北西から)
- ③ C区20号土坑遺物出土状況
- ④ C区20号土坑土層堆積状況
- ⑤ C区24号土坑発掘状況 (東から)
- ⑥ C区29号土坑遺物出土状況
- ⑦ C区29号土坑発掘状況

写真図版 7

- ① C区4号溝遺物出土状況 (1) (北西から)
- ② C区4号溝遺物出土状況 (2) (南東から)
- ③ C区4号溝発掘状況 (南東から)
- ④ C区4号溝遺物出土状況 (3) (北西から)
- ⑤ C区4号溝土層堆積状況

写真図版 8～13

出土遺物

本 文 写 真 目 次

写真1 A区作業風景	3	写真2 C区積雪状況	3
------------	---	------------	---

I 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

県営経営体育成基盤整備事業求来里地区全体の調査に関する経緯については、『求来里の遺跡Ⅰ』に記述しているため、ここでは割愛し、町ノ坪遺跡A・C区の調査の経緯について述べる。

町ノ坪2工区内に所在する本遺跡の発掘調査については、平成13年12月に、町ノ坪・着来一帯の予備調査依頼が提出された。これを受けて、市教育庁文化課では平成14年3月11日～3月20日までの間、予備調査を実施した。対象地に29箇所のトレンチを設定して調査を行った結果、町ノ坪2工区一帯に遺跡の存在が確認された（町ノ坪1工区は遺跡なし）。

工事が平成16年度から着工される予定になっていたことから平成15年9月には事前協議を実施し、遺跡の保存が困難であると判断された対象地については、事前に発掘調査を実施することとなった。このうち、町ノ坪工区一帯は、市道求来里中央線を挟んで、東西で工事年度が異なることから、平成16・17年度の工事着工前に、それぞれ発掘調査を実施することとなった。これに伴い、町ノ坪2工区一帯の遺跡を町ノ坪遺跡とし、市道を挟んで東側を北からA・B・C区、西側をD区として調査区を設定し、A・C区を平成15年度、B区を平成15・16年度、D区を平成16・17年度に、それぞれ発掘調査を実施した（『求来里の遺跡Ⅰ』3P第2図参照）。

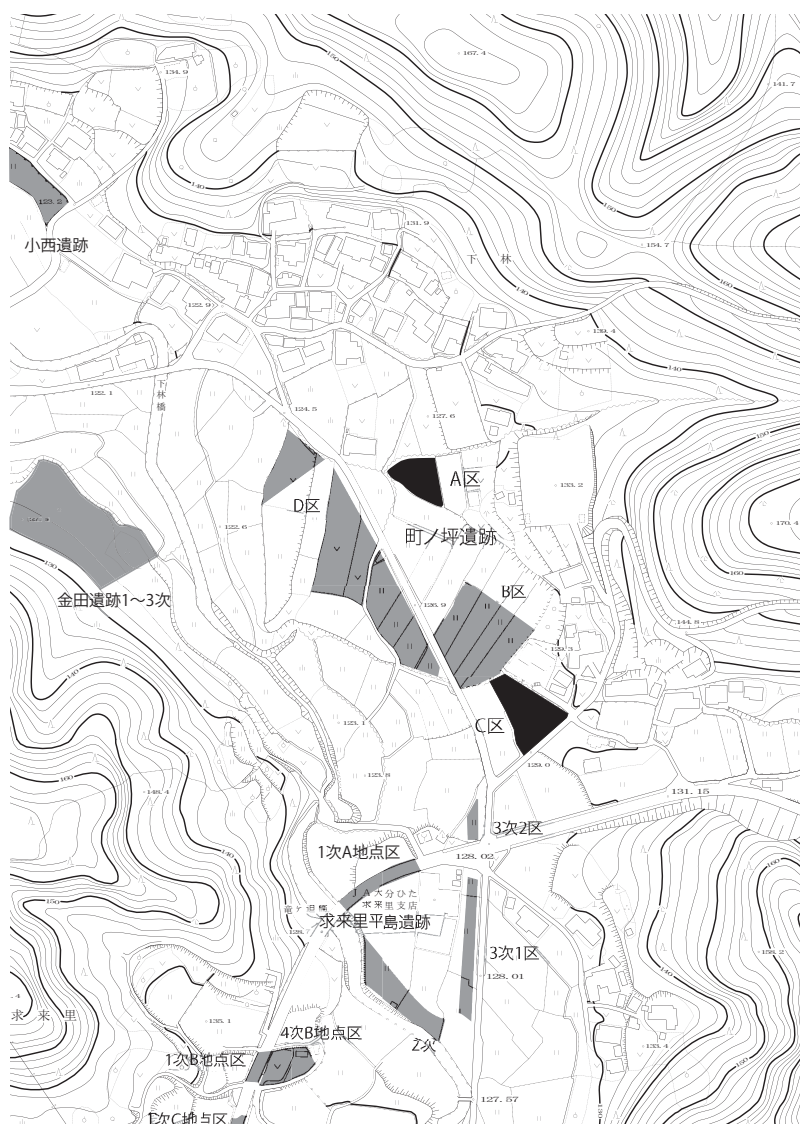
以上の経過により、平成15年11月1日に大分県日田地方振興局と委託契約を取り交わし、A・C区については、平成16年3月26日までの予定で調査に着手した。

(2) 発掘作業の経過

発掘作業は平成15年11月10日に着手した。以下、その経過を記す。

平成15年

- 11月10日 重機搬入
A区耕作土除去開始
- 11月14日 周辺地形測量
(～12月1日)
- 12月2日 A区遺構検出開始
- 12月3日 C区耕作土除去開始
- 12月4日 A区遺構配置図作成
開始
- 12月5日 A区基準点測量、
遺構掘下げ・遺構実測
開始



第1図 調査地周辺地形図及び調査区配置図 (1/5,000)

12月15日 C区遺構検出開始
12月18日 C区遺構配置図作成開始
12月19日 C区遺構掘下げ・遺構実測開始

平成16年

2月13日 C区空中写真撮影実施
3月10日 A区空中写真撮影実施
3月14日 熊本大学杉井健助教授来訪
3月21日 大分短期大学・佐々木章助教授現地指導、空中写真撮影実施
3月23日 別府大学下村智教授来訪、A区遺構掘下げ・実測終了、調査終了
3月24日 C区遺構掘下げ・実測終了、調査終了
3月26日 器材整理、撤収し、調査終了

(3) 整理等作業の経過

A・C区の整理等作業は、発掘調査と並行して、平成15年12月より着手し、翌平成16年10月に終了した。なお、平成16年度の契約期間は平成16年4月5日～平成17年3月11日である。

その後、平成21年度には、他の遺跡とともに求来里地区報告書作成事業として、契約を一本化し、全体図作成業務及び出土磁器実測業務を委託業務として実施した。

本遺跡の報告については、平成20年度にB区の報告書を刊行したものの、残りの地区は、平成21年度の当該事業の完了までに刊行することができなかった。そのため、平成22年度以降は市の単独事業である埋蔵文化財発掘調査報告書作成事業により予算化し、事業を実施した。なお、各年度の作業内容及び委託業務の発注先については、以下のとおりである。

平成21年度 全体図作成、C区出土磁器実測等（雅企画(有)）
平成23年度 出土遺物実測（(株)九州文化財総合研究所）
平成24年度 出土遺物実測・製図及び写真撮影（雅企画(有)）
平成28年度 遺構製図及び遺物実測図・遺物写真割付（(株)イビソク大分営業所）
平成29年度 報告書印刷

(4) 調査組織

発掘作業・整理等作業及び報告書作成の体制は以下のとおりである。（職名は当時のまま）

発掘作業・整理等作業（遺物整理まで）（平成15・16年度）

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）
調査統括 後藤 清（日田市教育庁文化課長）
調査事務 佐藤晃（日田市教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財係長／平成15年度）
高倉隆人（日田市教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長／平成16年度）
園田恭一郎（同主査）酒井恵（同主事補）
伊藤京子（同専門員／平成16年度）
行時桂子（同主任）渡邊隆行（同主事）中村邦宏（同主事補／平成16年度）
調査担当 土居和幸（日田市教育委員会文化課主査）

若杉竜太（同主事／平成 15 年度、同主任／平成 16 年度）

調査補助員 松本彩 藤野美音 杉森久恵

発掘作業員 穴井喜久男 穴井正利 安藤一枝 諫元正隆 石井猪之助 石谷アサカ 荏隈マサ子
江藤キミ子 梶原利徳 河津定雄 河津モリ 河部松子 五島絹代 財津高子 定賀和子
佐藤久利 佐藤八重子 庄内武子 高倉エミ子 高村三郎 田中傳江 谷口芳枝 信岡アイ子
原田強 日野勝己 平川五男 本松シヅエ 森輝雄 森本絹子 吉長利夫

整理作業員 朝倉眞佐子 穴井トヨ子 井上とし子 宇野富子 梶原ヒトエ 黒木千鶴子 坂本和代
田中静香 中原琴枝 安元百合 吉田千津子 和田ケイ子

指 導 者 佐々木章（大分短期大学教授）

来 訪 者 清水宗昭 甲斐寿義（以上、大分県教育庁文化課）
杉井健（熊本大学助教授） 下村智（別府大学教授）

整理等作業（実測・製図業務等）及び報告書作成・印刷（平成 21・23・24・28・29 年度）

調 査 主 体 日田市教育委員会

調査責任者 合原多賀雄（日田市教育委員会教育長／平成 21・23・24 年度）
三笥眞治郎（同教育長／平成 28 年度～）

調 査 統 括 原田文利（日田市教育庁文化財保護課長／平成 21 年度）
財津隆之（同課長／平成 23 年度） 財津俊一（同課長／平成 24 年度）
池田寿生（同課長／平成 28 年度） 梶原康弘（同課長／平成 29 年度）

調 査 事 務 北村 羊（日田市教育庁文化財保護課主幹兼埋蔵文化財係長／平成 21 年度）
土居和幸（同埋蔵文化財係長／平成 23・24 年度）
古賀信一（同主幹（総括）埋蔵文化財係担当／平成 28・29 年度）
河津美広（同専門員／平成 21 年度） 塚原美保 今田秀樹（以上、同主査／平成 21 年度）
華藤善紹（同副主幹／平成 23 年度）
行時桂子（同主査） 渡邊隆行（同主任／平成 21・23 年度、同主査／平成 24 年度～）
矢羽田幸宏（同主事／平成 21 年度）
上原翔平（同主事／平成 23・24 年度、同主任／平成 28 年度～）
長祐一郎（同主査／平成 28 年度～）

整理・報告書担当 若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主任／平成 21 年度、同主査／平成 23 年度～）

整理作業員 石松裕美 伊藤一美 鍛冶谷節子 佐藤みちこ 武石和美 中川照美
中原琴枝（以上、平成 21 年度） 用松操（平成 29 年度）



写真 1 A区作業風景



写真 2 C区積雪状況

II 遺跡の位置と環境（第2図）

町ノ坪遺跡の所在する求来里地区は盆地の東部に位置し、天瀬町馬原を源とする求来里川により形成された沖積地の谷状地形を呈している。求来里川は大きく蛇行を繰り返しながら、北西方向に流れ、遺跡の北約2kmの地点で有田川と合流する。

求来里地区及び求来里川流域では、ほ場整備事業に伴って行われた発掘調査の他にも、道路建設や河川改修による発掘調査が行われている。ここでは、それらの遺跡を中心に求来里川流域の遺跡を概観していく。

町ノ坪遺跡の北西側約400mの台地裾には、弥生時代中期から終末期にかけての集落が確認された小西遺跡(2)がある。また、町ノ坪遺跡の南西側には求来里川を挟んで金田遺跡(3)が所在する。金田遺跡では弥生時代中期後半から古墳時代後期の集落が確認され、古墳時代中期の集落では朝倉産の初期須恵器や朝鮮半島系土器が出土しており、地床炉からカマド導入期の集落変遷が伺える。町ノ坪遺跡の南側にある求来里平島遺跡(4)では、縄文時代の遺構や古墳時代中期から後期にかけての集落、中世の建物群などが確認されている。

求来里平島遺跡の南側には弥生時代・古墳時代の包蔵地である着来遺跡(5)がある。着来遺跡の東側、求来里川が形成する谷の最奥部には縄文時代前期を中心とした包含層、古墳時代後期～終末期の集落や中世の墓地が確認された名里遺跡(6)が存在する。

一方、谷の北側には町野原台地が広がり、台地一帯には旧石器時代・縄文時代・古墳時代の包蔵地である町野原遺跡(7)が存在する。また、台地の南東側に円墳の亀ノ甲古墳(8)、さらに台地から西側に派生し、小西遺跡背後にあたる丘陵上には、横穴式石室を主体とし、3基の円墳からなるガニタ古墳群(10～12)がある。

また、谷南側の元宮原台地上には弥生時代後期の甕棺墓・石棺墓や古墳時代後期の石蓋土坑墓、中世の塚と笠塔婆などが見つかった元宮遺跡(13)が存在する。弥生時代～古墳時代にかけての墓地は、求来里川流域に展開する同時期の集落との関係を想起させる。

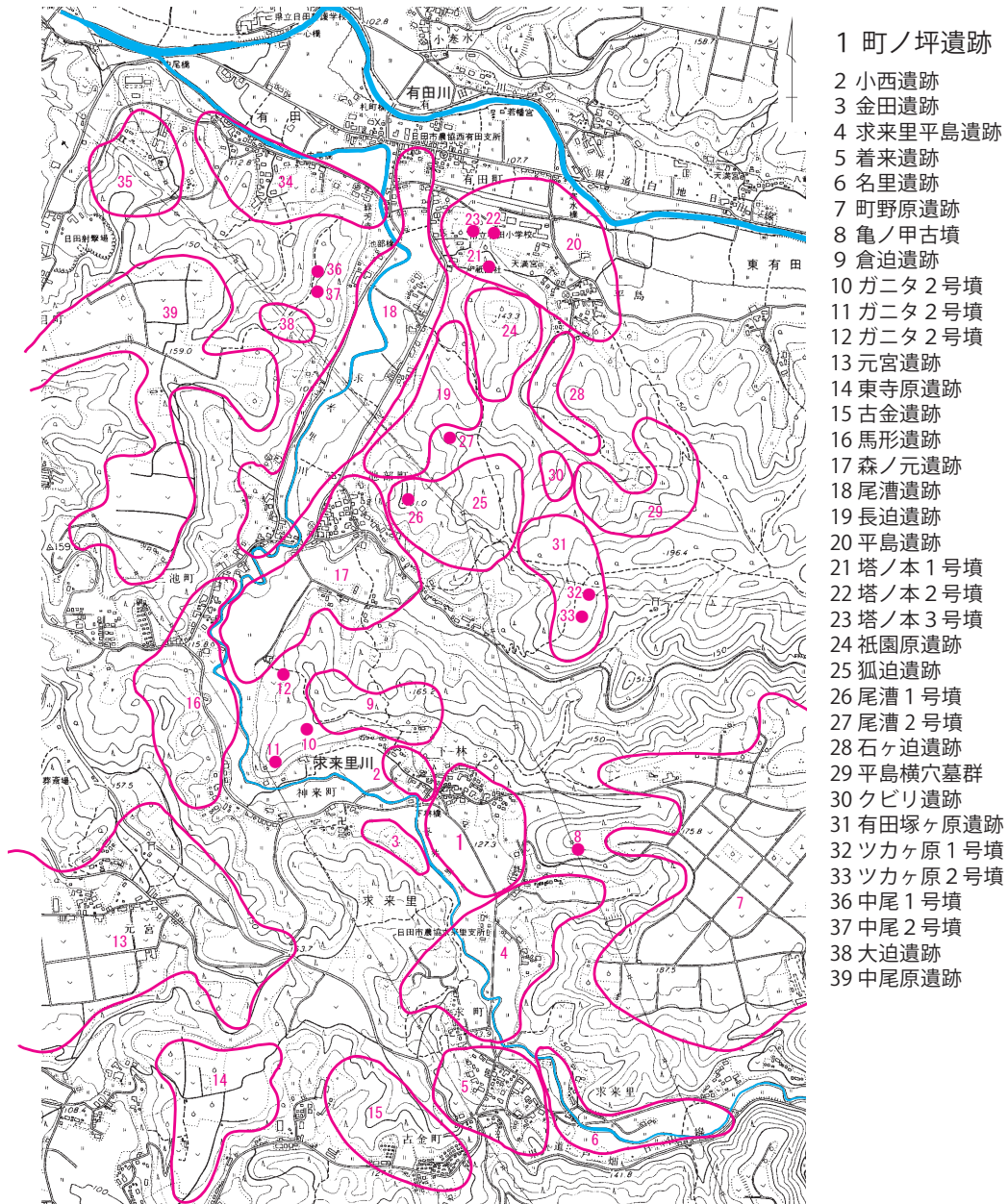
さらに、求来里地区から求来里川を下流に下った有田地区でも、沖積地及び周辺の丘陵上に多くの遺跡がみられる。小西遺跡の西約600mの丘陵上には古墳時代の集落や古代の土坑墓が見つかった馬形遺跡(16)がある。さらに下流の沖積地及び微高地上には、縄文時代晩期の埋甕や平安時代の竪穴遺構が確認された森ノ元遺跡(17)や弥生時代の墓地や古墳時代の集落、300枚を超える六道銭が埋納された土坑墓が確認された尾漕遺跡(18)が存在する。

また、求来里川右岸の台地上には、弥生時代から古墳時代にかけての集落や近世墓群が見つかった祇園原遺跡(24)、古墳時代から古代を中心とする集落が確認された長迫遺跡(19)、古墳時代後期の横穴式石室を主体とする塔ノ本1号墳(21)などが存在する。一方、左岸の台地上には古墳時代の土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓などが確認された大迫遺跡(38)や3基の円墳からなる中尾古墳群(36・37)が存在する。

(参考文献)

- 若杉竜太編『平成15年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004
渡邊隆行編『平成16年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2005
今田秀樹編『平成17年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2007
矢羽田幸宏編『平成18年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2008
土居和幸・行時志郎・永田裕久編『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第11集 日田市教育委員会 1996
松下桂子編『牧原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第12集 日田市教育委員会 1997
村上久和・友岡信彦・染矢和徳編『日田糸里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下綾垣遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 大分県教育委員会 1997
行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998
土居和幸・行時志郎・永田裕久編『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集 日田市教育委員会 1998
友岡信彦・松本康弘『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 大分県教育委員会 1998
村上久和・原田昭一編『尾漕遺跡』大分県文化財調査報告書第112輯 大分県教育委員会 2000

若杉竜太編『平島遺跡D地点 塔ノ本古墳 祇園原遺跡2次 長迫遺跡C地点 長迫遺跡D地点 尾漕遺跡6次』日田市埋蔵文化財調査報告書第28集 日田市教育委員会 2001
 渡邊隆行編『大波羅遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第29集 日田市教育委員会 2001
 行時志郎編『尾漕遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 日田市教育委員会 2001
 土居和幸編『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2003
 若杉竜太編『日田条里飛矢地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第40集 日田市教育委員会 2003
 若杉竜太編『日田条里大原地区』日田市埋蔵文化財調査報告書第47集 日田市教育委員会 2004
 行時桂子編『尾漕2号墳』日田市埋蔵文化財調査報告書第69集 日田市教育委員会 2006
 若杉竜太・矢羽田幸宏編『上井手遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第76集 日田市教育委員会 2007
 行時桂子編『求来里平島遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第77集 日田市教育委員会 2007
 行時桂子編『祇園原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第81集 日田市教育委員会 2007
 矢羽田幸宏編『上井手遺跡3次』日田市埋蔵文化財調査報告書第86集 日田市教育委員会 2008
 行時桂子編『祇園原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第87集 日田市教育委員会 2008
 田中裕介・原田昭一・松本康弘編『求来里平島遺跡D区、求来里名里遺跡A区1次調査区、金田遺跡1次調査区、金田遺跡3次調査区』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008
 若杉竜太『求来里の遺跡Ⅲ 小西遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第91集 2010
 若杉竜太『求来里の遺跡Ⅳ 求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第102集 2012



第2図 求来里川流域の遺跡分布図 (1/20,000)

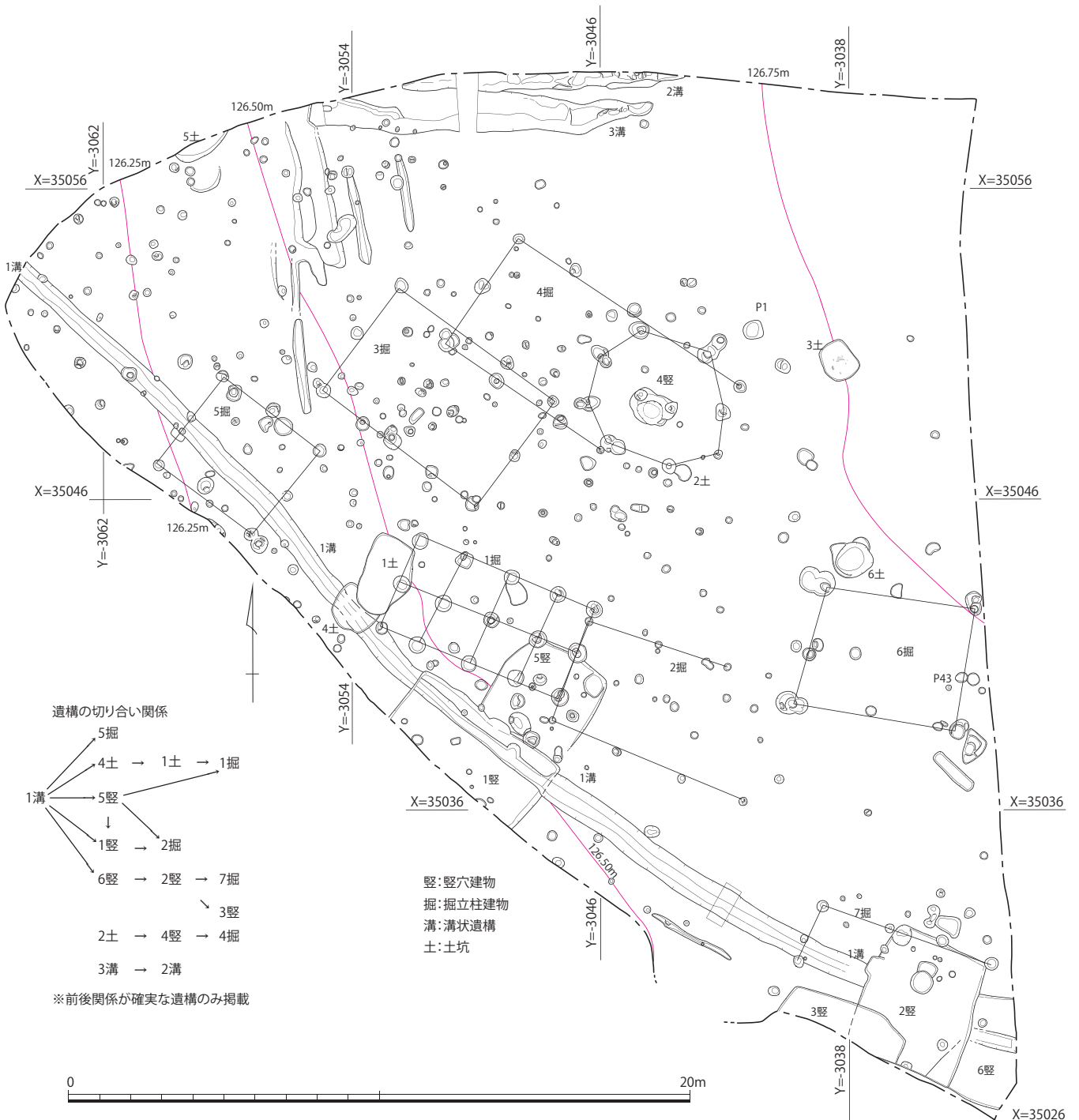
III 調査の内容

(1) 調査の概要

調査地は、求来里川右岸の標高 126 ～ 129 m の河岸段丘上に位置する。

A 区では現水田基盤土の下位約 80cm から茶褐色粘質土、C 区では水田基盤土の下位約 50 ～ 70cm から白味を帯びた褐色粘質土の遺構検出面が確認された。

確認された遺構は、竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑・ピットである。詳細については A 区、C 区の順に記述していく。



第3図 A区遺構配置図 (1/200)

(2) A区の遺構と遺物(第3図 図版1)

A区は三角形状を呈する調査区(調査面積678㎡)で、現地形は北東から南西かけて緩やかに傾斜している。遺構は調査区中央付近から南東側にかけて、6軒の竪穴建物、北西側から南東側にかけて、掘立柱建物7棟、土坑6基、南西側及び北側で溝4条のほか、ピットが多数確認された。なお、北東側では遺構はほとんど確認されていない。これはこの部分の傾斜が緩やかなこと、3号土坑の遺物が検出面に近いレベルから出土していることなどから、旧地形が削平を受けた可能性が高いためと考えられる。

1. 竪穴建物

竪穴建物は調査区中央付近から南側にかけて6軒確認された。

1号竪穴建物(第4・5図 図版1)

調査区の南西壁の中央付近で確認され、5号竪穴遺構・1号溝を切る。南西側は調査区外にかかる。平面形は方形を呈し、調査区内で確認された規模は、北西-南東軸約5.8m、北東-南西軸約2.5m+ α 、検出面からの深さは20~30cmを測る。床面には数個のピットが確認されたが、支柱穴と判断できるものはなかった。また、北東壁中央付近にカマドが敷設されており、突出部がわずかに見られる。両袖は残存していたが、袖石は確認されず、抜き取り痕と思われるピットを検出した。両袖の内側には、火床面が広がり、中央付近で支脚の抜き取り痕とみられるピットが確認された。カマドの規模は左袖・右袖ともに長さ約45cm、袖間の幅は奥壁側で約60cm、袖の手前側で約72cmを測る。なお、突出部まで含めた長さは約65cmである。

遺物は土師器甕(第5図3・4)や須恵器高台付埴(同図2)などが出土している。

2号竪穴建物(第4・5図 図版1)

調査区の南東隅で確認され、1号溝を切り、3号竪穴建物、7号掘立柱建物に切られる。南西側は調査区外へ広がる。平面形は方形を呈し、調査区内で確認された規模は、北西-南東軸約4.4m、北東-南西軸約4.0m+ α 、検出面からの深さは10~20cmを測る。床面には数個のピットが確認されたが、支柱穴と判断できるものはなかった。また、北東隅から約2mの北壁にカマドが敷設されており、方形の突出部がわずかに見られる。カマド内部の中央付近とカマド手前部分では火床面が見られたものの、袖及び袖石・支脚は検出されなかった。カマドの規模は、奥壁側で幅約55cm、手前で約70cmを測る。なお、突出部まで含めた長さは約80cmである。

遺物は土師器甕や坏(第5図6・8~10)、土師質土器坏(同図7)などが出土しているが、土師質土器坏は切り合う遺構から混入した可能性が高い。

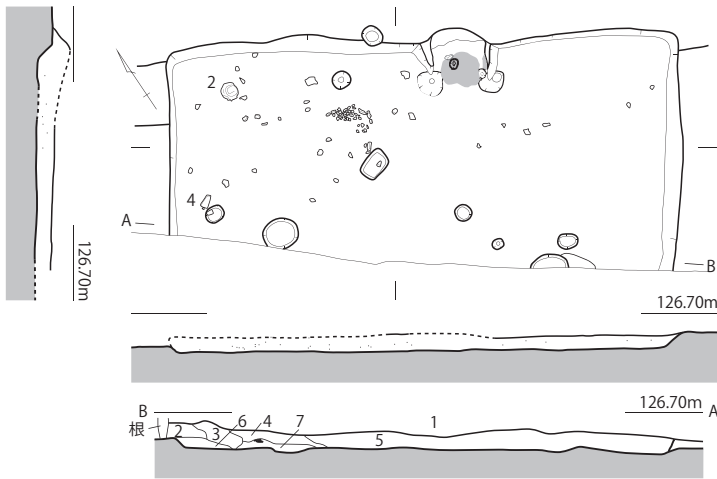
3号竪穴建物(第4・5図)

調査区の南東隅で確認され、2号竪穴建物を切り、南西側は調査区外へ広がる。平面形は方形を呈し、調査区内で確認された規模は、東西軸約4.2m、南北軸約1.2m+ α 、検出面からの深さは約10cmを測る。床面ではピットや壁際溝等は検出されず、また、カマドも確認されなかった。

遺物は弥生土器甕(第5図11)や投弾(同図12)が出土している。

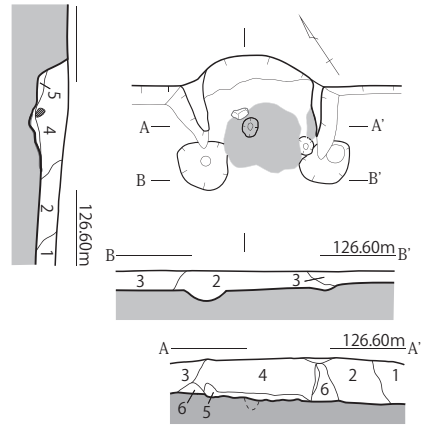
4号竪穴建物(第6図 図版1)

調査区の中央付近で確認され、2号土坑を切り、4号掘立柱建物に切られる。壁面は削平のため、確認できなかったが、中央に焼土を含んだ土坑があり、それを中心に配置されるP1~P8を支柱穴と捉え、円形の竪穴建物と判断した。



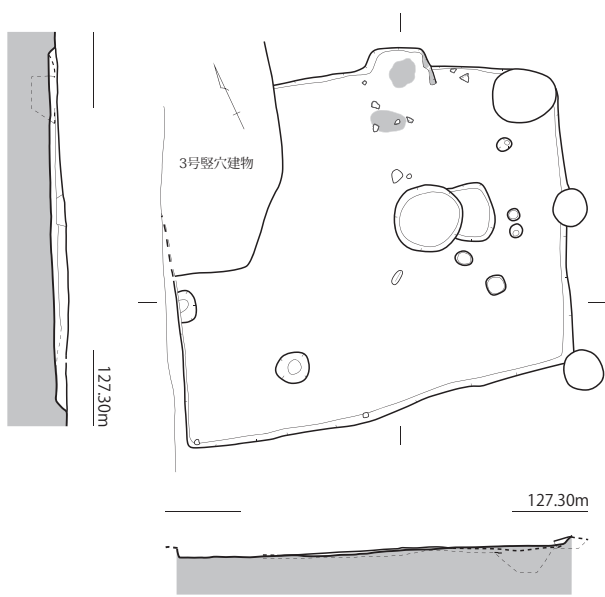
- 1層 黒茶色土層(水田耕作土)
- 2層 茶褐色土層(水田基盤土)
- 3層 茶色土層 焼土含む
- 4層 暗茶色土層 焼土ブロックを少量含む。建物埋土
- 5層 暗茶色土層 建物埋土
- 6層 暗茶色土層 2層より黒味帯る
- 7層 黒茶褐色土層 炭含む
- 8層 黄褐色土層 地山

1号竪穴建物

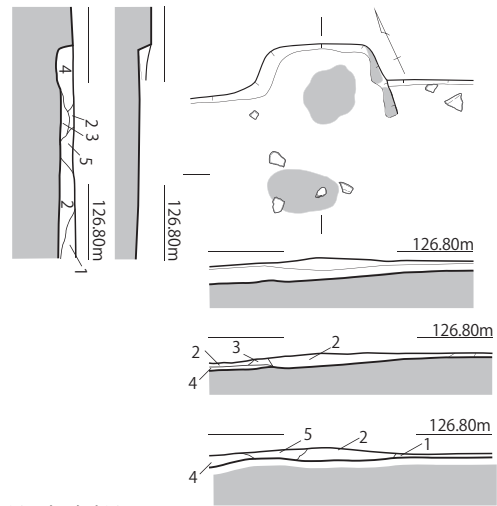


- 1層 黒褐色土層(建物埋土)
- 2層 灰色粘質土層 焼土ブロック含む
- 3層 黒褐色土層 1層と同じ
- 4層 明灰色粘質土層 焼土をブロックを多く含む
- 5層 茶灰色土層
- 6層 明黄褐色土層 焼土含む 地山土で軸を作る

1号竪穴建物カマド



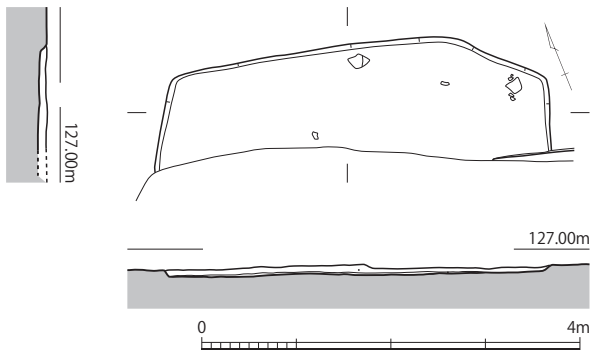
2号竪穴建物



- 1層 暗灰色土層
- 2層 暗灰色土層 焼土ブロック含む
- 3層 灰色土層
- 4層 灰色土層 黄褐色地山ブロックをく含む
- 5層 黒褐色土層 焼土・炭ブロック含む
- 6層 黒褐色土層 焼土多く含む
- 7層 黄色土層 地山



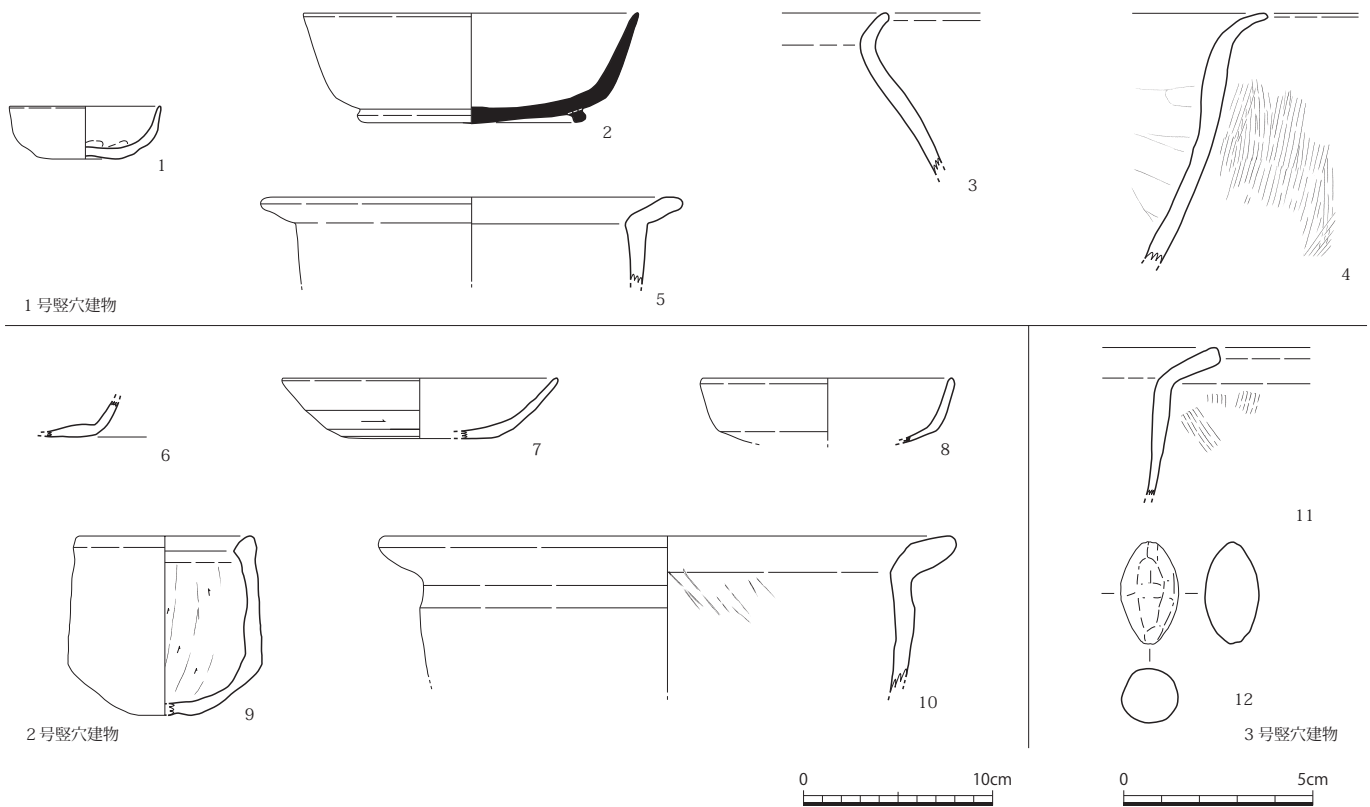
2号竪穴建物カマド



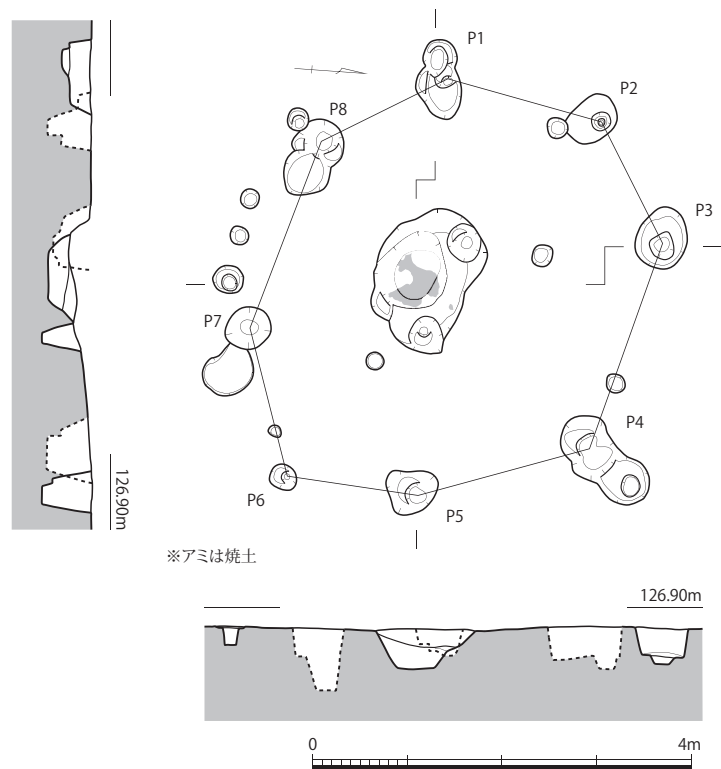
3号竪穴建物

※アミは焼土
 ※図中の番号は第5図の番号に対応

第4図 A区1~3号竪穴建物実測図 (1/80・カマド1/40)

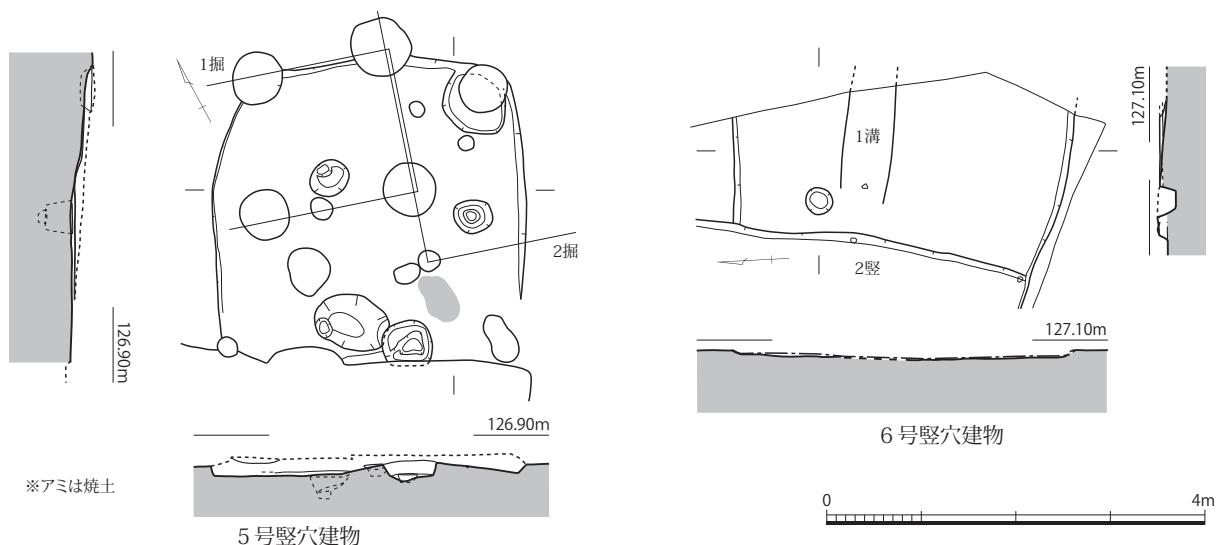


第5図 A区1～3号竪穴建物出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/4)



第6図 A区4号竪穴建物実測図 (1/80)

また、P1・P4・P8なども同様に切り合いが見られることと合わせて、建て替えがあった可能性が考えられる。また、土坑から焼土が検出されており、炉としても使用されていたと考えられる。なお、支柱穴間の距離は1.3～2.3m、深さは床面より30～70cm、土坑の規模は長軸約1.4m、端軸約1.1m、深さは床面より約40cmを測る。



第7図 A区5・6号竪穴建物実測図 (1/80)

遺物は弥生土器が出土しているが、図化可能なものはなかった。

5号竪穴建物 (第7図 図版2)

調査区の南東側で確認され、1号竪穴建物と1・2号掘立柱建物に切られる。平面形は方形を呈し、床面にはピットが数個見られたが、支柱穴と判断できるようなものはなかった。規模は北西-南東軸約3.5m、北東-南西軸が約3.7m+ α 、検出面からの深さは約20cmを測る。床面には焼土が確認されたことから、カマドがあった可能性がある。

遺物は出土しなかった。

6号竪穴建物 (第7図)

調査区の南東隅で確認され、1号溝を切り、西側は2号竪穴建物に切られ、東側は調査区外にかかる。平面形は方形を呈すると思われ、床面にはピットが1個確認されたが、支柱穴とは判断できなかった。カマドや壁際溝等も確認できなかった。調査区内で確認された規模は南北軸約4.0m、検出面からの深さは数cmである。

遺物は出土しなかった。

2. 掘立柱建物

1号掘立柱建物 (第8図 図版2)

調査区南西側中央付近で確認され、5号竪穴建物・1号土坑・1号溝を切る。また、2号掘立柱建物と切り合うが前後関係は不明である。主軸方向をN-71°-Wに取り、柱間は桁行4間×梁行2間の総柱建物である。規模は柱穴間の心々距離で桁行6.0~6.4m、梁行約3.2m、柱穴の大きさは径45~65cm、検出面からの深さは20~30cmを測る。

遺物は出土しなかった。

2号掘立柱建物 (第8図)

1号掘立柱建物の南東側で確認され、5号竪穴建物を切り、北西側の柱列は1号掘立柱建物と切り合うが、前後関係は不明である。主軸方向をN-73°-Wに取り、柱間は桁行3間以上×梁行1間である。西側の柱穴が確認できていないことから、正確な規模は不明だが、確認できた部分で柱穴間の心々距離は桁行約6.8m+ α 、梁

行 3.5 m、柱穴の大きさは径 25 ～ 35cm、検出面からの深さは 10 ～ 30cmを測る。

遺物は出土しなかった。

3号掘立柱建物（第9図 図版2）

1号掘立柱建物の北側で確認され、4号掘立柱建物と切り合うが前後関係は不明である。主軸方向をN - 57° -Wに取り、柱間は桁行3間×梁行2間であるが、桁行北側では柱穴が1基、確認できなかった。規模は柱穴間の心々距離で桁行 6.1 ～ 6.2 m、梁行約 4.2 m、柱穴の大きさは径 40 ～ 50cm、検出面からの深さは 25 ～ 40cmを測る。

遺物は出土しなかった。

4号掘立柱建物（第9図）

3号掘立柱建物の東側で確認され、4号掘立柱建物を切る。3号掘立柱建物と切り合うが、前後関係は不明である。主軸方向をN - 61° -Wに取り、柱間は桁行4間以上×梁行2間である。西側の柱穴が確認できていないことから、正確な規模は不明だが、確認できた部分で柱穴間の心々距離は桁行 9.0 m + α 、梁行約 4.3 m、柱穴の大きさは径 15 ～ 70cm、検出面からの深さは 25 ～ 40cmを測る。

遺物は出土しなかった。

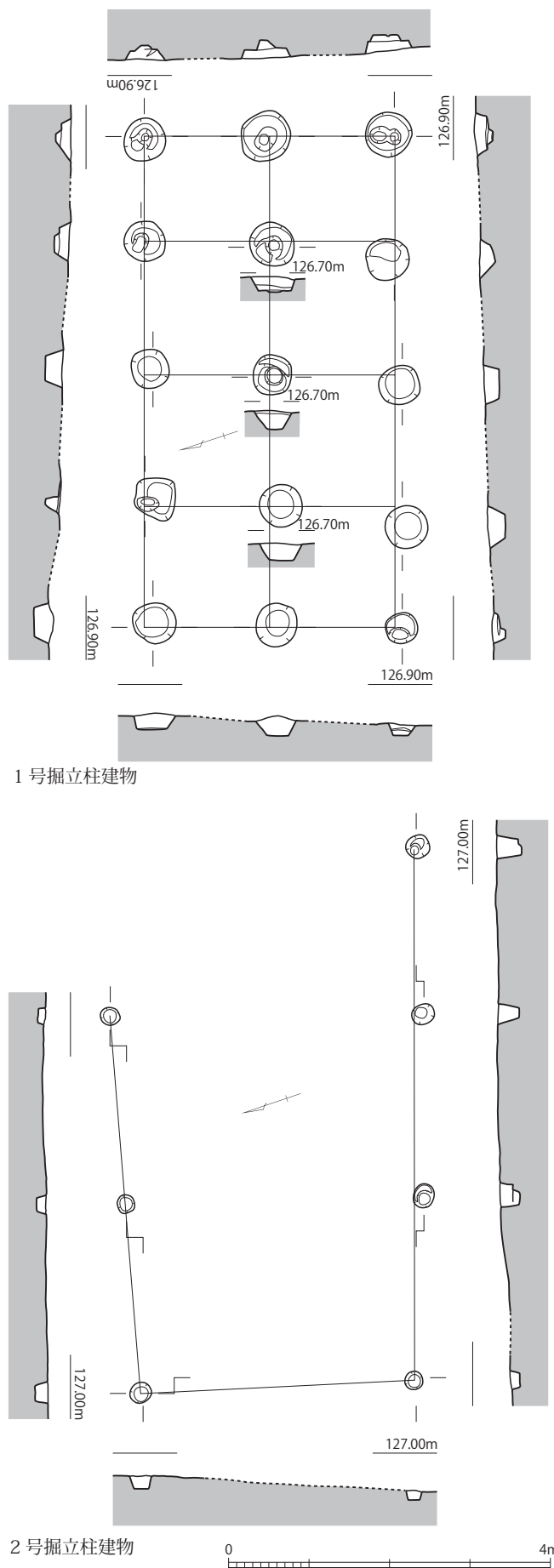
5号掘立柱建物（第10図）

3号掘立柱建物の南西側で確認され、1号溝を切る。主軸方向をN - 55° -Wに取り、柱間は桁行・梁行ともに2間である。規模は柱穴間の心々距離で桁行約 3.5 m、梁行 3.4 ～ 3.5 m、柱穴の大きさは径 15 ～ 50cm、検出面からの深さは 20 ～ 70cmを測る。

遺物は出土しなかった。

6号掘立柱建物（第10図）

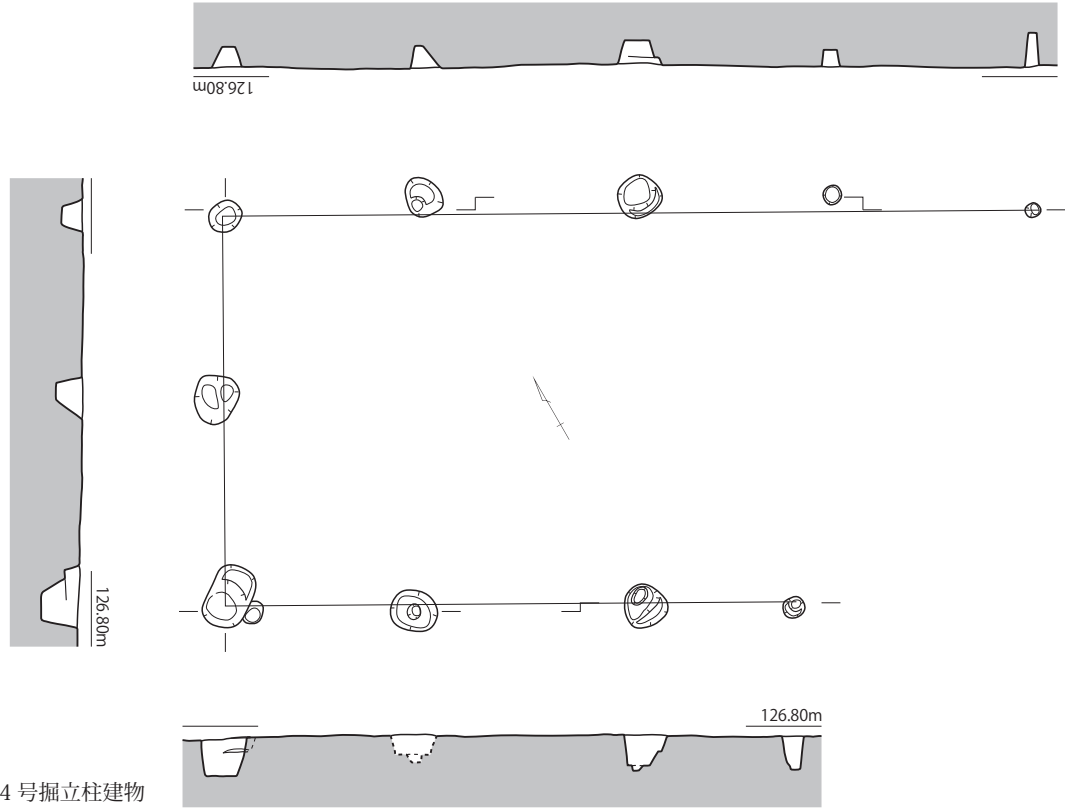
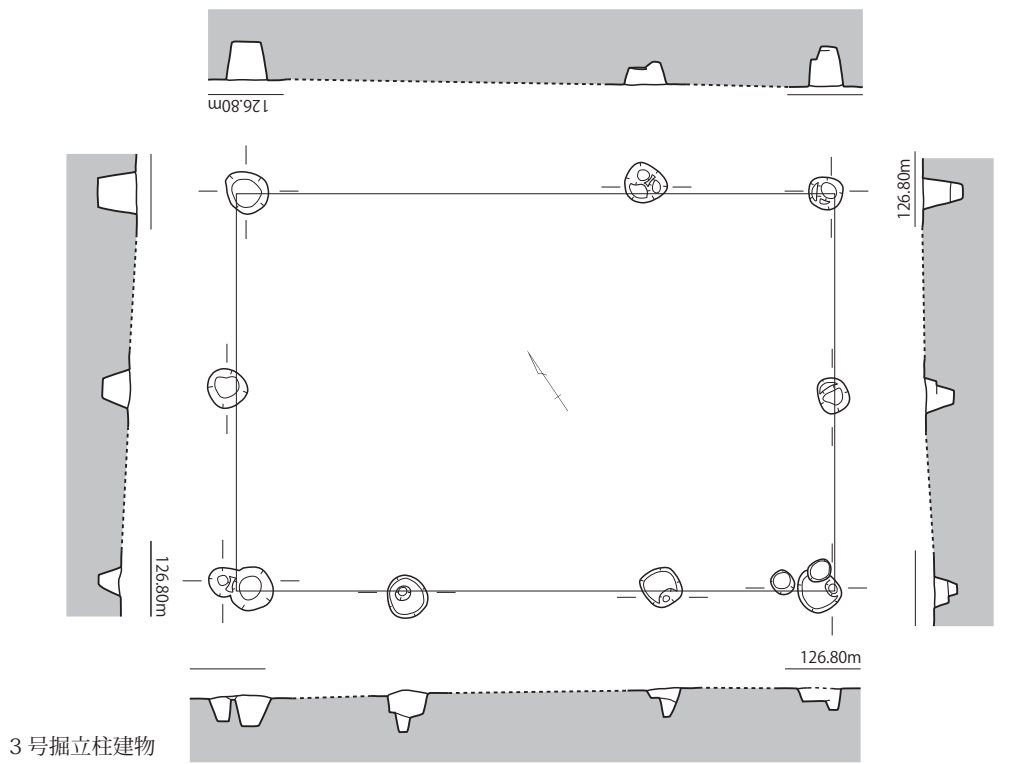
調査区の東壁際中央付近での南西側で確認された。主軸方向をN - 88° -Wに取り、柱間は桁行・梁行ともに2間である。規模は柱穴間の心々距離で桁行 5.0 ～ 5.7 m、梁行約 4.2 m、柱穴の大きさは径 40 ～ 60cm、検出面からの深さは 20 ～ 90cmを測る。なお、北辺



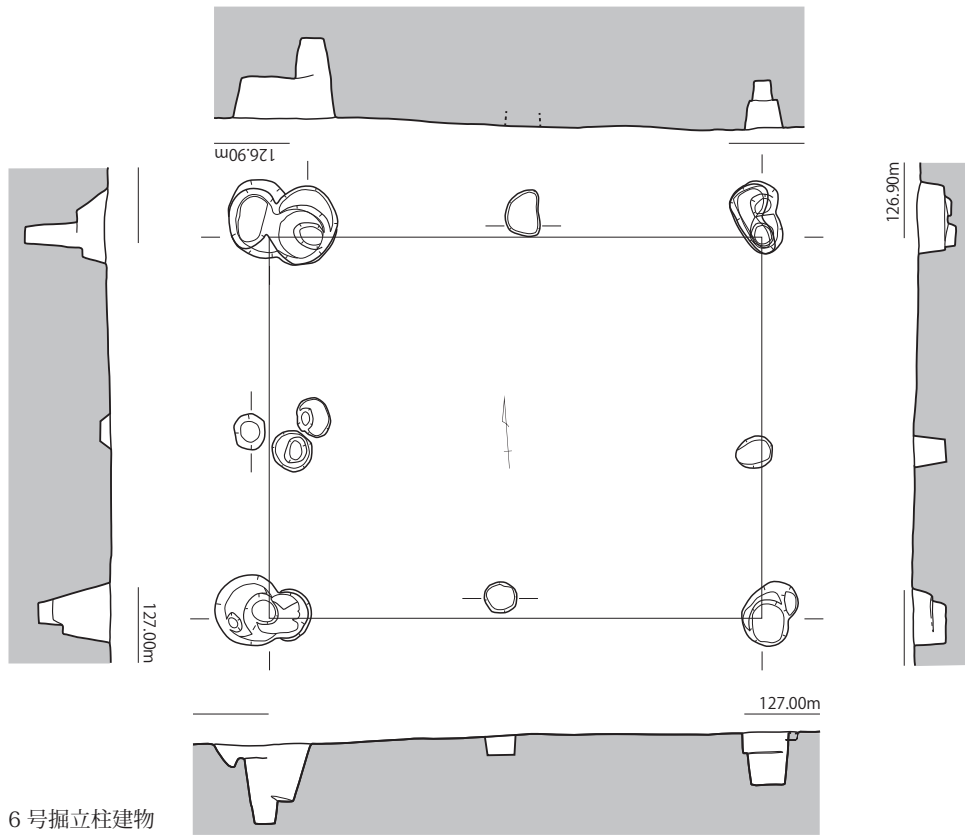
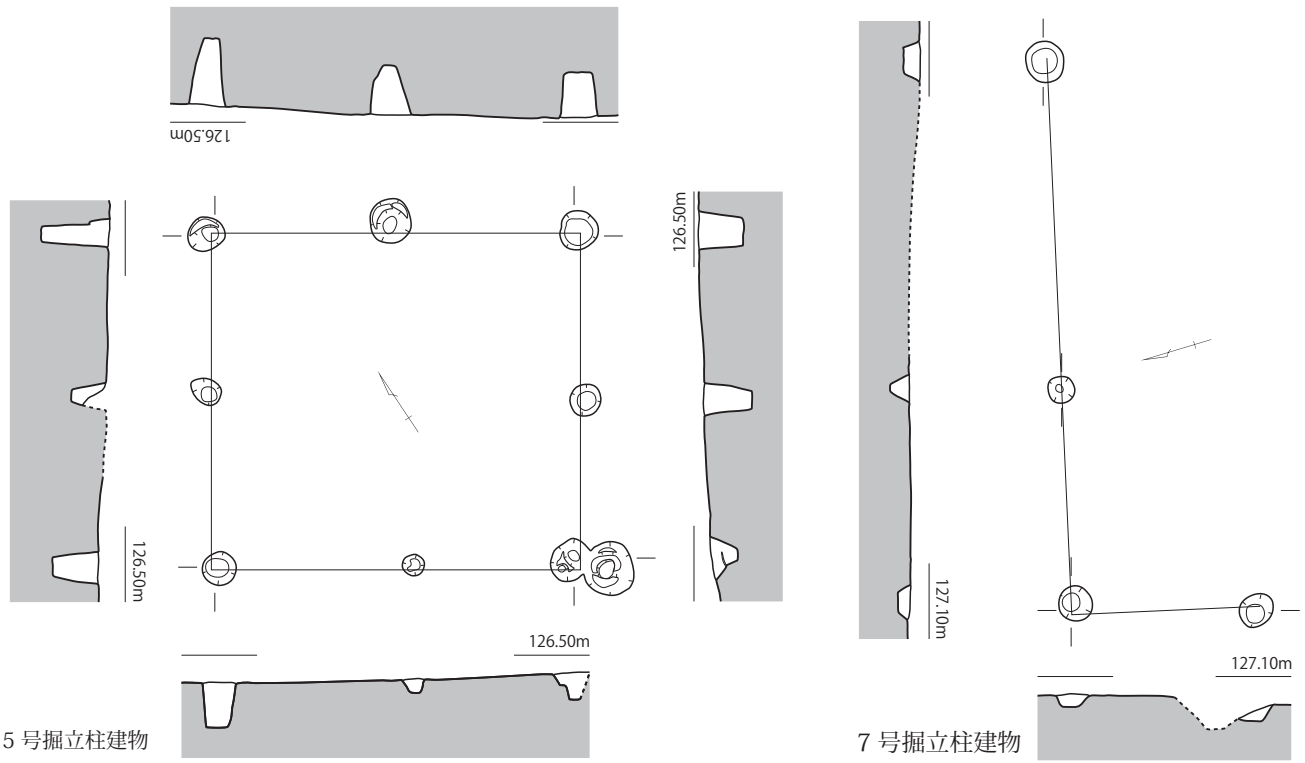
1号掘立柱建物

2号掘立柱建物

第8図 A区1・2号掘立柱建物実測図 (1/80)



第9图 A区3·4号掘立柱建物实测图 (1/80)



第10图 A区5~7号掘立柱建物实测图(1/80)

の中央の柱はレベルを計測しなかったため、深さは不明である。

遺物は出土しなかった。

7号掘立柱建物（第10図）

調査区の南東側で確認され、2号竪穴建物・1号溝を切る。主軸方向をN - 75° -Wに取り、柱間は桁行2間以上×梁行1間以上で、それぞれ東側・西側に広がると想定される。確認できた規模は柱穴間の心々距離で桁行6.1 m + α 、梁行2.1 m + α 、柱穴の大きさは径30～50cm、検出面からの深さは10～25cmを測る。

遺物は出土しなかった。

3. 土坑

1号土坑（第11図）

調査区中央よりやや西側で確認され、4号土坑を切り、1号掘立柱建物に切られる。平面形はやや歪な楕円形を呈し、床面は中央部分がやや低くなっている。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約3.3 m、短軸約2.6 m、検出面からの深さは約10cmを測る。

遺物は出土しなかった。

2号土坑（第11図）

調査区中央付近で確認され、4号竪穴建物に切られる。平面形はやや歪な楕円形を呈し、床面は平坦でほぼ水平である。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.6 m + α 、短軸約1.1 m、検出面からの深さは約10cmを測る。

遺物は弥生土器の甕（第12図1）が出土している。

3号土坑（第11図）

4号竪穴建物の東側で確認された。平面形はやや歪な隅丸方形を呈し、床面は東から西に向かってわずかに傾斜する。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約2.6 m、短軸約2.2 m、検出面からの深さは約25cmを測る。

遺物は中央付近において、礫とともに弥生土器の甕・器台（第12図2～4）などが出土している。

4号土坑（第11図）

調査区南西で確認され、1号土坑に切られ、1号溝を切る。平面形はやや歪な円形を呈し、床面は西から東に向かって緩やかに傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約3.0 m、短軸約2.0 m + α 、検出面からの深さは約10cmを測る。

遺物は弥生土器甕（第12図5）などが出土している。

5号土坑（第11図）

調査区の北西側で確認され、北側は調査区外へ広がる。平面形は楕円形を呈するものと思われ、床面は北へ向かって上がっている。規模は短軸1.1 m + α 、検出面からの深さは約110cmを測る。

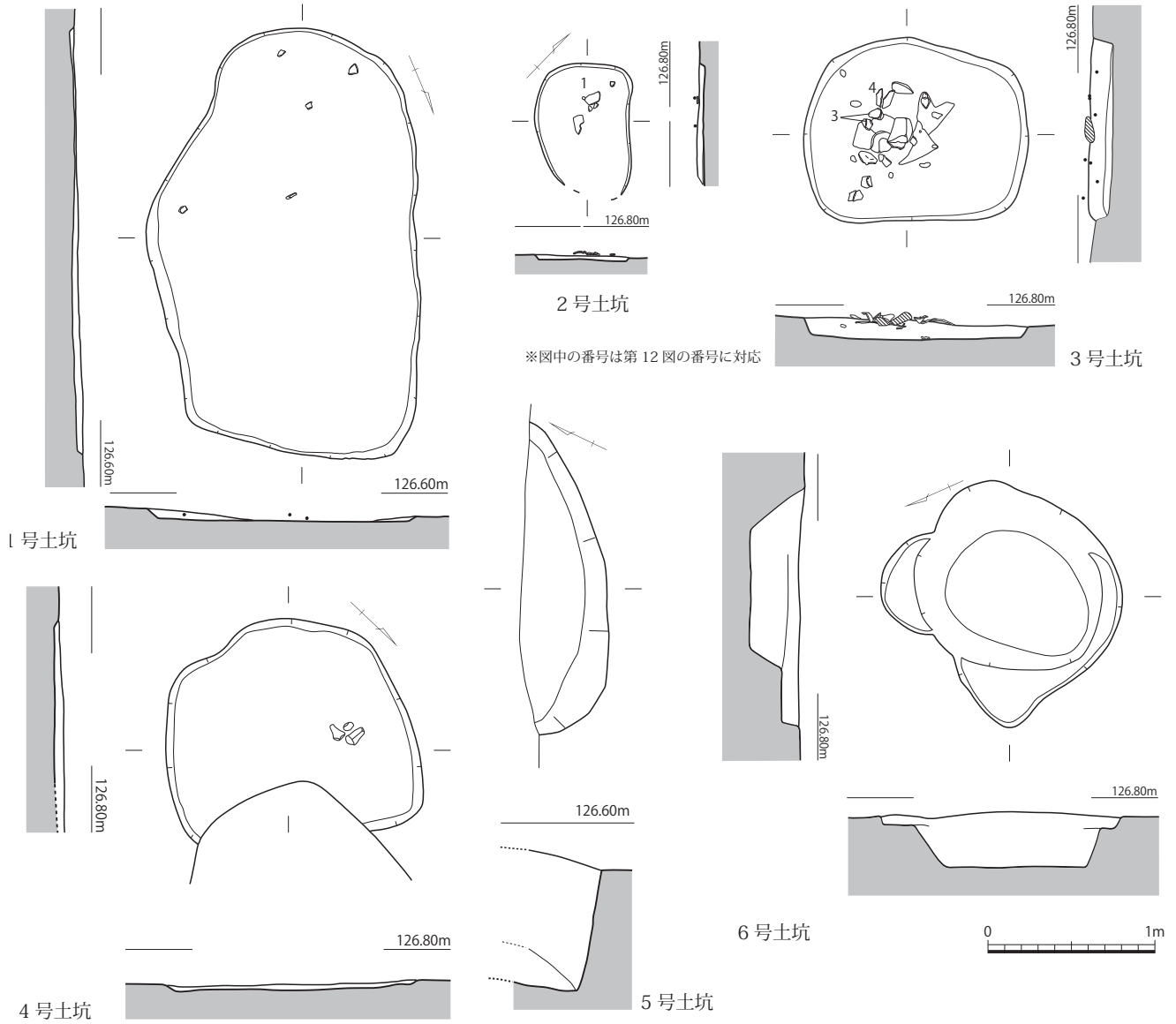
遺物は出土しなかった。

6号土坑（第11図）

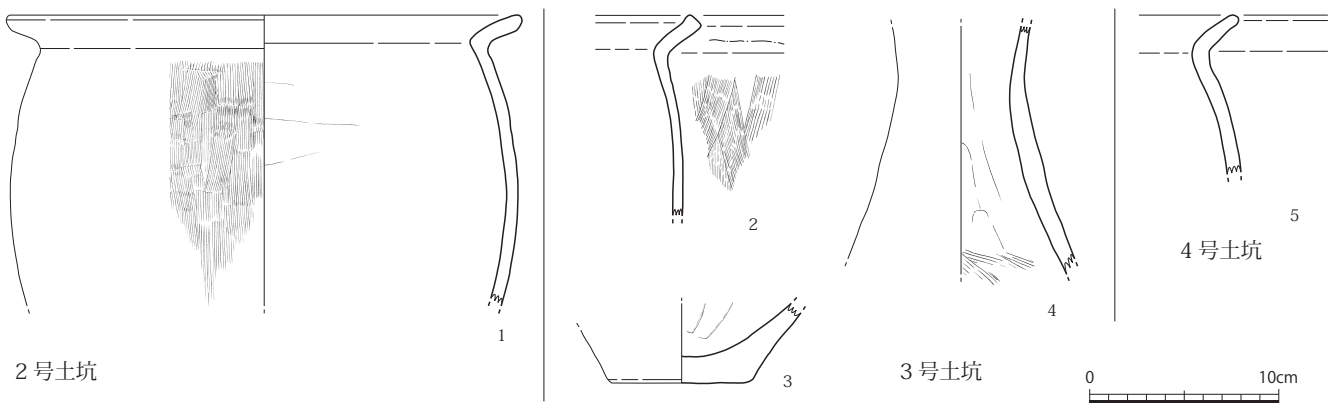
6号掘立柱建物の北側で確認された。平面形は歪な円形を呈し、2個のピットを切っていると思われる。床面はほぼ水平で、壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸・短軸ともに約2.9m、検出面からの深さは1段目のピット底までが約20cm、2段目までが約60cmを図る。

遺物は弥生土器片が出土しているが図化可能なものはなかった。

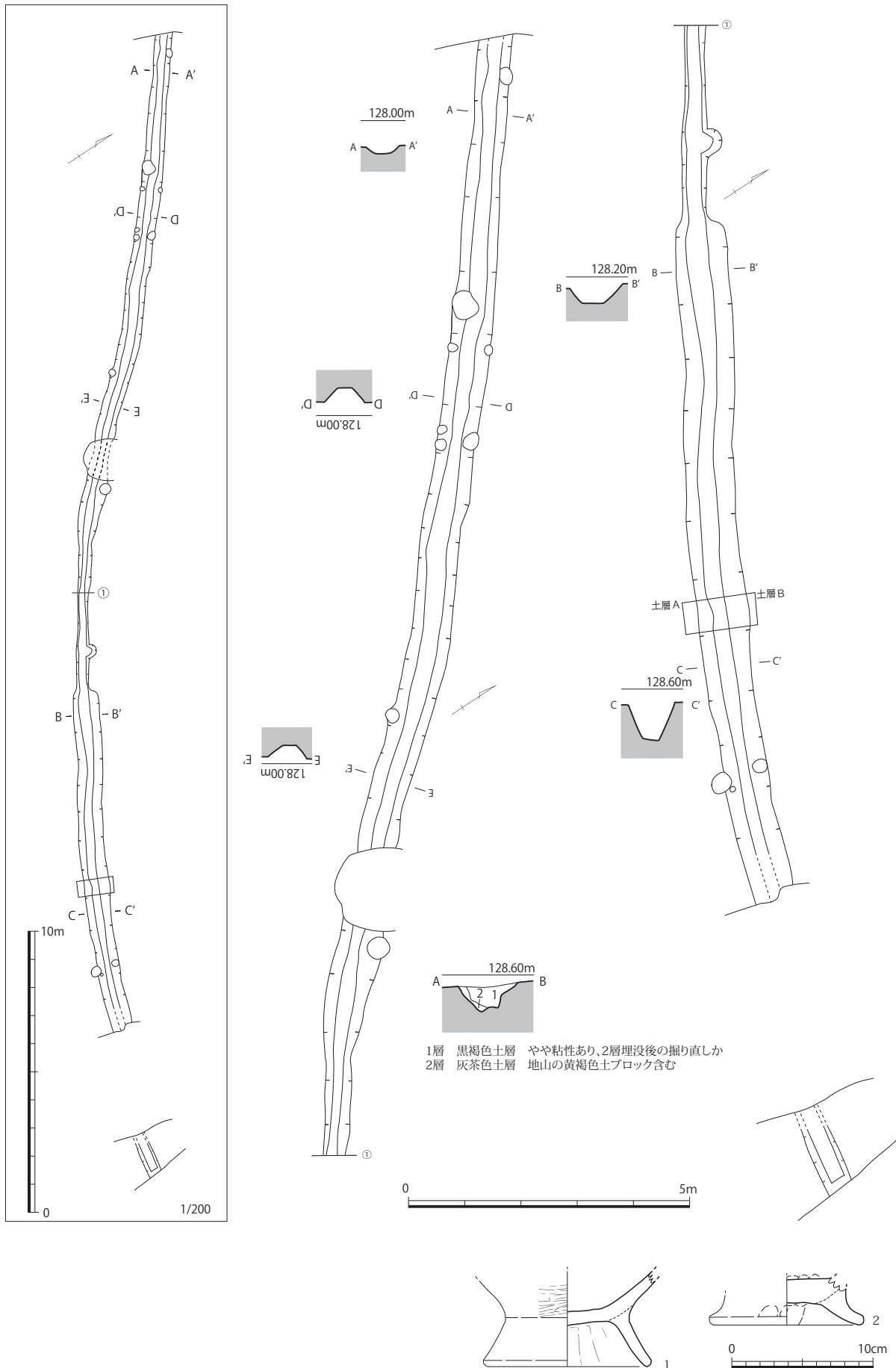
4. 溝



第11図 A区土坑実測図 (1/40)



第12図 A区土坑出土遺物実測図 (1/4)



第13図 A区1号溝実測図(1/100)及び出土遺物実測図(1/4)

溝は、調査区の南西壁際に並行して走る1号と北壁際に掘り込まれた2・3号の3条が確認された。このほか、遺構配置図には溝状に図化しているものもあるが、深さが数cmと非常に浅く、溝とするには根拠に乏しいため、遺構としては扱っていない。

1号溝 (第13図)

調査区の南西壁際に沿って確認され、1・2・6号竪穴建物、1・5・7号掘立柱建物、4号土坑に切られる。調査区内での長さは約21.4m、幅は約0.6～1.0mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは約20～80cmを測る。溝の傾斜は南東から北西に向かって下がっている。

遺物は弥生土器台付甕(第13図1・2)が出土している。

2号溝 (第14図)

調査区の北壁際中央付近で確認され、3号溝を切る。南側の先端のみが確認され、北側は調査区外となる。また、東西方向も調査区外へ延びる。

調査区内で確認された長さは約9.1m、幅は約0.5m前後を測る。断面形は逆台形を呈し、深さは約60cmを測る。

遺物は土器片が出土しているが図化可能なものはなかった。

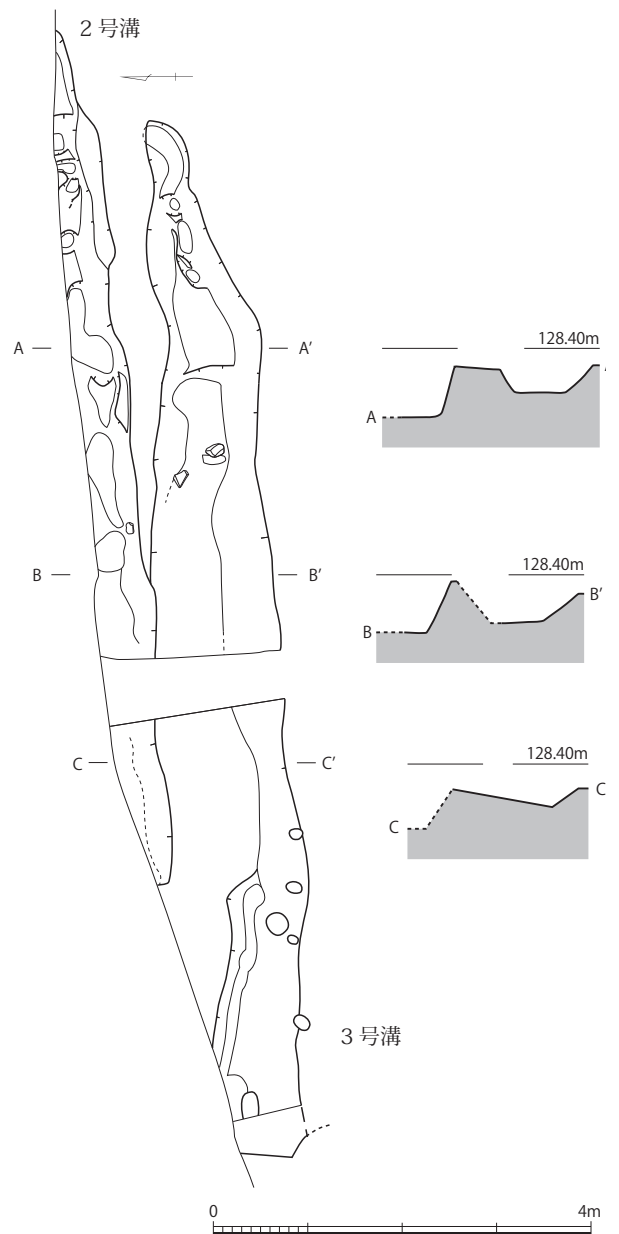
3号溝 (第14図)

調査区の北壁際中央付近で確認され、2号溝に切られ、西側は調査区外へ延びる。調査区内での長さは約10.5m、幅は確認できた部分で約1.3mであるが、西側は1.6m以上を測る部分もある。断面形は逆台形を呈し、深さは約30～40cmを測る。

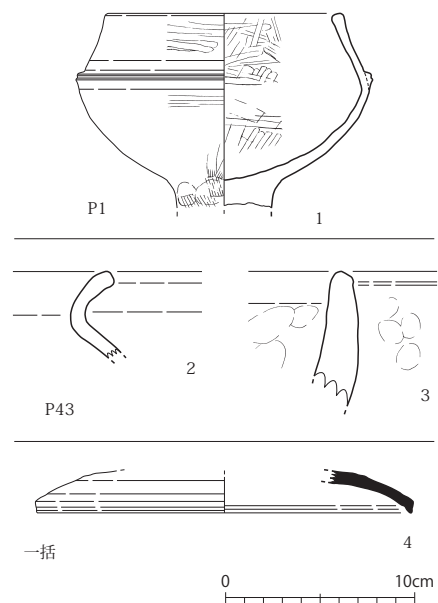
遺物は出土していない。

5. 出土遺物 (第5・12・13・15図 図版8)

A区での出土遺物は、全体的に少なく、図化可能なものも少ない。その中でも竪穴建物からの遺物は多く見られる。1～3号竪穴建物から8世紀の遺物が出土しており、2・3号土坑からは弥生時代中期の遺物が出土している。また、ピットからは弥生土器が出土しており、A区のピット群はこの時期と考えられる。なお、土器の詳細については、第1表の観察表を参照されたい。よって、土器・石器以外の遺物はここで記述する。第5図12は3号竪穴建物出土の土製の投弾で、一部に黒斑が見られる。長さ4.1cm、幅2.2cm、重さ20.3gである。



第14図 A区2・3号溝実測図(1/80)



第15図 A区その他の出土遺物実測図(1/4)

(3) C区の遺構と遺物 (第16・17図 図版2)

C区はB区を挟んでA区の南側にあり、A区同様に三角形状を呈する調査区(調査面積1,188㎡)で、地形は東方向から北西方向に向かって傾斜している。このうち、標高が最も低い北西側で3棟の掘立柱建物、1条の溝、数基の土坑、南西側で10軒の竪穴建物、5棟の掘立柱建物、1条の溝、土坑数基、東側で溝4条、北東壁際中央付近で、竪穴建物1軒、土坑数基が確認された。中央付近は南寄り掘立柱建物1棟が確認されたほかは、ピットが数十個検出された。

C区では1層、5層、7層は灰色系の粘質土層で、その下位において鉄分の付着が見られることから、水田基盤土及び水田層と判断した。この水田層からは青磁(第45図)が出土しているが、平面的に範囲を把握することができていない。なお、10・11層の灰白色及び白色粘質土層が遺構検出面に相当する土層である(第16図)。

1. 竪穴建物

竪穴建物は調査区中央付近から南側で13軒確認された。この内、1～4号竪穴建物は、近接して切り合っていたことから、遺構番号にそれぞれA・BもしくはA・B・Cを付している。

1号A竪穴建物(第18図 図版3)

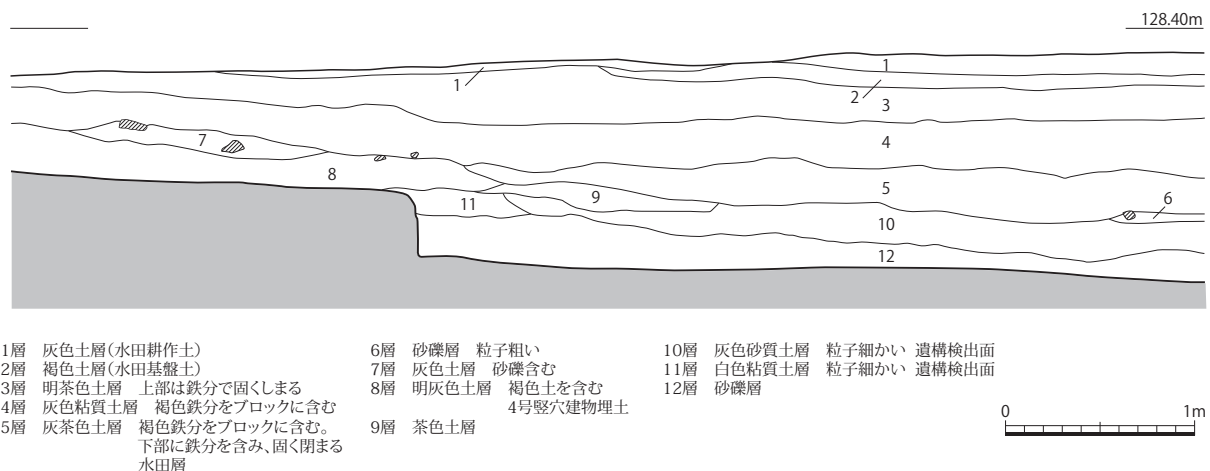
調査区の南側で確認され、1号B竪穴建物を切る。平面形は方形を呈し、規模は南北軸約2.5m、東西軸約3.0m、検出面からの深さは20～30cmを測る。床面には数個のピットが確認され、P1とP2を主柱穴と判断した。また、北壁中央よりやや東寄りにカマドが敷設されており、突出部がわずかに見られる。両袖は一部が残存していたが、袖石は確認されず、抜き取り痕と思われるピットを検出した。両袖の内側には、火床面が確認された。カマドの規模は左袖が長さ40cm、右袖が長さ36cm、袖間の幅は奥壁側で約30cm、袖の手前側で約60cmを測る。なお、突出部まで含めた長さは約60cmである。

また、この建物は埋土中より大量の焼土・炭が検出された。これらは床から浮いた状態にあったことから、建物の埋没過程で火を使用した廃棄行為の可能性が考えられる。

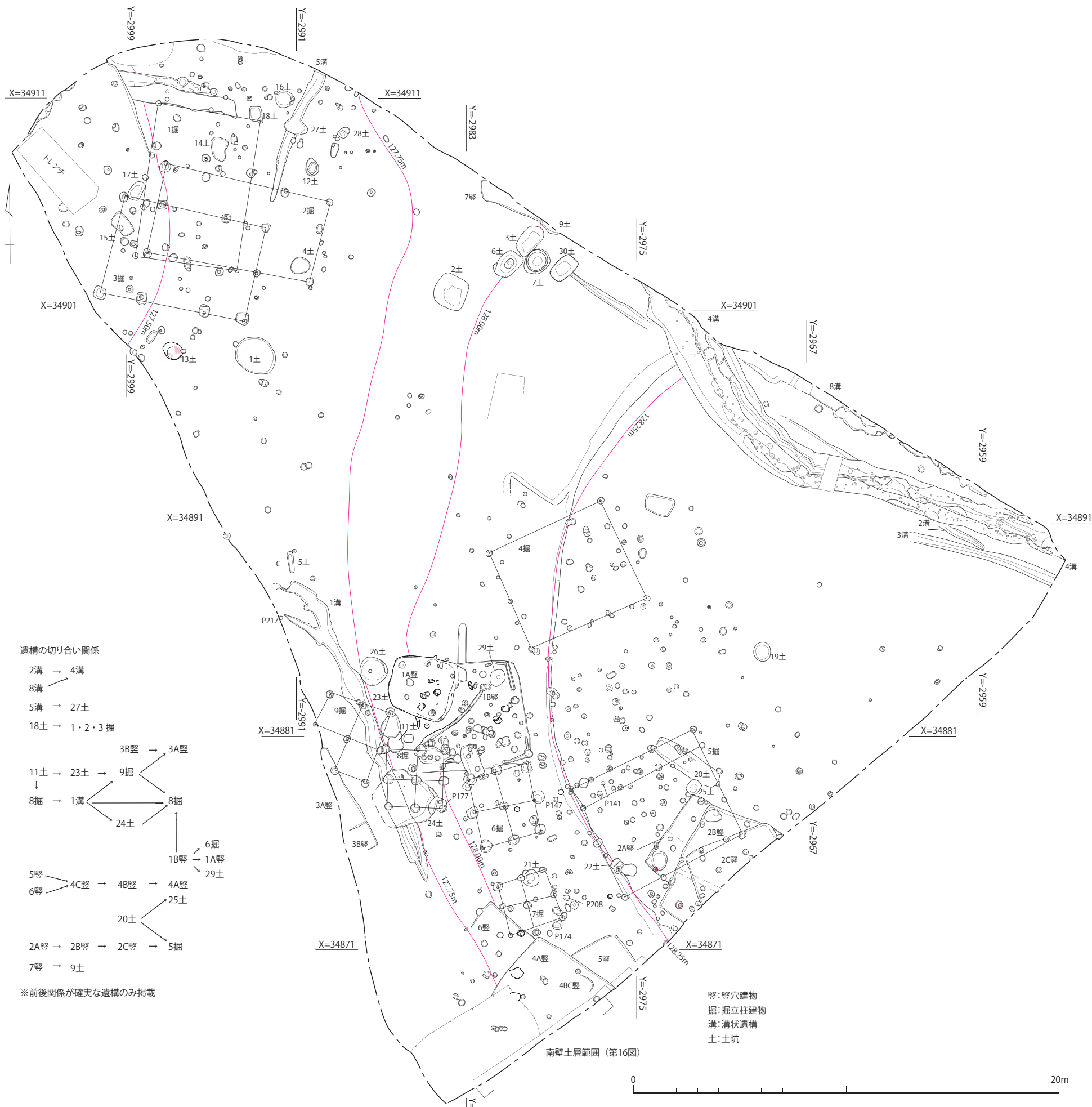
遺物は土師器甕(第19図11・12・14)や土師器高坏(同図8・9)などが出土している。

1号B竪穴建物(第20図 図版3)

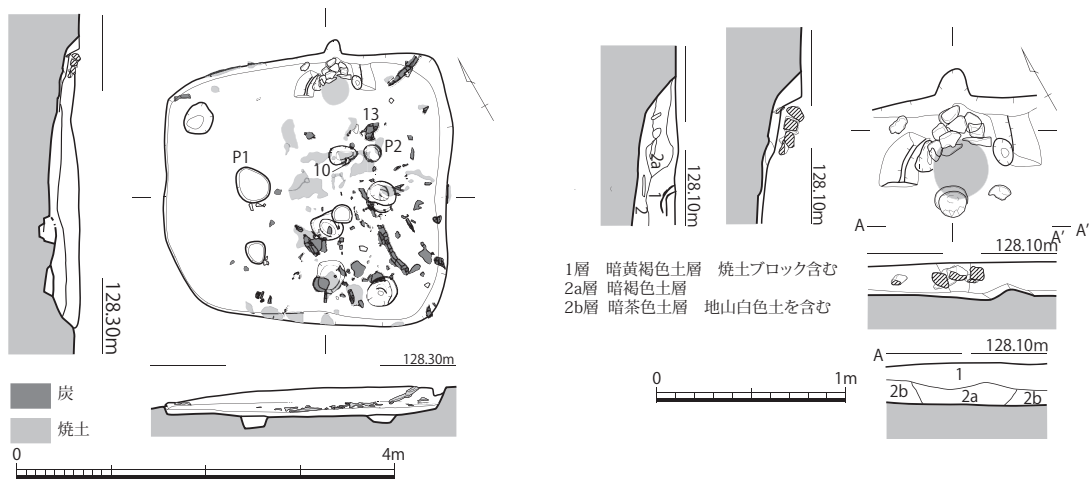
調査区の南側で確認され、1号A竪穴建物、6・8号掘立柱建物、29号土坑に切られる。平面形は方形を呈し、確認された規模は、南北軸約4.1m、東西軸約4.4m、検出面からの深さは約10cmを測る。床面には多数のピットが確認され、位置関係や深さから1号Aに切られたP1及びP2～4を主柱穴と判断した。このほか、北東・南東と西側の一部では、壁際溝が確認され、床面中央付近を北東-南西方向に掘り込む溝も確認された。



第16図 C区南壁土層実測図(1/40)

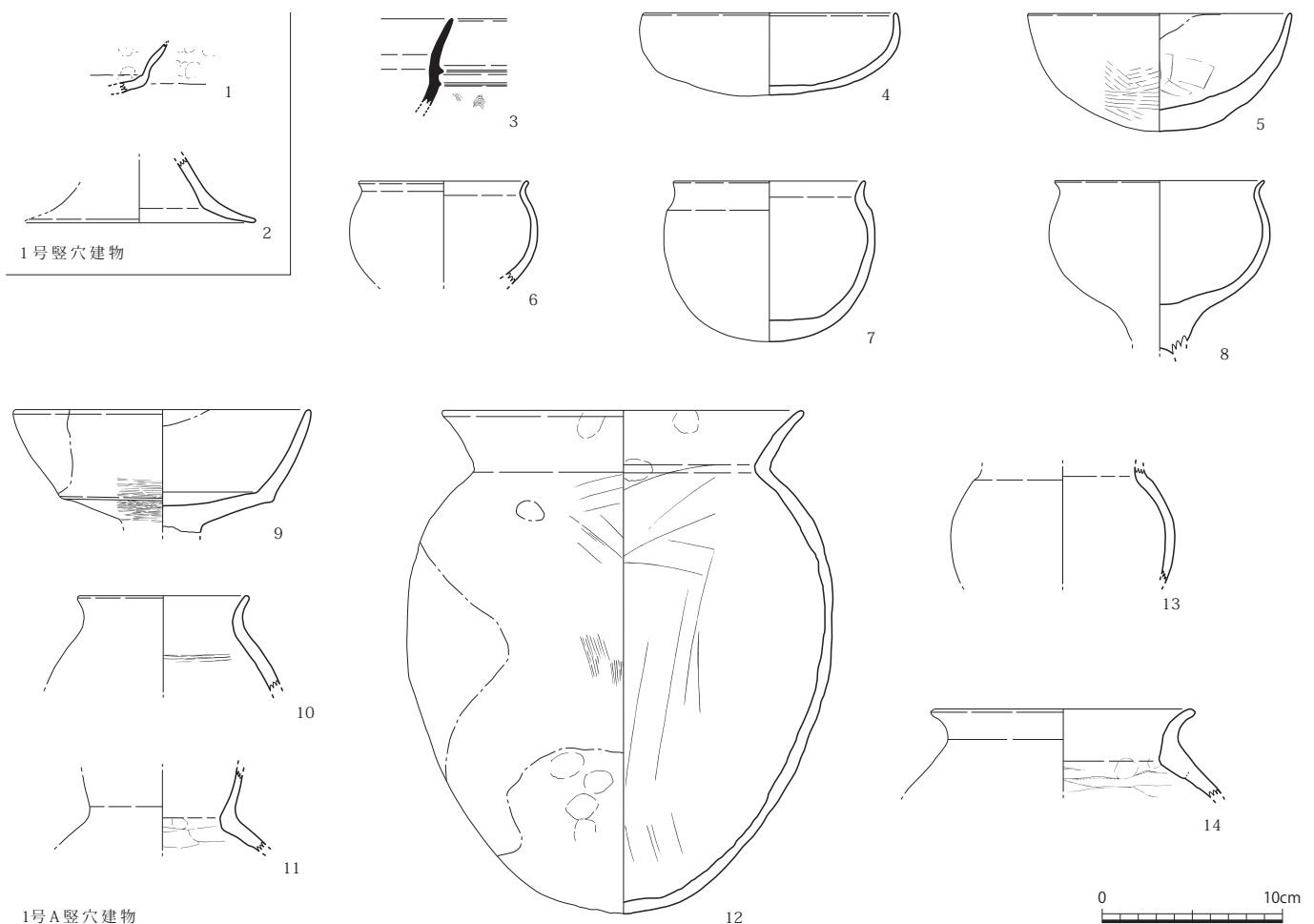


第17図 C区遺構配置図 (1/200)



※図中の番号は第19図の番号に対応

第18図 C区1号A竪穴建物実測図 (1/80、カマド 1/40)

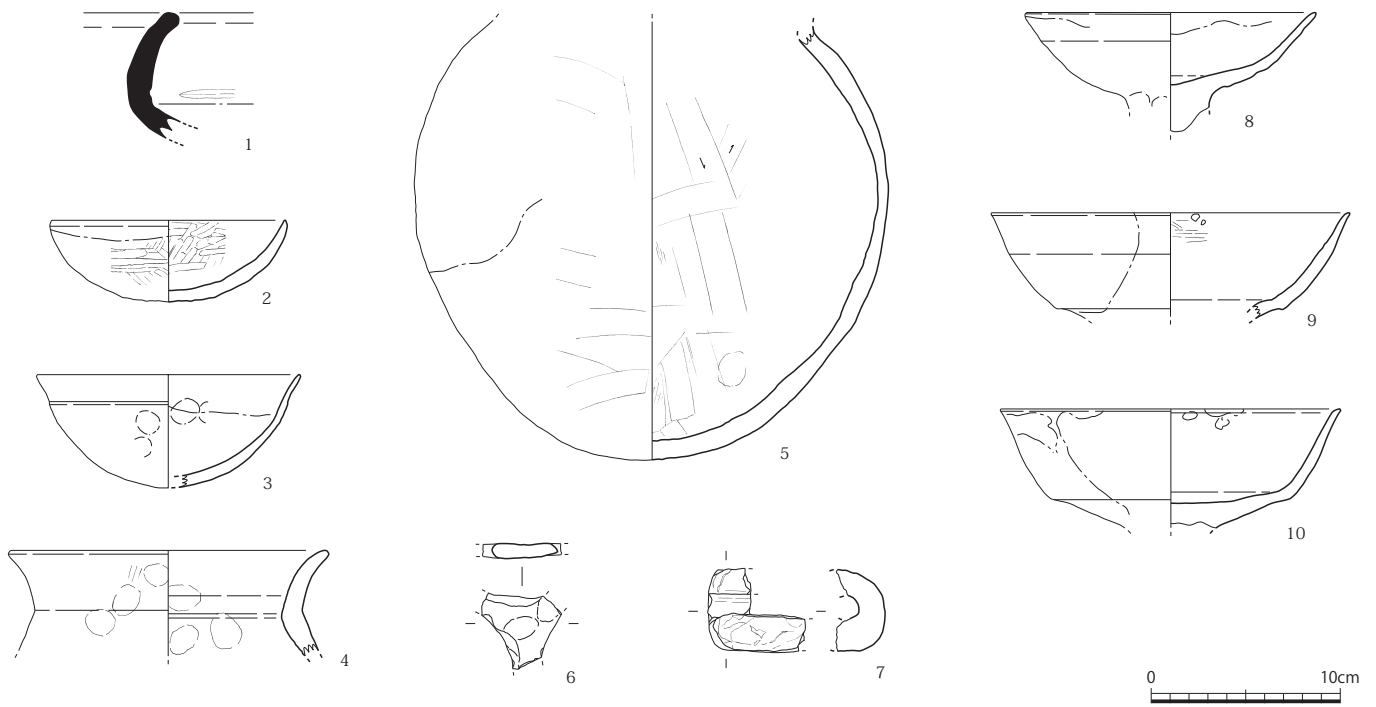


第19図 C区1号A竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

また、北壁から約1m手前でカマドの袖状に広がる焼土を確認した。支脚や袖石、その抜き取り痕などの痕跡は確認できなかったが、北壁より外側に約1.5m延びる突出部が煙道になる可能性がある。焼土の広がりなどから推定できるカマドの規模は、左袖が長さ約40cm、右袖が長さ約50cm、袖間の幅は奥壁側・手前側ともに約35cmを測る。なお、突出部まで含めた長さは約3.1mである。



第20図 C区1号B竪穴建物実測図 (1/80、カマド1/40)



第21図 C区1号B竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

遺物は土師器甕（第 21 図 4・5）、甑（同図 6）、坏（同図 2・3）や須恵器甕（同図 1）、轆羽口（同図 7）などが出土している。

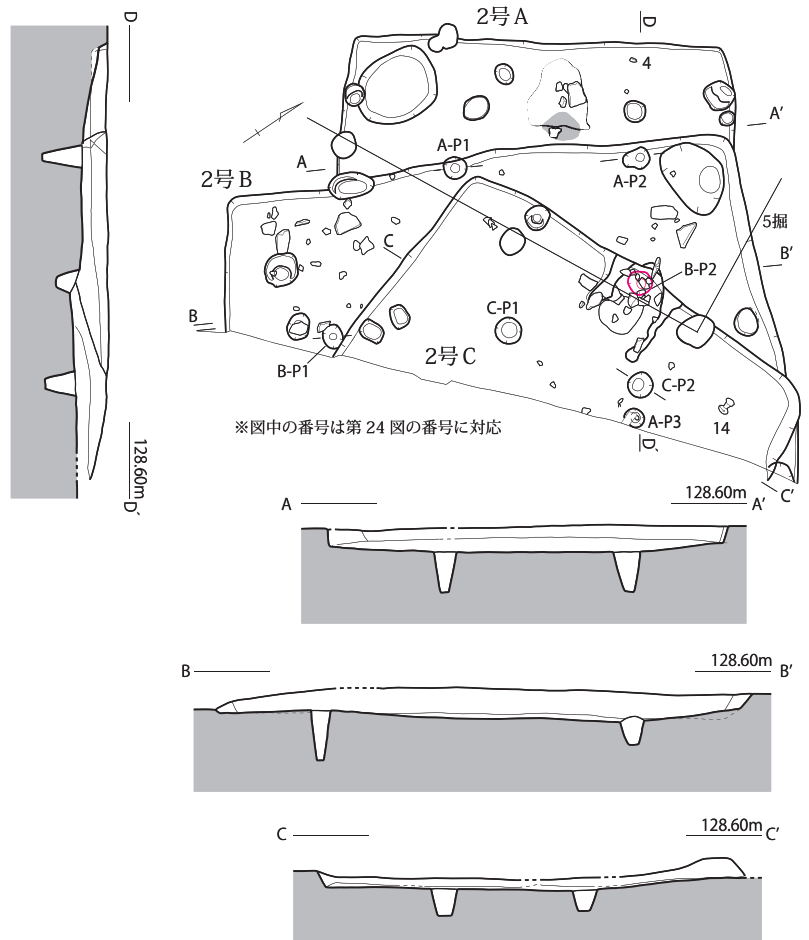
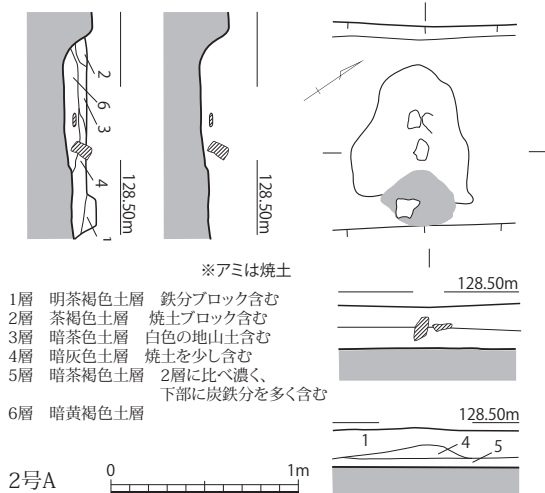
2号A 竪穴建物

（第 22～24 図 図版 3）

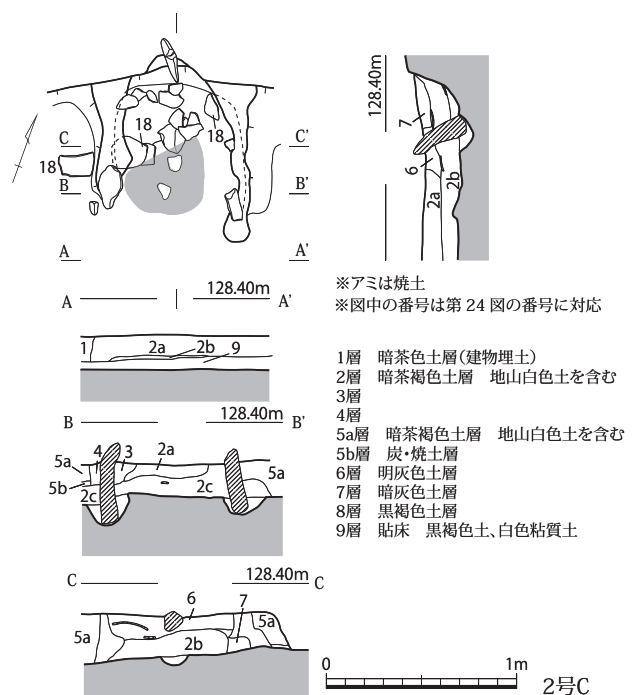
調査区の南東隅で確認され、2号B・2号C 竪穴建物、5号掘立柱建物に切られる。平面形は方形を呈する。また床面には数個のピットが確認されたが、P1～3を支柱穴と判断した。床面からの支柱穴の深さは約40cmを測る。調査区内で確認された規模は、北東 - 南西軸約4.2m、北西 - 南東軸は北西壁からP3までが約3.6m、調査区壁までが約4.1m、検出面からの深さは約30cmを測る。この他、西隅には屋内土坑が掘り込まれていた。

また、北西壁中央付近にはカマドが敷設されていた。突出部は確認されていない。中央付近に支脚とみられる石材は確認できず、袖や袖石は確認できず、完全に破壊されたものと考えられる。なお、抜き取り痕は確認されていない。手前には火床面が検出された。カマドの規模については、袖が確認されていないため、幅は不明であるが、長さは火床面約1.0mである。

遺物は土師器坏（第 24 図 5）や須恵器器台（同図 4）が出土している。



第 22 図 C区2号A・B・C 竪穴建物実測図 (1/80)



第 23 図 C区2号A・C 竪穴建物カマド実測図 (1/40)

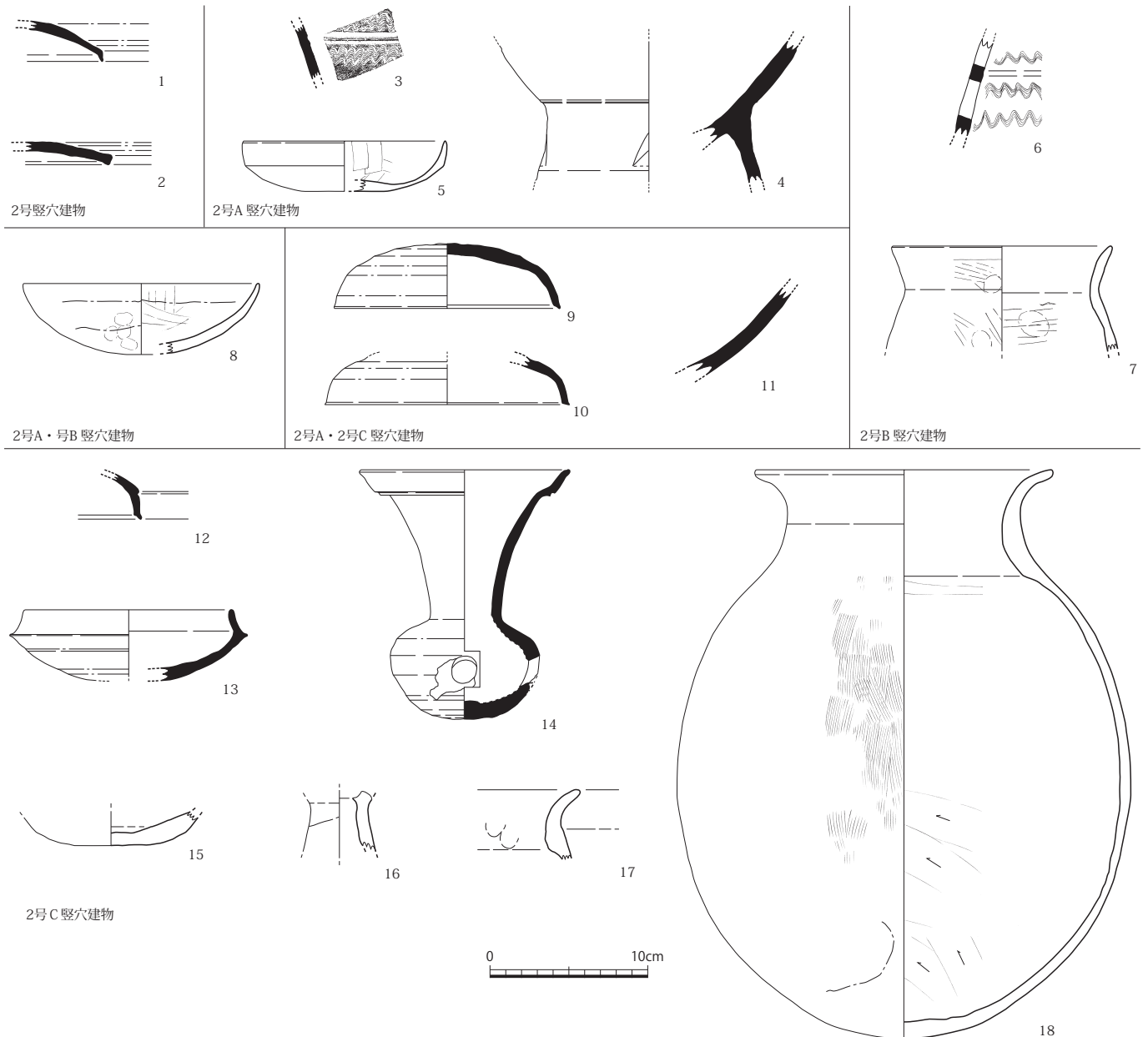
2号B 竪穴建物 (第 22・24 図 図版 3)

調査区の南東側で確認され、2号A 竪穴建物を切り、2号C 竪穴建物、5号堀立柱建物に切られる。確認された規模は、北壁側で約 3.8 m、北東 - 南西軸が約 5.7 m、検出面からの深さは 30 ~ 40cm を測る。また、床面で確認されたピットのうち、2号B 竪穴建物内で確認された P 1 と 2号C 竪穴建物に切られた P 2 を支柱穴と判断した。床面からの支柱穴の深さは 30 ~ 60cm を測る。

遺物は土師器小型壺(第 24 図 7)や須恵器器台(同図 6)のほか、2号A 竪穴建物出土分と接合した土師器坏(同図 8)があるが、どちらの建物の遺物であるか不明である。

2号C 竪穴建物 (第 22 ~ 24 図 図版 3)

調査区の南東側で確認され、2号B 竪穴建物を切り、5号堀立柱建物に切られる。南側は調査区外へ広がる。平面形は方形を呈し、調査区内で確認された規模は、西壁で約 $2.5\text{ m} + a$ 、東西軸約 4.4 m、検出面からの深さは 20 ~ 30cm を測る。また床面には数個のピットが確認されたが、P 1・P 3 を支柱穴と判断した。床面からの支柱穴の深さは 25 ~ 30cm を測る。



第 24 図 C 区 2 号 A・B・C 竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

また、北壁中央付近ではカマドが敷設されており、突出部がわずかに見られる。両袖はほぼ残存しており、両袖石は確認された。両袖の内側には、火床面が検出され、支脚は確認できなかった。カマドの規模は左袖が長さ約 80cm、右袖が長さ約 85cm、袖間の幅は奥壁側で約 65cm、袖の手前側で約 70cmを測る。なお、突出部まで含めた長さは約 1.2 mである。

遺物は土師器甕（第 24 図 18）、須恵器蓋坏（同図 12・13）、甕（同図 14）などが出土している。カマド内から出土した土師器甕については、ブロック状の埋土中の上位より出土しており、カマドを廃棄する際の祭祀の過程で使用されたものと考えられる。

3号A 竪穴建物（第 25 図 図版 4）

調査区の南西壁際で確認され、3号B 竪穴建物、9号掘立柱建物を切る。西側は削平を受けており、調査区外へ広がる。平面形は方形を呈し、調査区内で確認された規模は、南北軸約 4.2 m、南壁側約 $1.4\text{ m} + \alpha$ 、検出面からの深さは 10 ~ 15cmを測る。床面ではピットや壁際溝等は検出されず、支柱穴は調査区外に存在する可能性はある。

遺物は土師器坏（第 26 図 1）が出土している。

3号B 竪穴建物（第 25 図 図版 4）

調査区の南西側で確認され、3号A 竪穴建物に切られる。削平を受けており、西側は調査区外へかかる。平面形は方形を呈するものと思われ、調査区内で確認された規模は、東壁側約 $1.2\text{ m} + \alpha$ 、南壁側約 $0.6\text{ m} + \alpha$ 、検出面からの深さは約 10cmを測る。床面ではピットや壁際溝等は検出されず、支柱穴は調査区外に存在する可能性はある。

遺物は出土しなかった。

4号A 竪穴建物（第 25 図 図版 4）

調査区南端の中央付近で確認され、4号B・4号C・5・6号竪穴建物を切る。また、南西側は攪乱を受けて、削平され、南側は調査区外にかかる。平面形は方形を呈すると思われ、調査区内で確認された規模は、北西 - 南東軸約 4.1 m、北東 - 南東軸約 $4.8\text{ m} + \alpha$ 、検出面からの深さは 40cmを測る。床面ではピットが数個確認されたが、P 1 と削平を受けた部分の P 2 が支柱穴となる可能性がある。

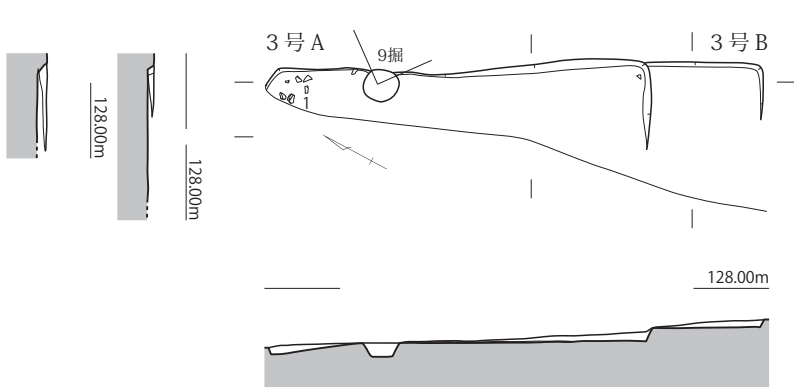
4号B 竪穴建物（第 25 図 図版 4）

調査区南端の中央付近で確認され、4号A 竪穴建物に切られ、4号C・5号・6号竪穴建物を切る。東側の壁際溝の一部が確認され、その南西側でカマドが敷設されていた。平面形は方形を呈すると思われ、調査区内で確認された規模は、北東壁が約 $1.2\text{ m} + \alpha$ 、南東壁は約 1.8 mのみ、壁際溝が確認されていないが、東隅からカマドまでの距離が約 3.7 mであるので、カマドが壁中央にあると想定するなら、南東壁の長さは約 7.4 mとなる。また、検出面からの深さは数cmである。支柱穴について確認できなかった。

また、カマドについては火床面及びその両側に石の抜き取り痕が確認され、幅は約 55cmを測る。

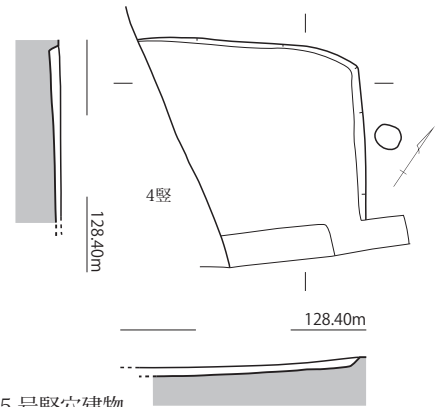
4号C 竪穴建物（第 25 図 図版 4）

調査区南端の壁際中央付近で確認され、4号A・4号B 竪穴建物に切られ、5・6号竪穴建物を切る。南西側は攪乱を受けている。平面形は方形を呈すると思われ、調査区内で確認された規模は、北東壁が約 $2.9\text{ m} + \alpha$ 、

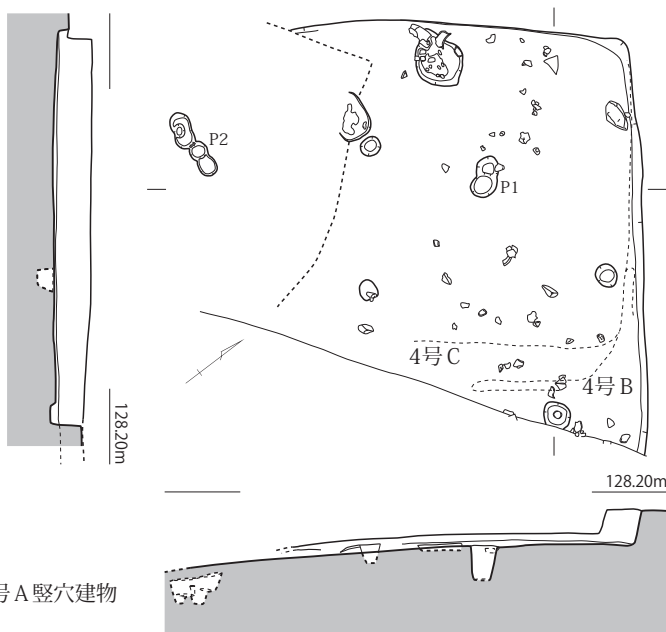


3号A・B 竖穴建物

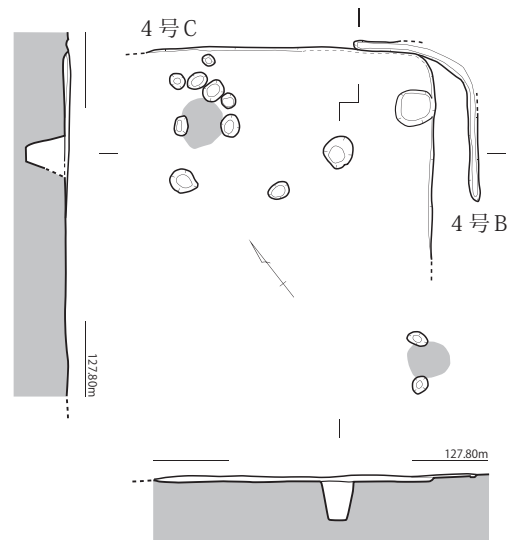
※図中の番号は第26図の番号に対応



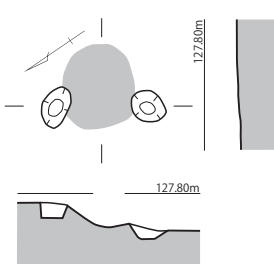
5号 竖穴建物



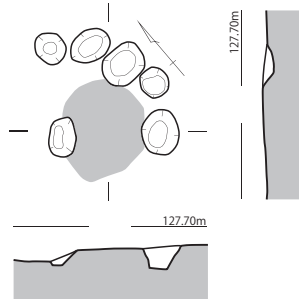
4号A 竖穴建物



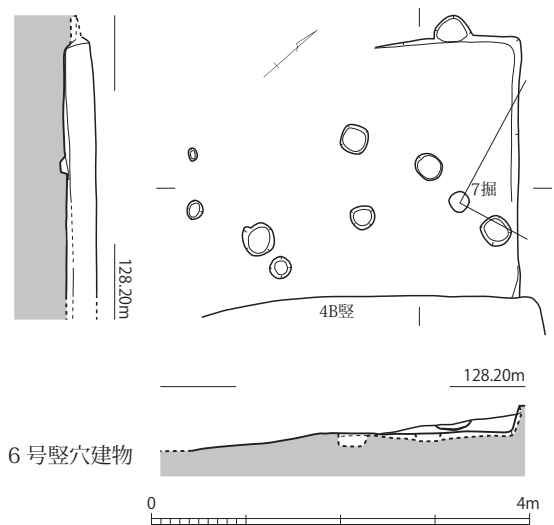
4号B・C 竖穴建物



4号B 竖穴建物カマド



4号C 竖穴建物カマド



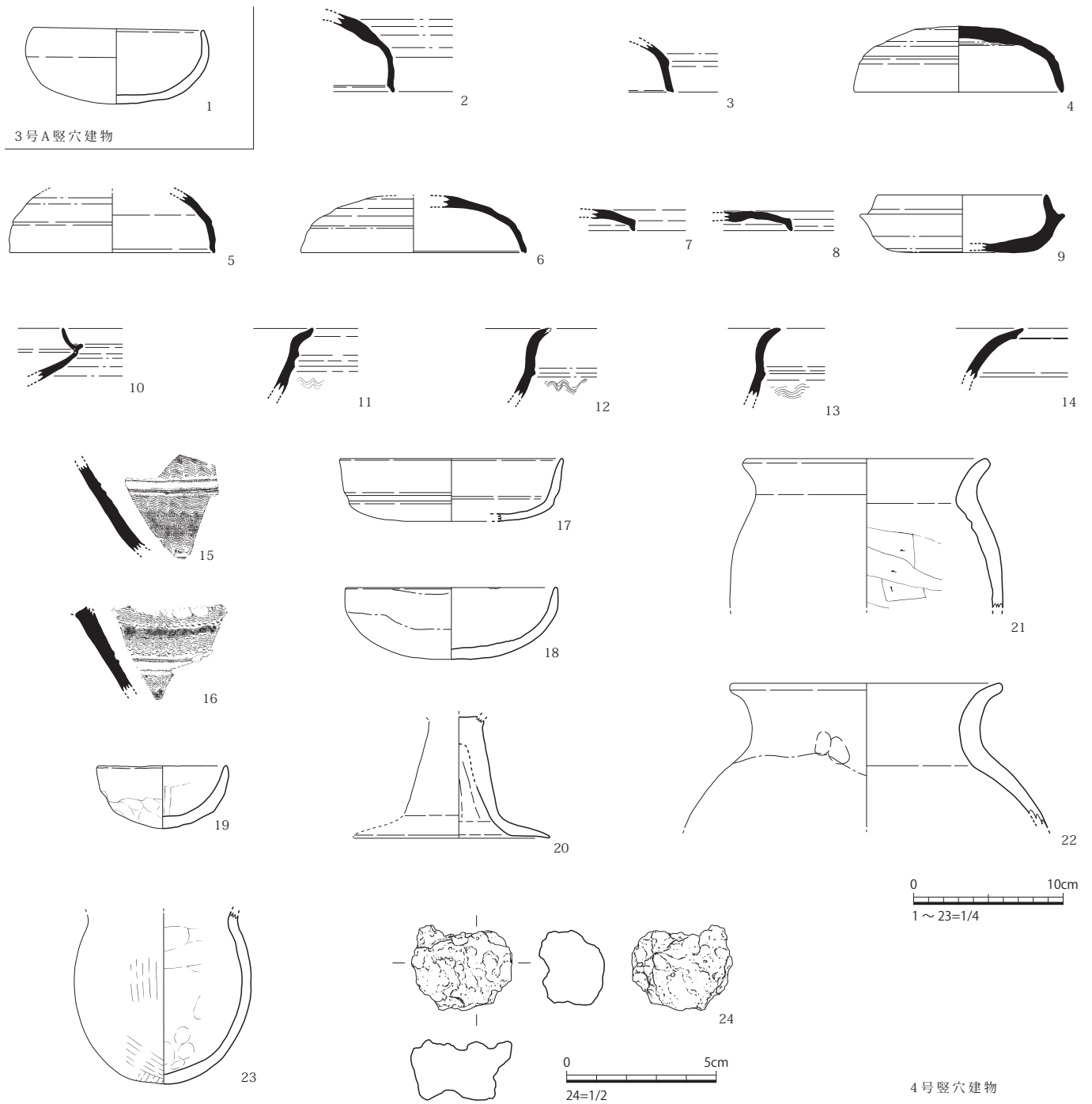
6号 竖穴建物



※アミは焼土



第25図 C区3～6号 竖穴建物実測図 (1/80・カマド 1/40)



第 26 図 C 区 3・4 号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4、23 のみ 1/2)

南東壁は約 2.2 m + α である。北東壁にはカマドが敷設されており、東隅からカマドまでの距離が約 2.4 m であるので、これが壁中央にあると想定するなら、北東壁の長さは約 4.8 m となる。また、検出面からの深さは約 10cm を測る。支柱穴については確認できなかった。

またカマドについては、火床面及びその周囲に支脚・袖石の抜き取り痕とみられるピットが確認された。袖石の抜き取り痕間の幅は約 55cm である。

以上、遺物は 4 号 A・B・C 竪穴建物と合わせ、土師器甕 (第 26 図 21・22)、坏 (同図 17・18)、高坏 (同図 20)、須恵器蓋坏・蓋 (同図 2～10)、鉄滓 (同図 24) などが出土している。調査中に把握できていない部分があり、3 軒のうち、どの建物から出土したかは不明である。

5号竪穴建物（第25図 図版4）

調査区の南側で確認され、4号B竪穴建物に切られ、南東側は調査区外へかかる。調査区内で確認された規模は、北西壁が約 $2.5\text{ m} + \alpha$ 、南東壁は約 $2.1\text{ m} + \alpha$ である。検出面からの深さは約10cmを測る。また床面からは、カマドや支柱穴・壁際溝等は確認できなかった。

遺物は出土しなかった。

6号竪穴建物（第25図 図版4）

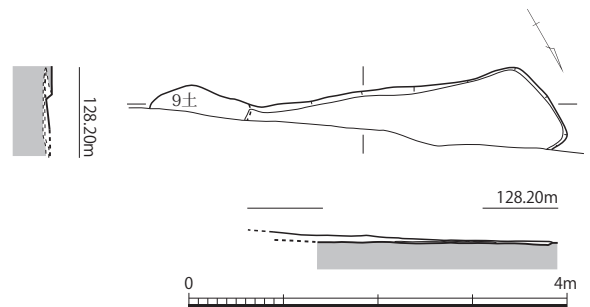
調査区の南側で確認され、南東側は4号B竪穴建物建物、北東側は7号掘立柱建物に切られる。南西側は削平を受けている。確認された規模は、北西壁が約 $1.4\text{ m} + \alpha$ 、南東壁は約 $2.6\text{ m} + \alpha$ である。検出面からの深さは約40cmを測る。また床面からは、カマドや支柱穴・壁際溝等は確認できなかった。

遺物は出土しなかった。

7号竪穴建物（第27図）

調査区北壁の中央付近で確認され、9号土坑に切られる。北側は調査区外へ広がるが、平面形は方形を呈すると思われる。規模は東西軸約 $3.3\text{ m} + \alpha$ 、南北軸約 $0.4\text{ m} + \alpha$ 、検出面からの深さは約10cmを測る。床面からは、カマドや支柱穴・壁際溝等は確認できなかった。

遺物は出土しなかった。



第27図 C区7号竪穴建物実測図（1/80）

2. 掘立柱建物

掘立柱建物は、調査区の北側で3棟、中央付近、南側でそれぞれ1棟、南西側で4棟確認された。このうち、南西側の6～9号掘立柱建物は、いずれも総柱の建物である。

1号掘立柱建物（第28図 図版5）

調査区西側付近で確認され、2・3号掘立柱建物、14・15・17・18号土坑と切り合うが、前後関係がわかるのは、18号土坑を切っていることのみである。主軸方向をN - 8° - Eに取り、柱間は桁行3間×梁行2間なのである。規模は柱穴間の心々距離で桁行7.2～7.3 m、梁行4.8～4.9 m、柱穴の大きさは径10～30cm、検出面からの深さは10～35cmを測る。

遺物は図化できるものはなかった。

2号掘立柱建物（第28図 図版5）

1号掘立柱建物とほぼ同位置で確認され、1号掘立柱建物の南側、3号掘立柱建物の北側及び4号土坑と切り合うが前後関係は不明である。主軸方向をN - 76° - Wに取り、柱間は桁行3間×梁行2間であるが、梁行東側は中央の柱穴が確認できていない。規模は柱穴間の心々距離で桁行7.8 m、梁行 $4.2\text{ m} + \alpha$ 、柱穴の大きさは径30～60cm、検出面からの深さは10～25cmを測る。

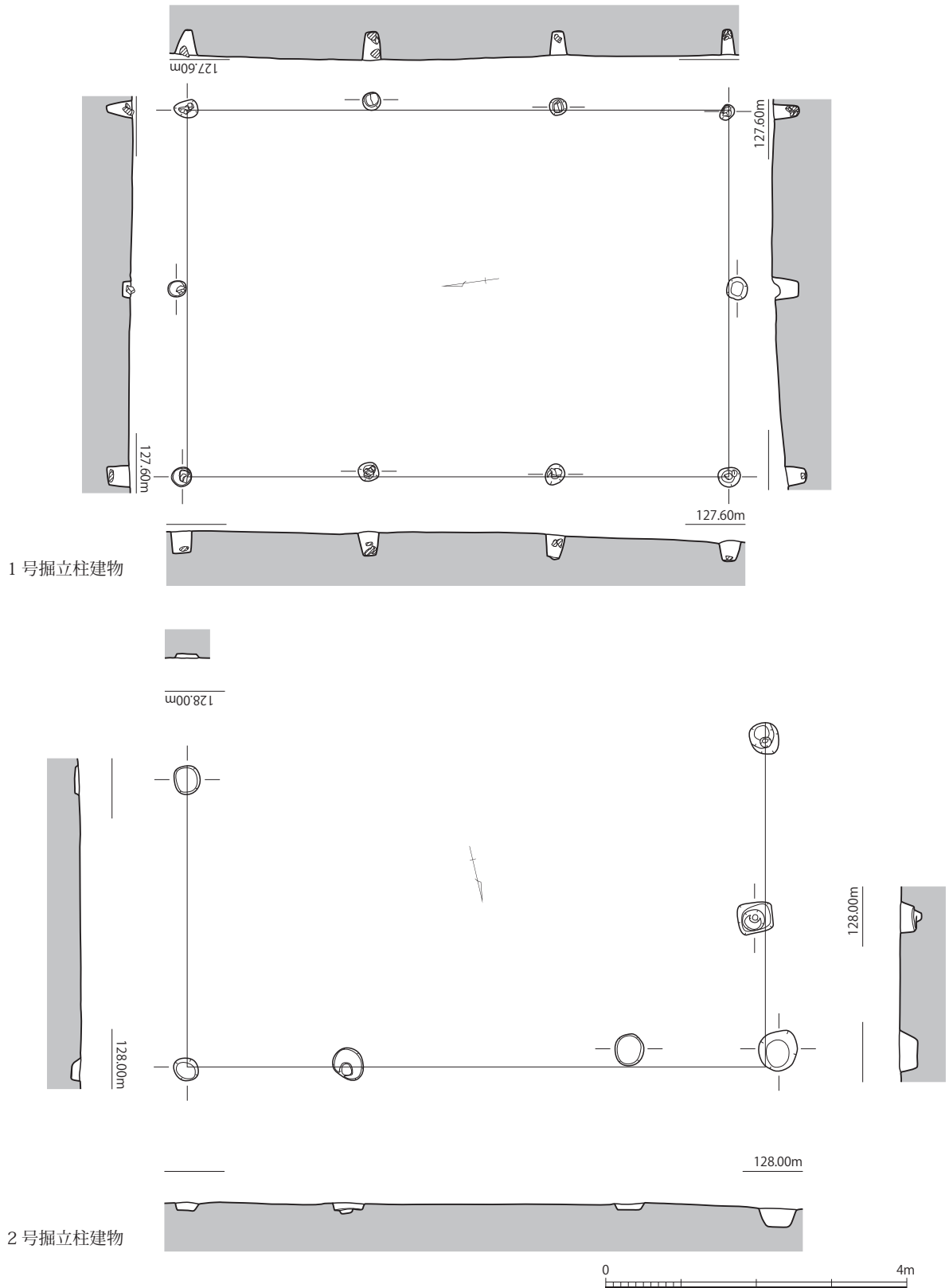
遺物は図化できるものはなかった。

3号掘立柱建物（第29図 図版5）

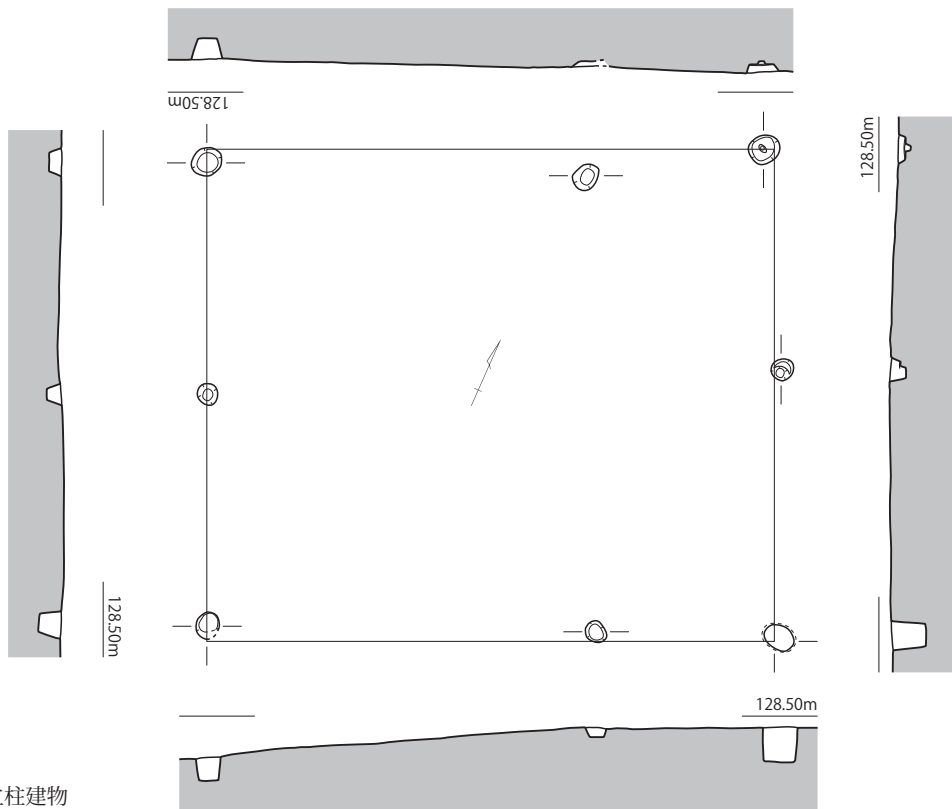
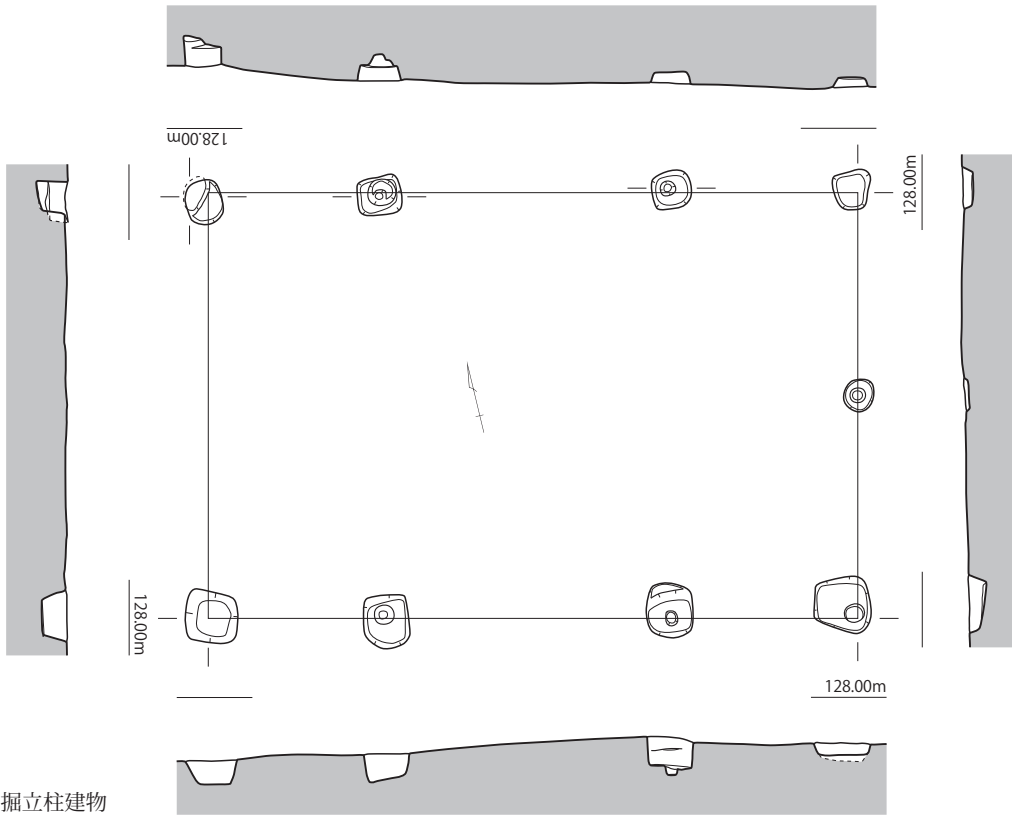
1・2号掘立柱建物とほぼ同位置で確認され、1号掘立柱建物の南側、3号掘立柱建物の南西側及び15・17

号土坑と切り合うが前後関係は不明である。主軸方向をN - 71° - Wに取り、柱間は桁行3間×梁行2間であるが、梁行西側では柱穴が1個、確認できなかった。規模は柱穴間の心々距離で桁行6.8～7.0m、梁行4.3～4.4m、柱穴の大きさは径30～70cm、検出面からの深さは10～40cmを測る。

遺物は図化できるものはなかった。



第28図 C区1・2号掘立柱建物実測図(1/80)



第29图 C区3·4号掘立柱建物实测图 (1/80)

4号掘立柱建物（第29図 図版4）

1号B 竪穴建物の北東側で確認された。主軸方向をN - 67° - Eに取り、柱間は桁行2間×梁行2間である。但し、梁行の南西側の柱間の間隔が長く、この部分が削平により検出面が低くなっていることから、隅の柱より浅い柱穴が存在した可能性がある。規模は柱穴間の心々距離で桁行5.9～6.0 m、梁行5.0～5.2 m、柱穴の大きさは径25～35cm、検出面からの深さは10～40cmを測る。

遺物は図化できるものはなかった。

5号掘立柱建物（第30図 図版4）

調査区南東側で確認され、2号A・B・C 竪穴建物・20号土坑を切り、22・25号土坑と切り合うが前後関係は不明である。主軸方向をN - 64° - Eに取る。柱間は桁行・梁行ともに3間であるが、梁行北西側の柱の間隔が狭いことから、下屋の可能性が考えられ、身舎部分で桁行3間×梁行2間である。規模は柱穴間の身舎部分で心々距離で桁行6.5～6.6 m、梁行4.7～4.8 m、下屋を含んだ梁行は5.6～5.8 m、柱穴の大きさは径25～50cm、検出面からの深さは15～60cmを測る。

遺物は図化できるものはなかった。

6号掘立柱建物（第30図 図版4）

調査区南側で確認され、1号B 竪穴建物を切る。主軸方向をN - 14° - Wに取り、柱間は桁行・梁行ともに2間の総柱建物である。規模は柱穴間の心々距離で桁行3.2～3.4 m、梁行2.9 m、柱穴の大きさは径30～60 cm、検出面からの深さは40～60cmを測る。

遺物は図化できるものはなかった。

7号掘立柱建物（第31図 図版4）

調査区南側で確認され、6号掘立柱建物に近接し、6号竪穴建物、21号土坑を切る。主軸方向をN - 14° - Wに取り、柱間は桁行・梁行ともに2間の総柱建物である。規模は柱穴間の心々距離で桁行2.2～2.3 m、梁行1.9～2.3 m、柱穴の大きさは径20～50cm、検出面からの深さは10～30cmを測る。

遺物は図化できるものはなかった。

8号掘立柱建物（第31図 図版4）

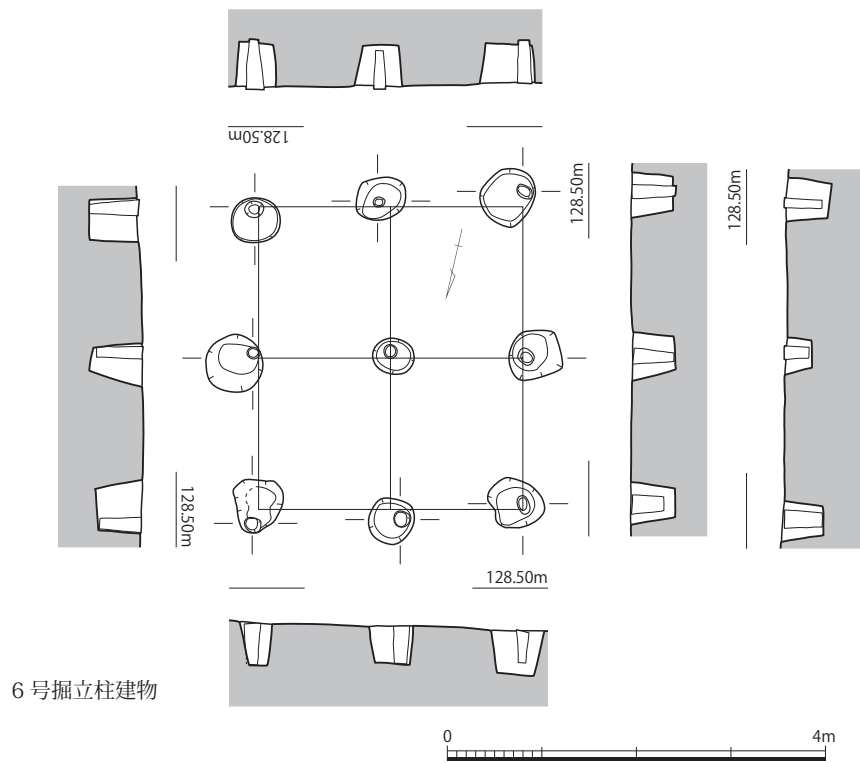
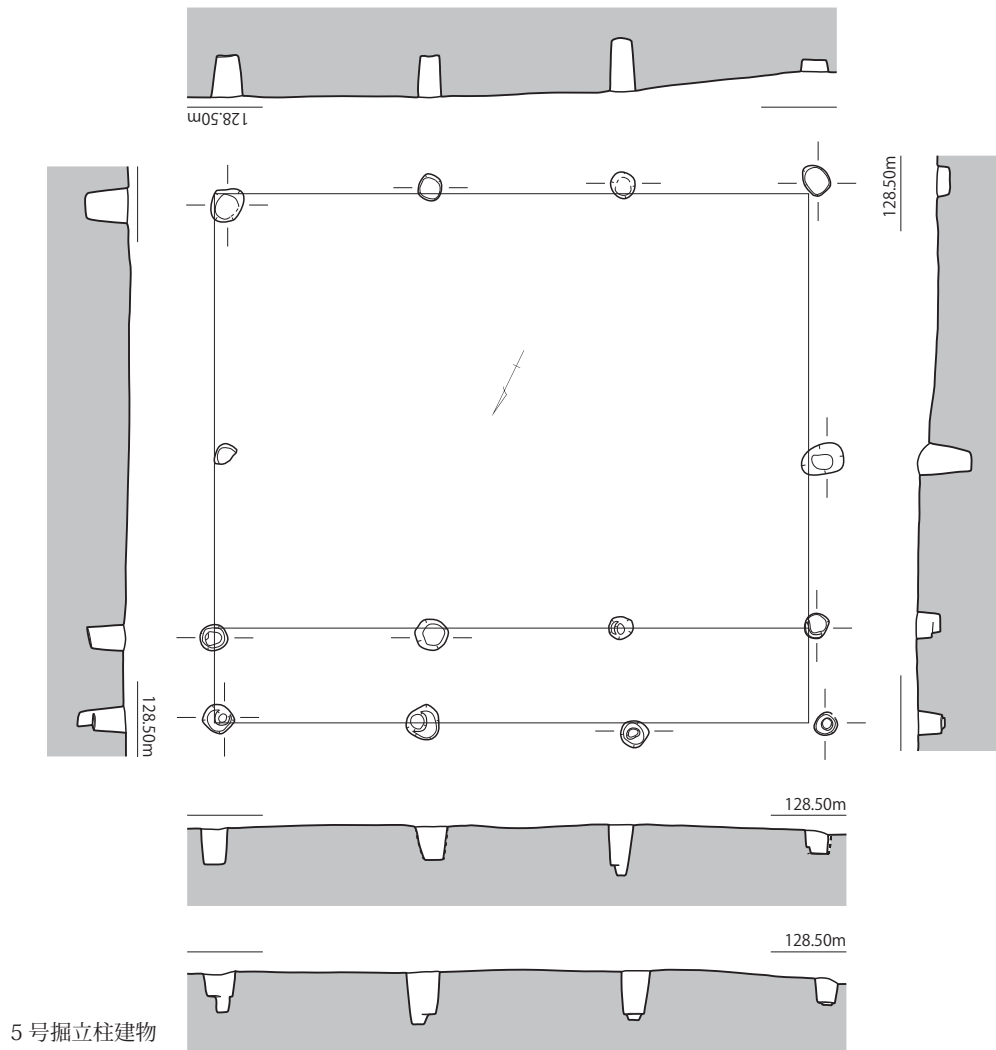
調査区南側で確認され、1号B 竪穴建物、9号掘立柱建物、11・24号土坑、1号溝を切る。主軸方向をほぼ東西 - 南北に取り、柱間は桁行・梁行ともに2間の総柱建物である。規模は柱穴間の心々距離で桁行・梁行ともに2.6～2.7 m、柱穴の大きさは径30～60cm、検出面からの深さは15～50cmを測る。

遺物は図化できるものはなかった。

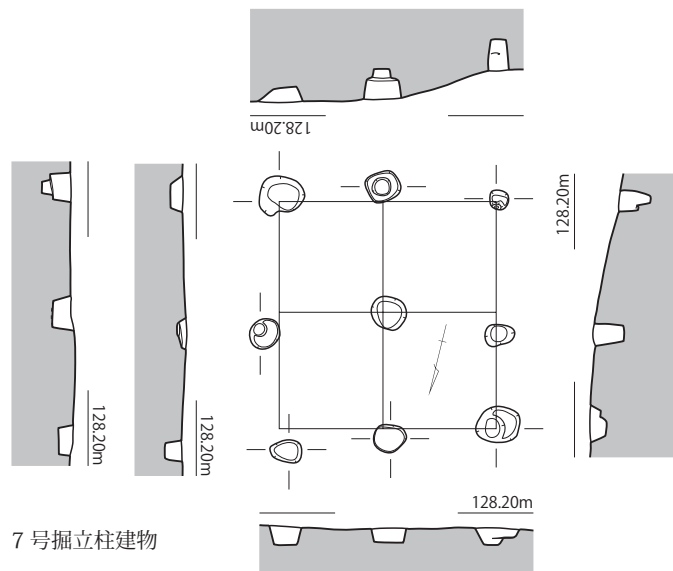
9号掘立柱建物（第32図 図版4）

調査区南側で確認され、23号土坑、1号溝を切り、3号A 竪穴建物、8号掘立柱建物に切られる。主軸方向をN - 17° - Eに取り、南西隅の柱穴は調査区外にあると思われるが、柱間は桁行・梁行ともに2間の総柱建物になると考えられる。調査区内で確認された規模は柱穴間の心々距離で桁行約3.3 m、梁行約3.0 m、柱穴の大きさは径30～50cm、検出面からの深さは5～15cmを測る。

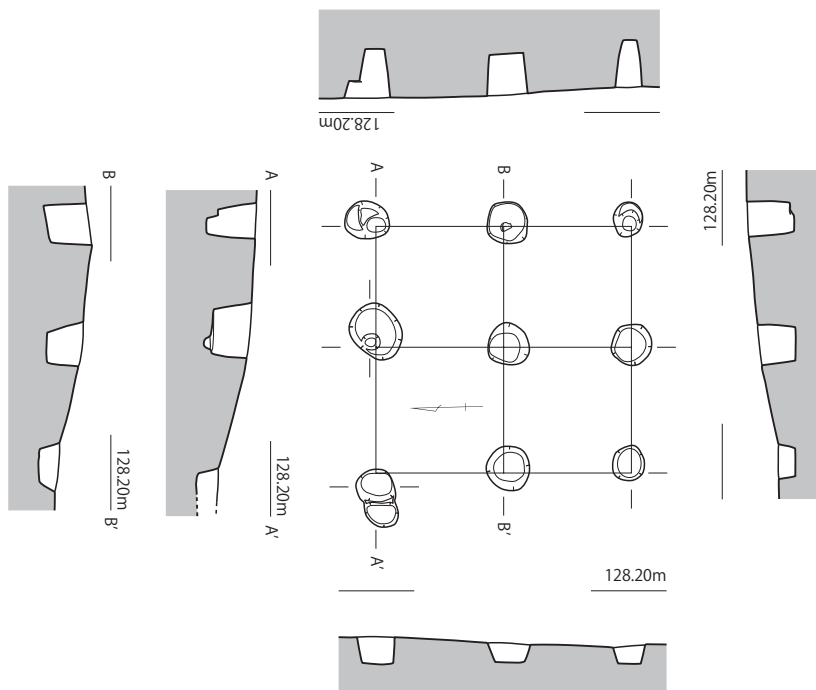
遺物は図化できるものはなかった。



第30图 C区5·6号掘立柱建物实测图(1/80)



7号掘立柱建物



8号掘立柱建物



第31図 C区7・8号掘立柱建物実測図 (1/80)

3. 土坑

土坑については、30基確認しているが、8号土坑・10号土坑については、番号が振られているものの、個別の実測図がなく、また平面図にもレベルの記載がなかったため、報告書作成段階での個別図作成ができなかったことから、ここでは掲載していない。また、20号土坑については、下端の線やレベルの未記載などで実測図として完成してない部分がある。

1号土坑 (第33図 図版5)

3号掘立柱建物の南東側で確認された。平面形は円形を呈し、床面はほぼ平坦である。壁は西側が緩やかに立

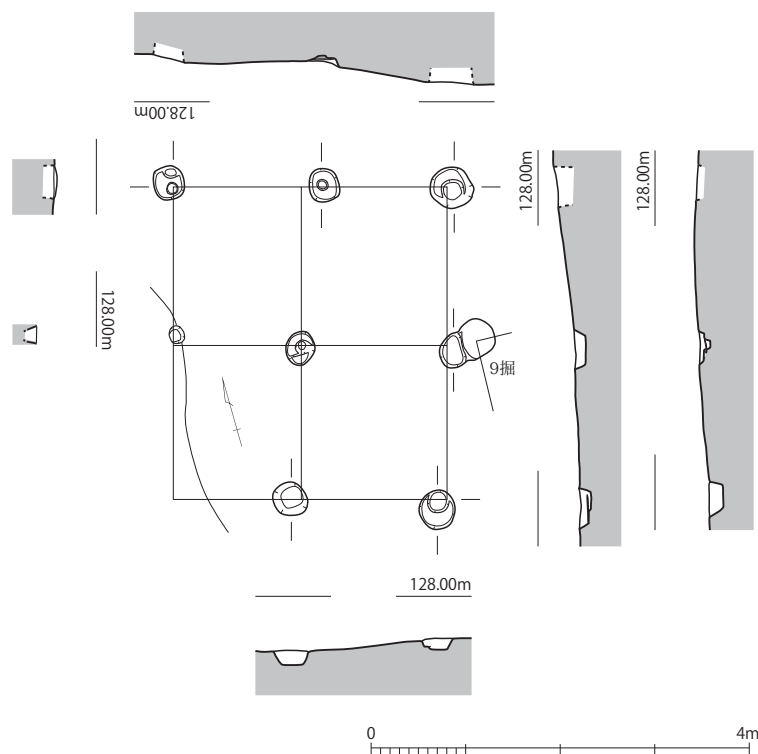
ち上がるほかは、急角度で立ち上がる。規模は長軸約 2.0 m、短軸約 1.7 m、検出面からの深さは約 20cmであった。

遺物は須恵器高台付坏（第 34 図 2）や青磁碗（同図 3）、皿（同図 4）が出土しているが、異なる時期の遺物のため、須恵器、青磁の一方が混入と思われる。

2号土坑（第 33 図）

7号竪穴建物の南西側で確認された。平面形は隅丸方形を呈し、床面は中央に向かって傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 3.1 m、短軸約 3.0 m、検出面からの深さは約 30cmであった。

遺物は出土しなかった。



第 32 図 C区 9号掘立柱建物実測図（1/80）

3号土坑（第 33 図）

1号竪穴建物の南側で確認された。平面形は歪な楕円形を呈する。床面は中央に向かってわずかに傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 1.5 m、短軸約 0.8 m、検出面からの深さは約 30cmであった。

遺物は出土しなかった。

4号土坑（第 33 図）

2号掘立柱建物の南東隅で確認され、この建物と切り合うが前後関係は不明である。平面形はやや歪な円形を呈し、床面は中央付近がやや浅くなる。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 0.9 m、短軸約 0.8 m、検出面からの深さは約 10～15cmであった。

遺物は出土しなかった。

5号土坑（第 33 図）

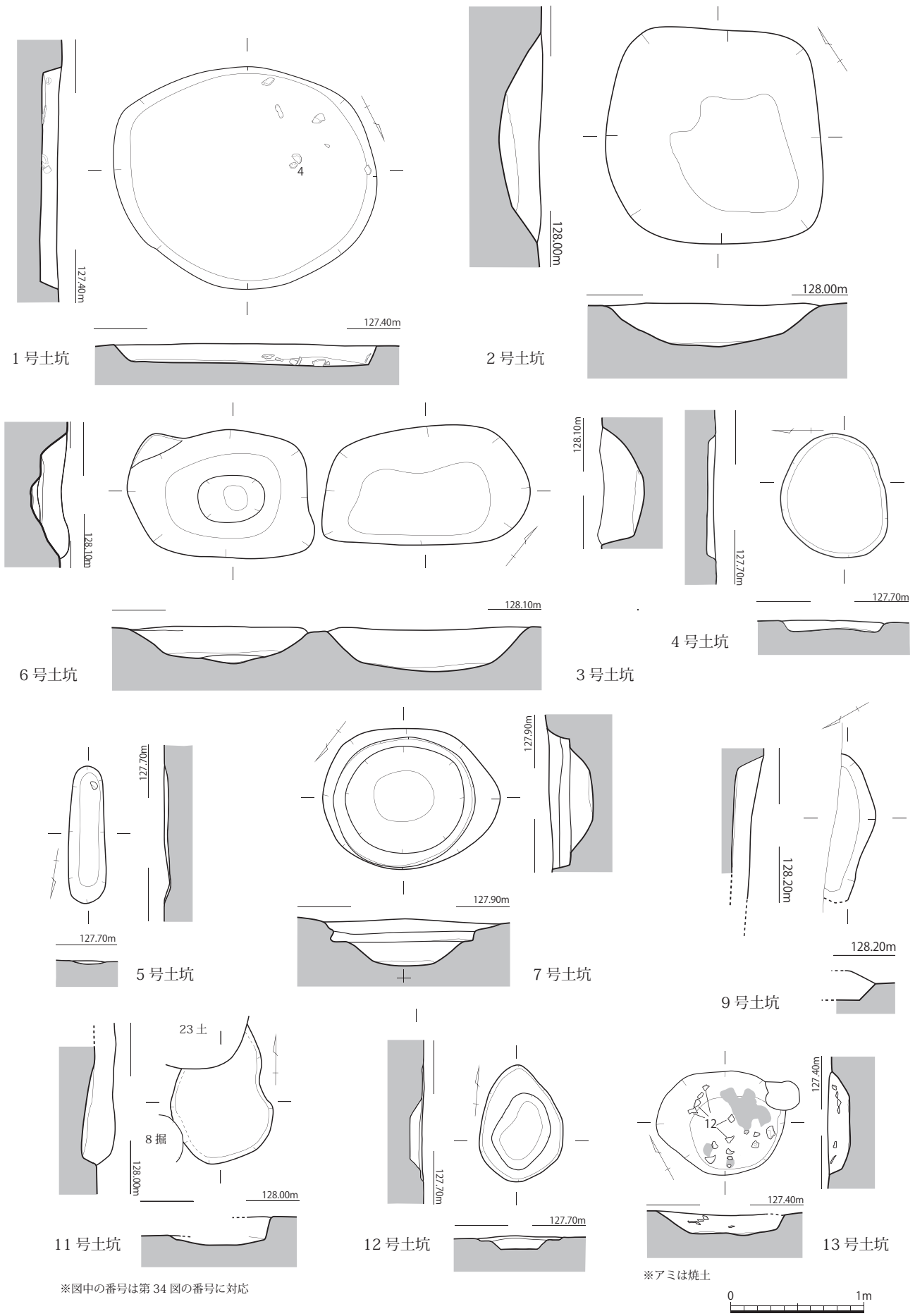
1号溝の北側で確認された。平面形は細長い楕円形を呈し、床面は北へ向かって下がっている。規模は長軸約 1.0 m、短軸約 0.3 m、検出面からの深さは数cmであった。

遺物は須恵器高台付坏（第 34 図 5）などが出土している。

6号土坑（第 33 図）

3号土坑の南東側で確認された。平面形は歪な楕円形を呈し、床面は中央付近がピット状に窪んでいる。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 1.3 m、短軸約 1.0 m、検出面からの深さは1段目のピット底までが約 20cm、2段目までが 30cmを図る。

遺物は土師器坏（第 34 図 7）や砥石（同図 8）・磨石（同図 9）が出土している。



※図中の番号は第34図の番号に対応

第33図 C区土坑実測図(1) (1/40)

7号土坑（第33図 図版5）

3号土坑の南西側で確認された。平面形は楕円形を呈し、床面は2段になっている。床面は1段目がほぼ水平、底面は中央に向かってわずかに窪む。壁は1段目が垂直もしくは鋭角、2段目は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.3m、短軸約1.0m、検出面からの深さは1段目までが約20cm、2段目までが約30cmを測る。

遺物は出土しなかった。

9号土坑（第33図）

調査区の北東側で確認され、7号竪穴建物を切る。北側は調査区外にかかるが、平面形はやや楕円形に近い形を呈すると思われる。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.1m、短軸約0.3m + α 、検出面からの深さは約20cmを測る。

遺物は弥生土器甕・器台などが出土している。

11号土坑（第33図 図版6）

調査区の南側で確認され、8号掘立柱建物と23号土坑に切られる。平面形は不定形を呈する。床面は南に向かって傾斜し、壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約0.8m + α 、短軸約0.7m、検出面からの深さは約20cmを測る。

遺物は土師器坏（第34図10・11）などが出土している。

12号土坑（第33図）

2号掘立柱建物の北側で確認された。平面形はやや歪な楕円形を呈し、床面は2段になっている。床面は1段目・2段目ともに水平で、壁は1段目・2段目ともに緩やかに立ち上がる。規模は長軸約0.8m、短軸約0.6m、検出面からの深さは1段目までが数cm、2段目までが約10cmを測る。

遺物は土師器坏などが出土している。

13号土坑（第33図）

3号掘立柱建物の南側で確認され、東側をピットに切られる。平面形はやや歪な円形を呈する。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。一部に焼土が検出された。規模は長軸約1.0m、短軸約0.8m、検出面からの深さは約15～20cmを測る。

遺物は土師器高坏（第34図12）などが出土している。

14号土坑（第35図）

調査区北側で確認され、1号掘立柱建物と切り合うが前後関係は不明である。平面形は不定形を呈する。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.1m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約20cmを測る。

遺物は出土しなかった。

15号土坑（第35図）

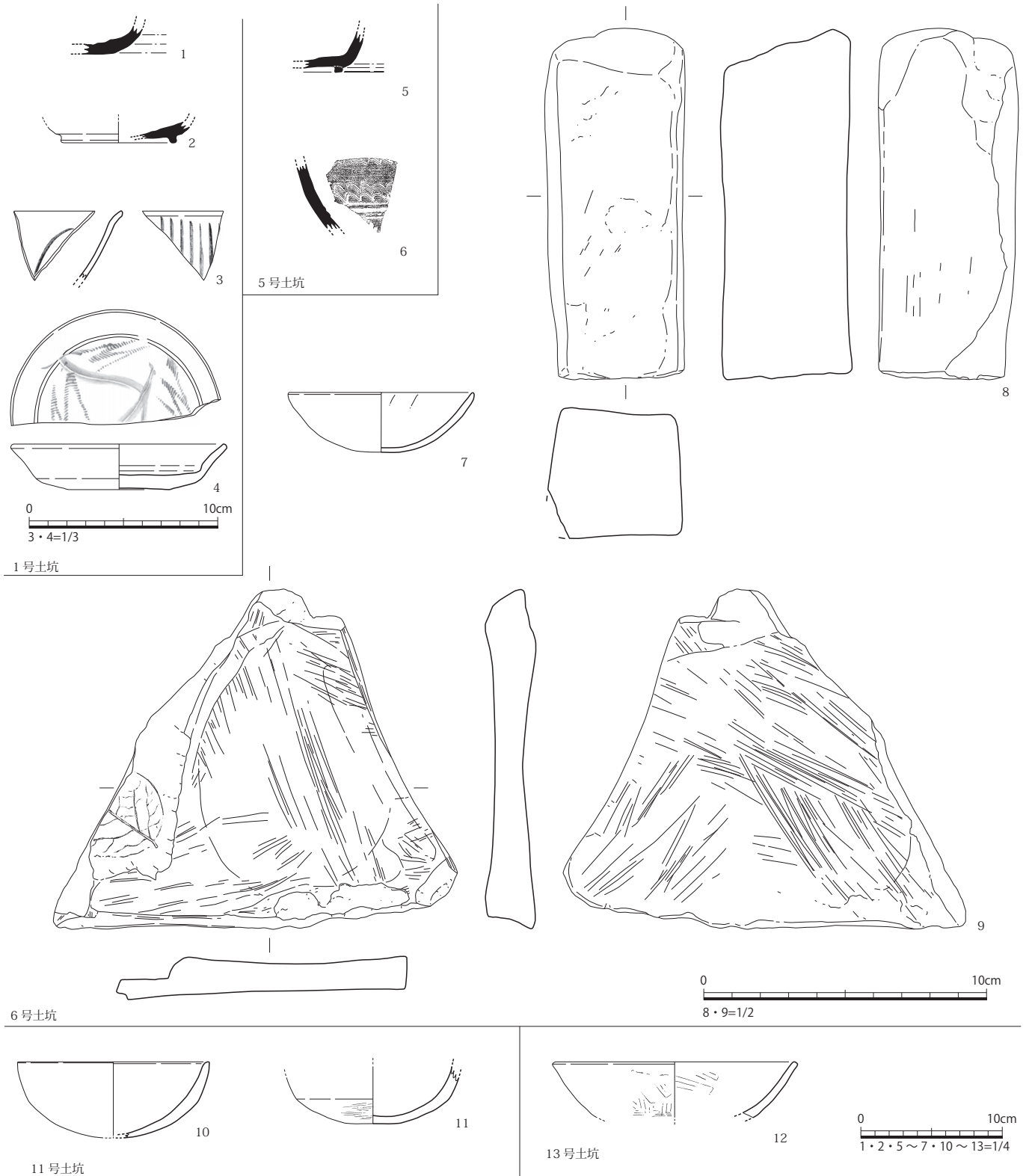
調査区北側で確認され、3号掘立柱建物と切り合うが前後関係は不明である。平面形はやや歪な楕円形を呈する。床面は舟底上で南東側が高くなり、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.1m、短軸約0.7m、検出面からの深さは1段目の床面までが約10cm、ピット底までが約15cmを測る。

遺物は出土しなかった。

16号土坑（第35図）

調査区北側で確認され、数個のピットに切られる。平面形は円形を呈する。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸・短軸ともに約0.9m、検出面からの深さは約10cmを測る。

遺物は出土しなかった。



第34図 C区土坑出土遺物実測図（1）（1/2・1/3・1/4）

17号土坑（第35図）

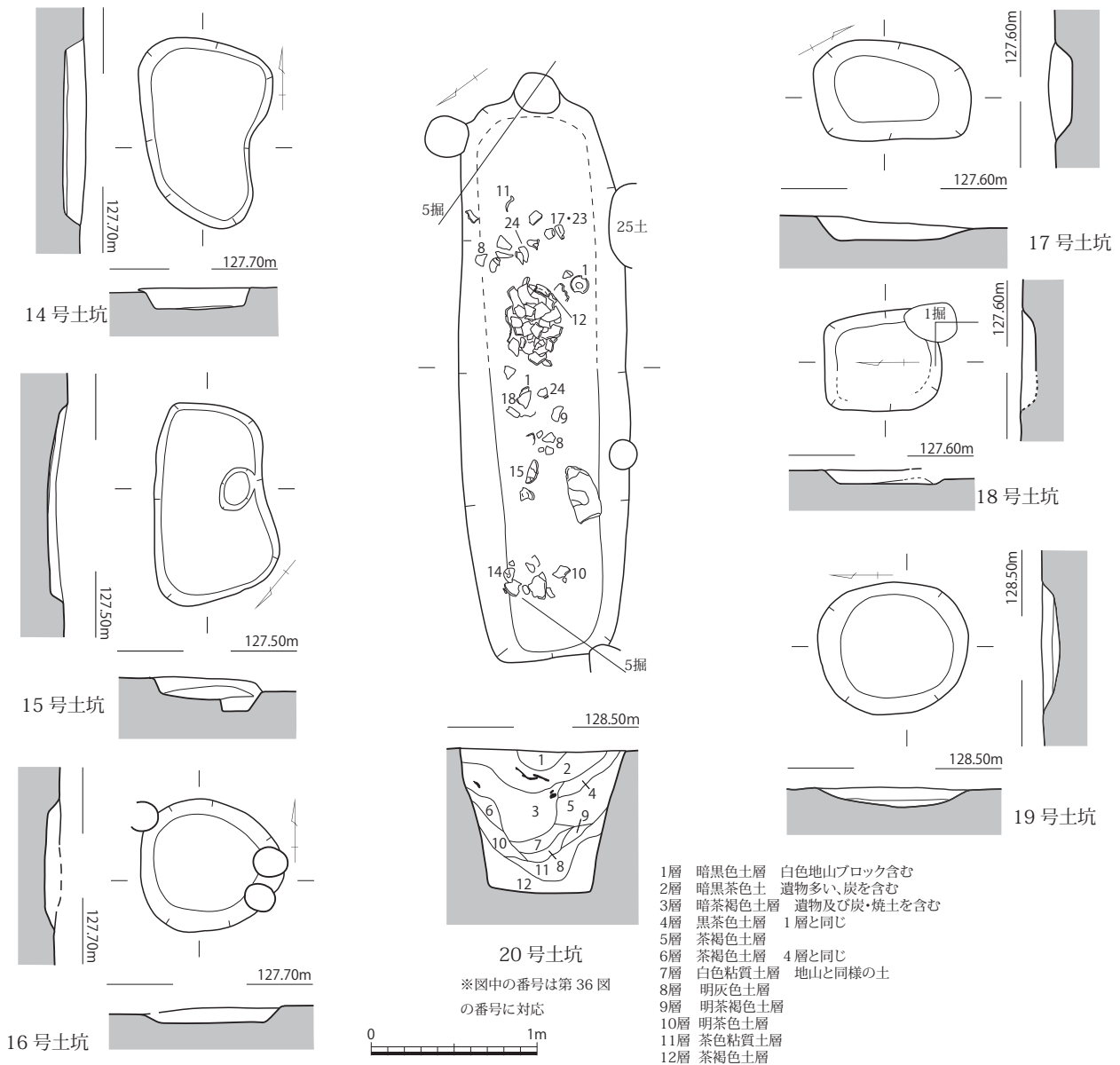
調査区北側で確認され、3号掘立柱建物と切り合うが前後関係は不明である。平面形はやや歪な楕円形を呈する。床面は南に向かってやや傾斜し、壁は北側が緩やかに立ち上がる。規模は長軸約0.9m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約15～20cmを測る。

遺物は出土しなかった。

18号土坑（第35図）

調査区北側で確認され、1号掘立柱建物に切られる。平面形は歪な隅丸方形を呈する。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約0.7m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約15～20cmを測る。

遺物は出土しなかった。



第35図 C区土坑実測図（2）（1/40）

19号土坑（第35図）

調査区の東側で確認された。平面形は円形を呈する。床面は中央に向かって傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約0.9 m、短軸約0.8 m、検出面からの深さは約10～15cmを測る。

遺物は出土しなかった。

20号土坑（第35図 図版6）

調査区南側で確認され、5号掘立柱建物と25号土坑に切られる。平面形は隅丸の長方形を呈する。床面は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約3.8 m、短軸約1.1 m、検出面からの深さは約90cmであった。

埋土中からは、多量の焼土や炭とともに、須恵器高坏（第36図1）・器台（同図2・3）・ハソウ（同図4・5）、土師器坏（同図7～9）・甕（同図10～12）・高坏（同図13～20）・甑（同図21～24）などが出土している。

また土層の堆積状況をみると、4～11層は互層をなしており、人為的に埋められたものと判断できる。さらに2・3層も人為的に埋め戻されており、これらの層から多量の遺物及び炭・焼土が確認されていることから、遺物の廃棄とともに火を使用する行為などの祭祀に用いられた遺構の可能性はある。

21号土坑（第37図）

調査区南側で確認され、西側をピットに切られる。平面形は円形を呈する。床面は2段になっており、1段目は西側に向かってやや傾斜し、2段目はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。規模は直径約0.7～0.8 m、検出面からの深さは1段目が約20cm、2段目が約50cmを測る。

遺物は須恵器甕（第38図1）が出土している。

22号土坑（第37図）

調査区南側で確認され、東側をピットに切られる。平面形はやや歪な楕円形を呈する。床面は2段になっており、南西側へ向かって傾斜する。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約0.7 m、短軸約0.6 m、検出面からの深さは1段目が約10cm、2段目が約125cmを測る。

遺物は出土しなかった。

23号土坑（第37図）

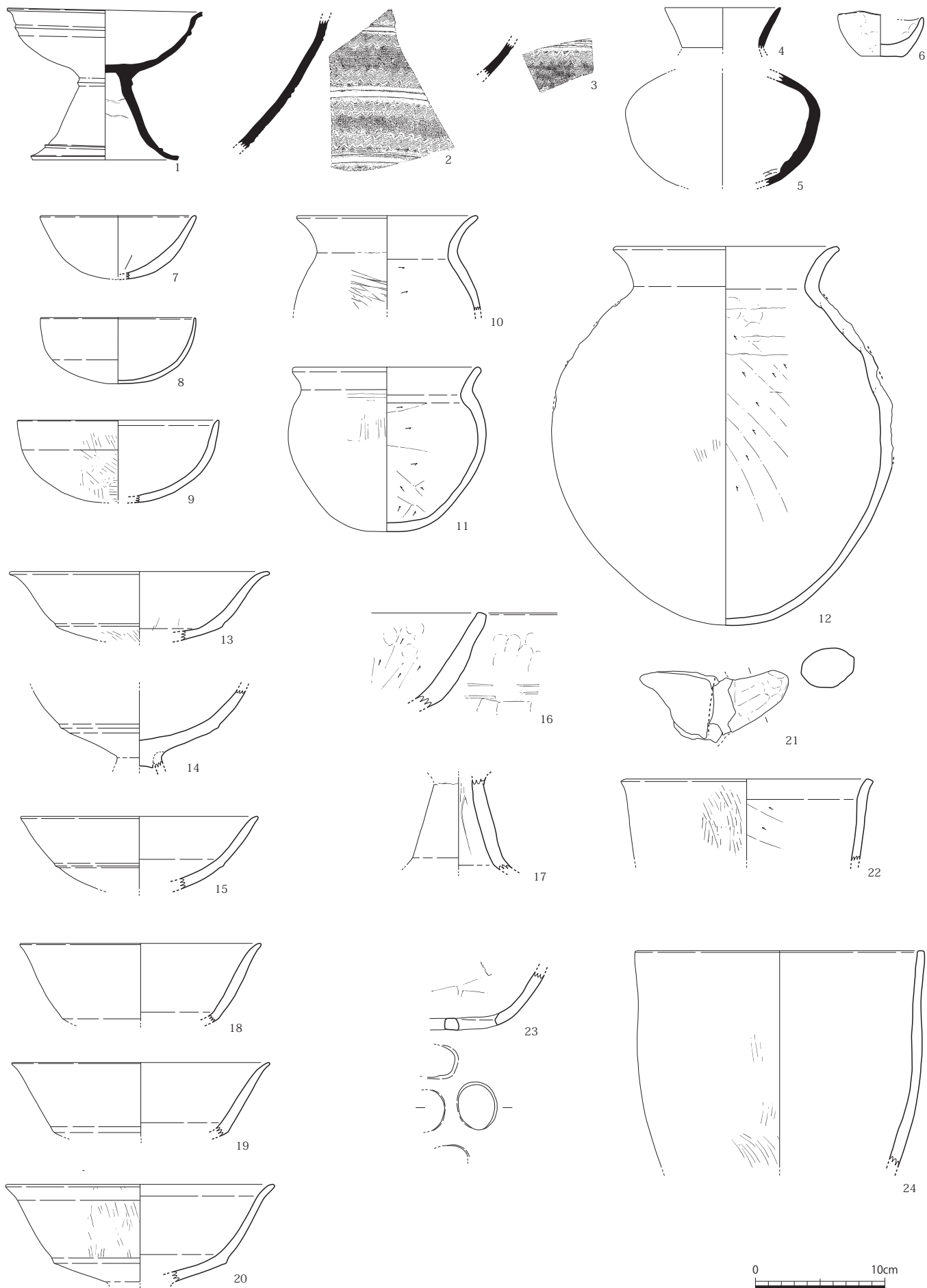
調査区南側で確認され、9号掘立柱建物に切られ、11号土坑を切る。平面形はやや歪な楕円形を呈する。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約0.9 m + α 、短軸約0.9 m、検出面からの深さは約20cmを測る。

遺物は土師器高坏（第38図2～4）が出土している。

24号土坑（第37図 図版6）

調査区南側で確認され、8号掘立柱建物と1号溝を切る。西側は削平を受け、平面形は不定形を呈する。床面は中央部に向かって傾斜し、東側が2段になっている。西壁・南東壁は緩やかに、北東壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約2.8 m、短軸約2.5 m + α 、検出面からの深さは1段目が15～20cm、2段目が約35～40cmを測る。

埋土中からは土師器坏（第38図5）が出土したほか、多くの礫が含まれていた。



第36图 C区土坑出土遗物实测图(2)(1/4)

25号土坑（第37図）

調査区南側で確認され、20号土坑を切るが、5号掘立柱建物と切り合うが前後関係は不明である。平面形は楕円形を呈する。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約0.7 m + α 、短軸約0.6、検出面からの深さは約15cmを測る。

遺物は出土しなかった。

26号土坑（第37図）

1号竪穴建物の西側で確認された。平面形は円形を呈する。床面は東側に1段平坦面があり、2段目は西と北側に向かって傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.3 m、短軸約1.2 m、検出面からの深さは1段目までが約10cm、2段目までは約20cmを測る。

遺物は出土しなかった。

27号土坑（第37図）

調査区北側で確認され、5号溝を切る。平面形は楕円形を呈する。床面は南側に向かって傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.1 m、短軸約0.7 m + α 、検出面からの深さは約10～15cmを測る。

遺物は土師器甕などが出土しているが図化可能なものはなかった。

28号土坑（第37図）

12号土坑の北東側で確認された。平面形はやや歪な楕円形を呈する。床面は2段になっており、南西側へ傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約0.6 m、短軸約0.4 m、検出面からの深さは1段目までが約10cm、2段目までは約15cmであった。

遺物は石鍋（第38図6）が出土している。

29号土坑（第37図 図版6）

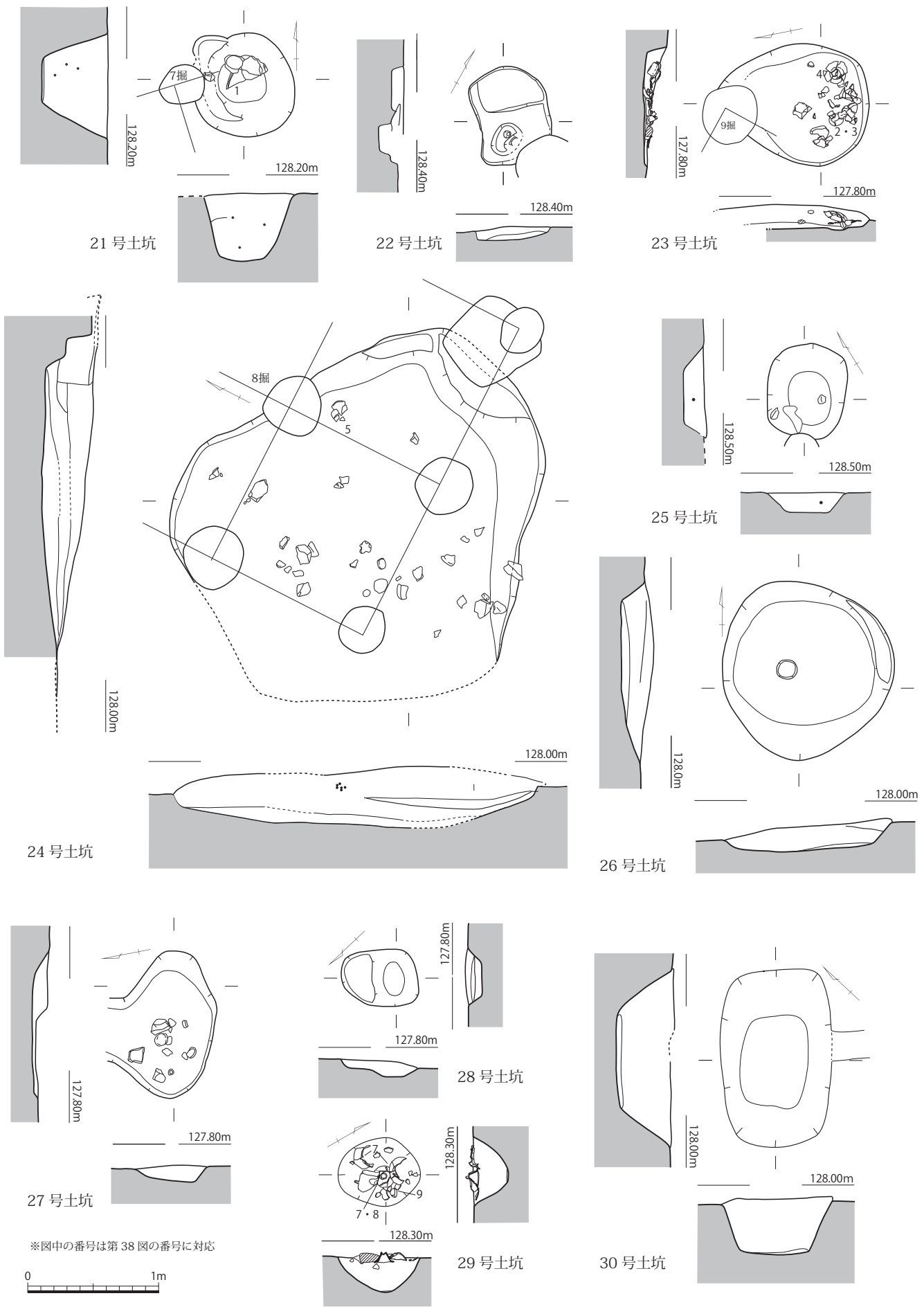
調査区南側で確認され、1号B竪穴建物内に切られ、この建物の隅に。平面形はやや歪な円形を呈する。床面は中央部に向かって傾斜し、断面形は椀状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約0.6 m、短軸約0.5 m、検出面からの深さは約30cmを測る。

遺物は土師器甕（第38図8）・高坏（同図7）・甑（同図9）などが出土しているが、1号B竪穴遺構の出土遺物と同時期と見られることから、この建物の屋内土坑の可能性もある。

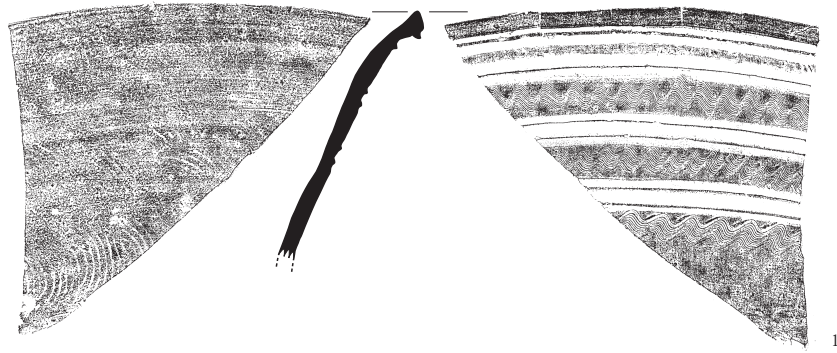
30号土坑（第37図）

7号土坑の東側で確認された。平面形は隅丸方形を呈する。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.3 m、短軸約0.9 m、検出面からの深さは約40cmを測る。

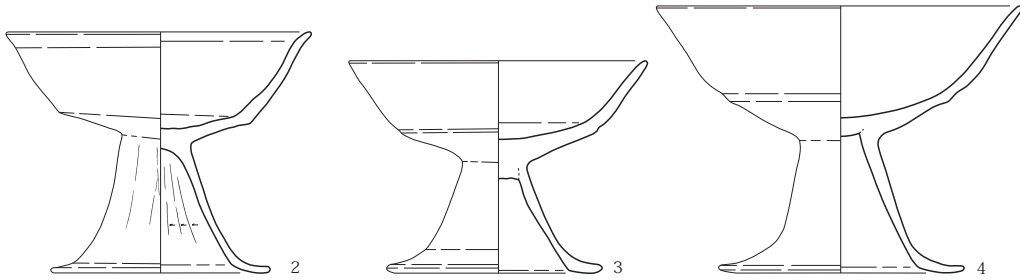
遺物は出土しなかった。



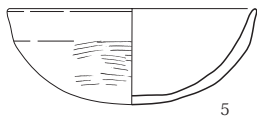
第37図 C区土坑実測図(3)(1/40)



21号土坑



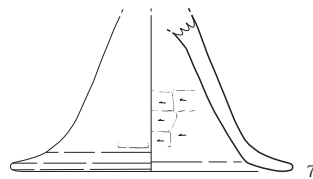
23号土坑



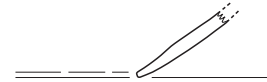
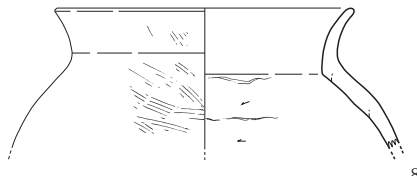
24号土坑



28号土坑



29号土坑



0 10cm

第38図 C区土坑出土遺物実測図(3)(1/4)

4. 溝

溝は、調査時には8号まで確認していたが、6・7号溝については深さが1～2cmと遺構と認定する根拠に乏しかったことから、欠番としている。

1号溝(第40図)

調査区の南側で確認され、8・9号掘立柱建物、24号土坑に切られる。北西側で二又に分かれており、規模は最長約15.2m、幅は約0.5～1.2mを測る。断面形は舟底状を呈し、深さは約10～20cmを測る。溝の傾斜は南から西に向かって下がっている。

遺物は須恵器蓋(第41図1)などが出土している。

2号溝(第40図)

調査区の東側で確認され、4号溝に切られ、西側は削平を受けている。調査区内で確認された長さは約2.4m、幅は約0.3m前後を測る。削平を受けているため、断面形は判然とせず、深さは数cmである。

遺物は須恵器壺（第41図2）などが出土している。

3号溝（第40図）

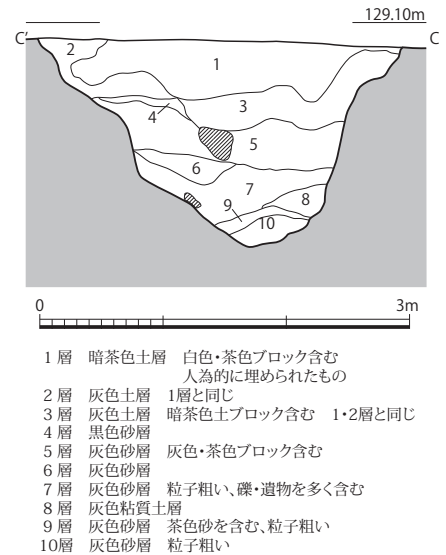
調査区の東側で確認され、東側は調査区外にかかり、西側は削平を受けている。調査区内で確認された長さは約6.4m、幅は約0.5～0.6mを測る。削平を受けているため、断面形は判然とせず、深さは数cmである。

遺物は須恵器蓋（第41図3）などが出土している。

4号溝（第39・40図 図版7）

調査区の東側で確認され、2・8号溝を切る。東側・西側の両端ともに調査区外へかかる。調査区内での長さは約22m、幅は最大で北西側で約2.6mを測る。断面形は逆三角形を呈し、深さは約30～40cmを測る。また、溝の壁面には多くの杭痕が確認されている。

遺物は大量の陶磁器（第41・42図、第43図1～16）や硯（第41図15）・砥石（第41図16）のほか、礫も多く出土している。これらは廃棄に伴うものと考えられるが、土層の観察状況から、次のような埋没過程を追うことができた。まず、第1段階として、8～10層が溝の使用停止時にかけて埋まり、第2段階として、5～7層に含まれる陶磁器や礫の集中廃棄が行われ、第3段階として、1～3層が人為的に埋め戻されたものと考えることが出来る。このことから少なくとも近世後半の短期間に3回の使用と埋没があったものと考えられる。



第39図 C区4号溝土層実測図(1/60)

5号溝（第40図）

調査区の北側で確認され、27号土坑に切られる。北側は調査区外へかかる。調査区内で確認された長さは約6.6m、幅は最も広い部分で約0.6mを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは約10cmを測る。

遺物は、須恵器壺（第43図17）・高台付坏（同図18）が出土している。

8号溝（第40・43図）

調査区の東端に沿って確認され、東側は調査区外にかかり、西側は4号溝に切られている。底面は西側の一部で2段に掘り込まれている。調査区内で確認された長さは約6.9m、幅は最も広い部分で約0.9m + α を測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは約10～15cmを測る。

遺物は、磁器碗（第43図19～25）などが出土している。

5. 出土遺物（第19・21・24・26・34・36・38・41～47図 図版8～13）

C区での遺物は、竪穴建物からは古墳時代中期から後期にかけての土師器・須恵器が多く出土している。土坑からも古墳時代中期から後期の遺物が多い。また、20号土坑からは朝鮮半島系の陶質土器と考えられる高坏や多数の蒸気孔をもつ土師器甕など、他の土坑に比べて多くの遺物が出土している。

また、具体的な出土位置ははっきりしないが、水田層中からは龍泉窯系の青磁が出土している。このほか、溝では須恵器が出土する1～3・5号と、廃棄されたと考えられる大量の陶磁器が確認された4・8号の大きく2つの時期が考えられる。また、多くのピットからも遺物が出土している。P48・141・148から中世の青磁や土

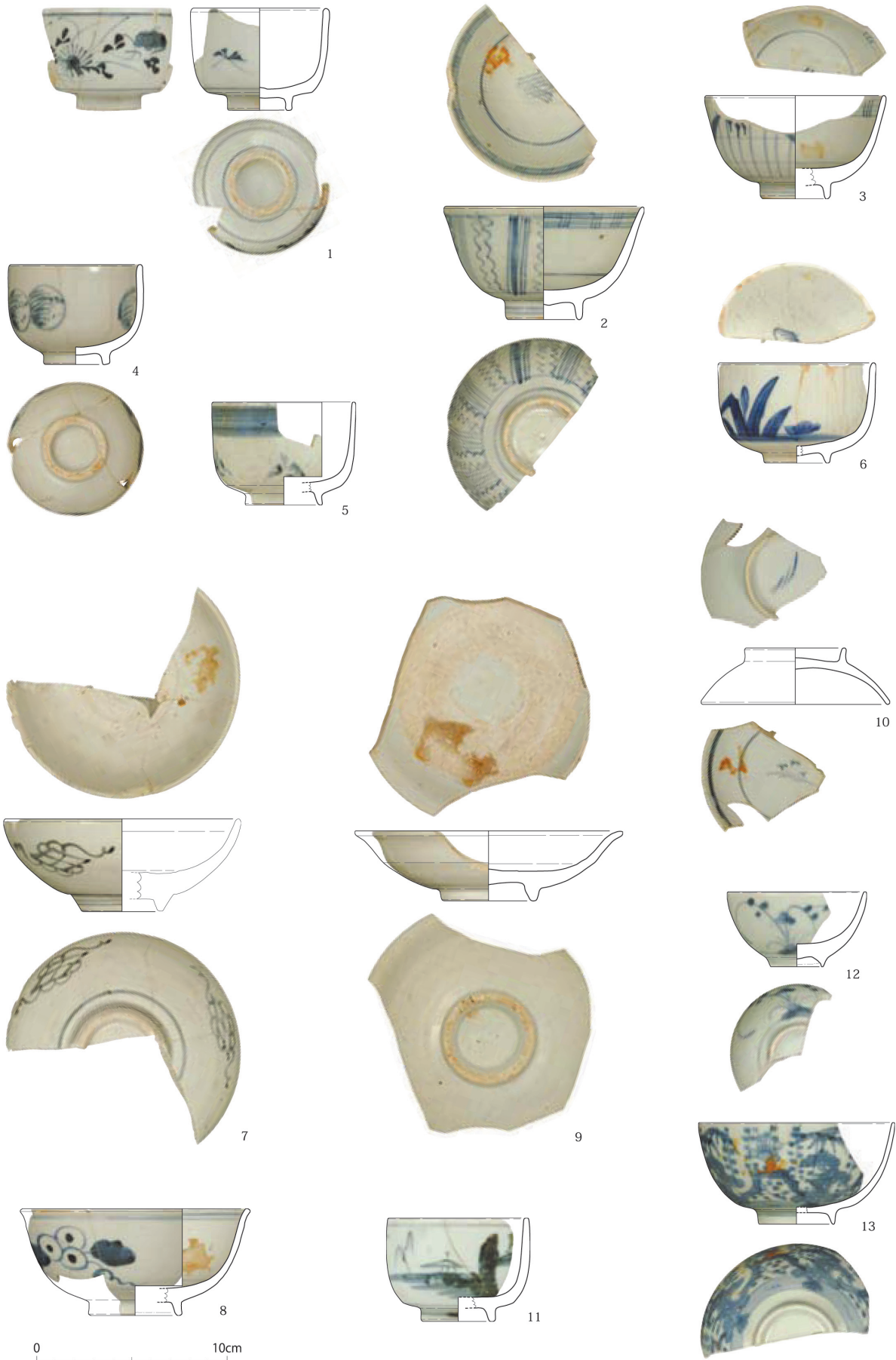


第40図 C区溝実測図 (1/80、4号のみ 1/100)

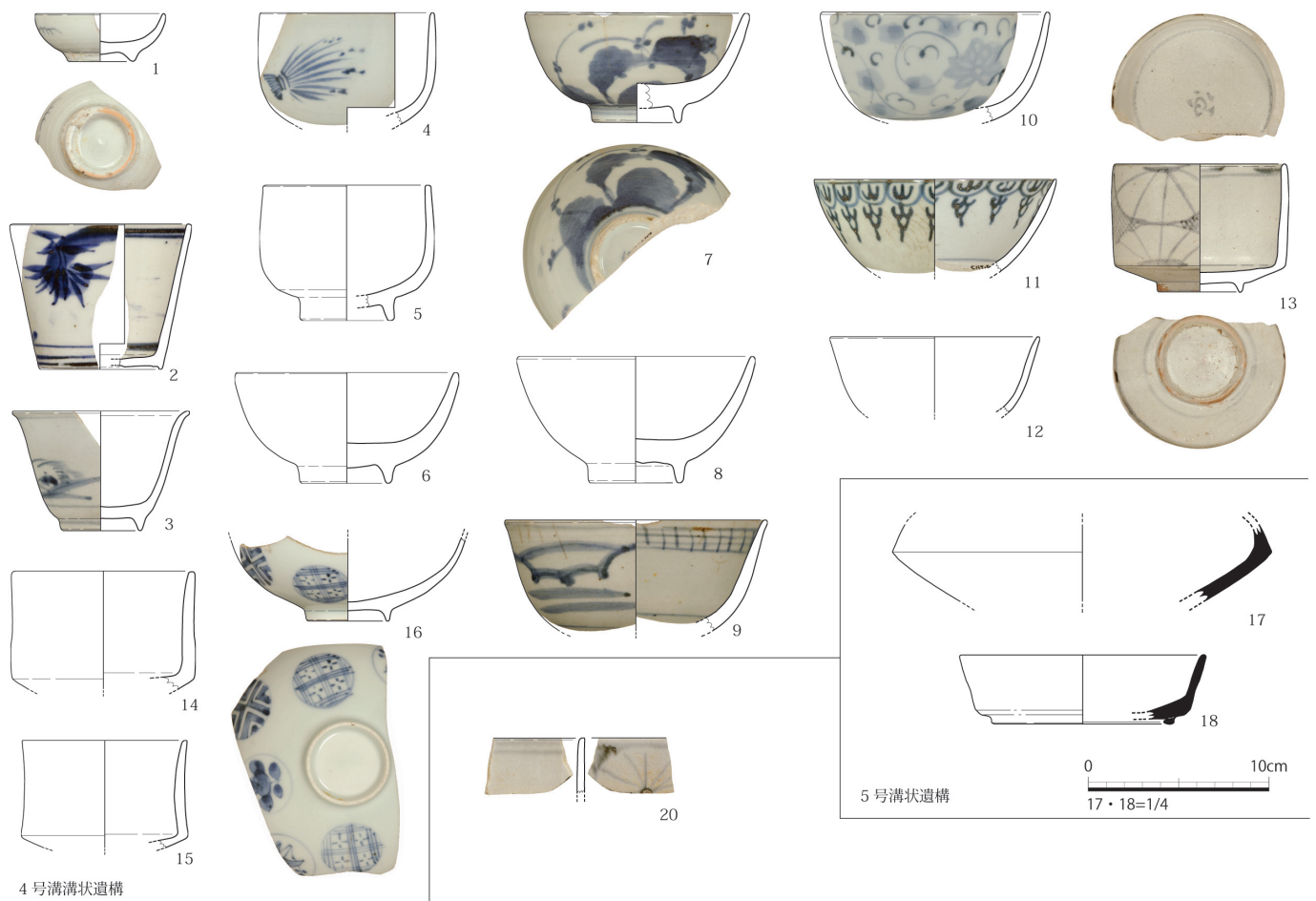


第41図 C区溝出土実測図(1) (1/2・1/3・1/4)

師質土器坏(第44図1~4)、P 174・177・208・271からは古代の須恵器蓋や甕・高台付坏(同図5~8)が出土している。大きく分けて古代と中世の2つの時期のものが存在するとみられる。また、古代のピットは調査区南側、中世のピットは古代のピット群の東側に分布の傾向がありそうである。



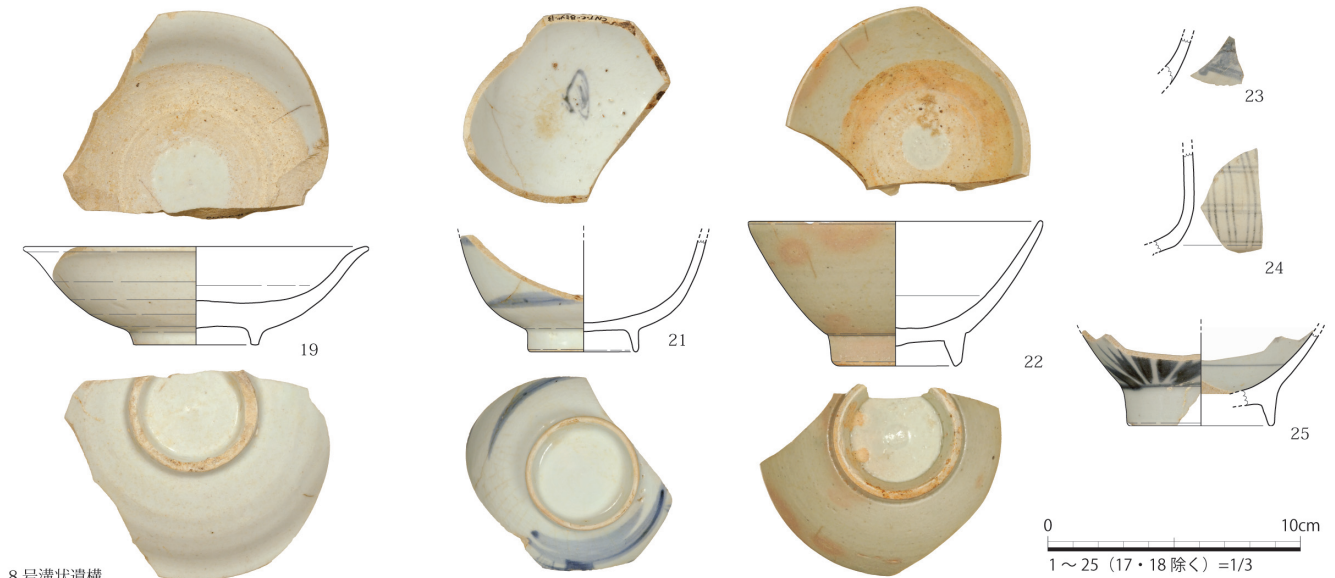
第 42 图 C 区溝出土実測图 (2) (1/3)



4号溝状遺構

5号溝状遺構

0 10cm
17・18=1/4



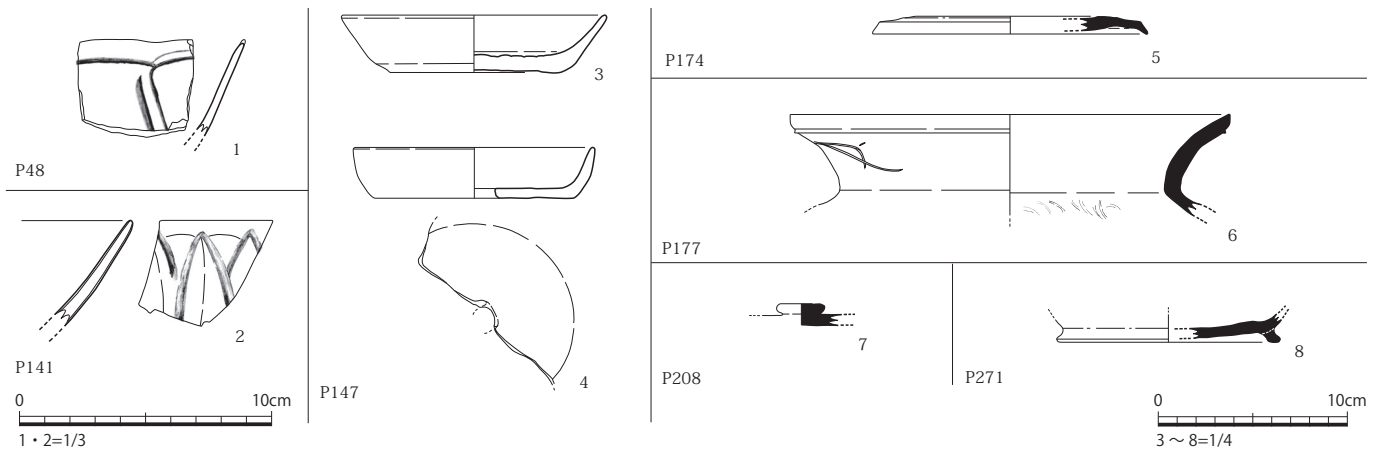
8号溝状遺構

0 10cm
1~25 (17・18除く)=1/3

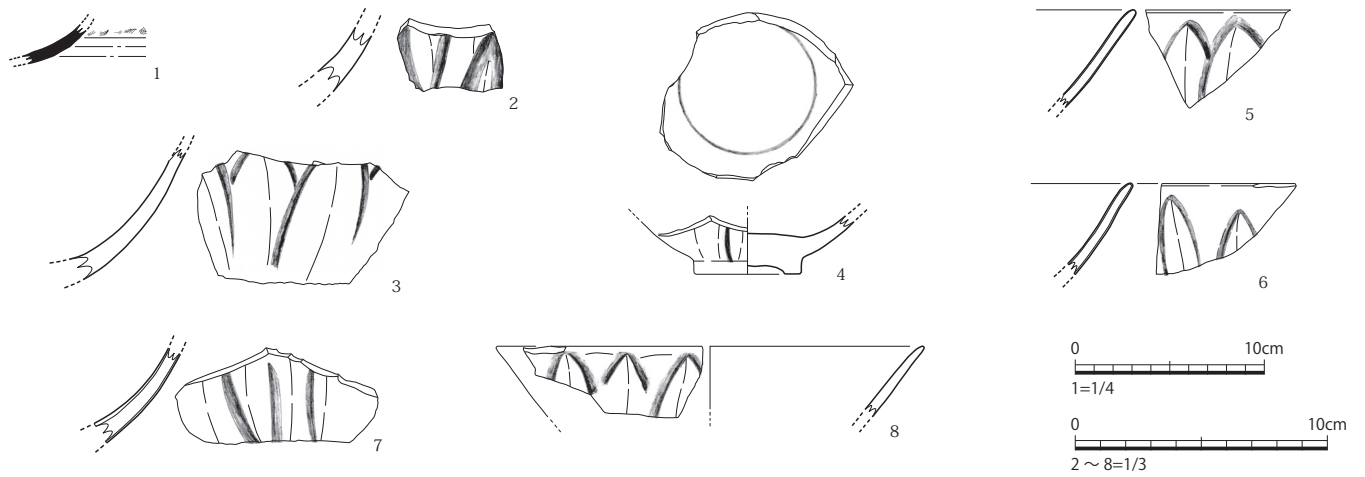
第43図 C区溝出土実測図(3) (1/3・1/4)

土器及び陶磁器の詳細については、第2～8を参照されたい。

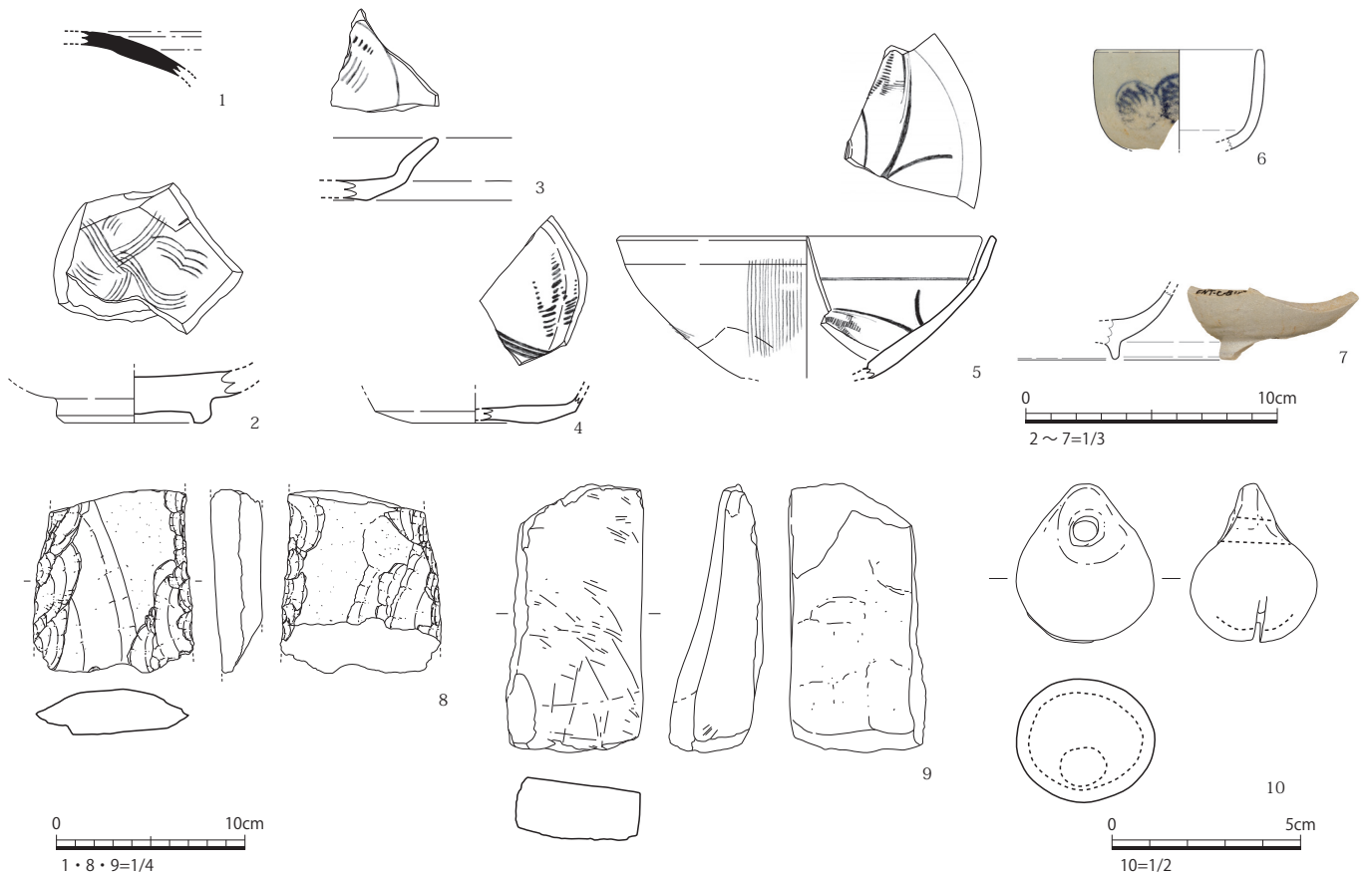
土器・石器以外の遺物はここで記述する。第26図24は鉄滓である。最大長2.9cm、最大幅3.9cm、最大厚2.2cm、重さ12.0gである。第38図6は滑石製の石鍋である、内面にはミガキ、外面にケズリが施される。残存高は2.6cmである。第46図10は完形の土鈴である。最大長4.2cm、最大幅3.6cm、最大厚3.4cmで胎土には1cmほどの小石が入っている。



第44図 C区ピット出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第45図 C区水田層出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第46図 C区その他の出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)

IV 総括

前章までに、この調査で確認された遺構・遺物について記述してきた。最後に簡単ではあるが、これらの遺構の時期⁽¹⁾や性格、求来里川流域での位置付けについて考えてみたい。なお、遺構の時期比定については、第1表の時期区分に基づいて、説明を行うこととする。

まずA区では、確認された竪穴建物のうち、1～3号竪穴建物については、8世紀代の遺物が出土している。1号竪穴建物から出土している須恵器高台付坏(第5図2)や土師器甕(第5図5)は8世紀中頃と考えられる。2号竪穴建物出土の遺物も同様の時期と考えられ、それを切る3号竪穴建物からも近い時期の土師器甕が出土していることから、8世紀中頃から後半の範疇に位置付けられる。4号竪穴建物については、明確に時期を決定できる遺物は出土していないものの、円形状に配置される柱穴から平面形が円形を呈する建物で、弥生時代中期と考えられ、後述する土坑と同時期のものとしておきたい。5号竪穴建物については遺物が出土していないものの、1号竪穴建物に切られることから、8世紀中頃以前としておく。

掘立柱建物については、いずれも出土遺物がなく、時期を決めるのは難しいが、1・6・7号と3～5号がそれぞれ軸方向が近く、同時期のものと考えられる。2号竪穴建物と6号掘立柱建物の切り合いから、1・6・7号掘立柱建物が8世紀中頃もしくはそれ以降としておきたい。2号掘立柱建物は1号掘立柱建物と切り合うもの前後関係は不明だが、軸方向は近いことから、時期的にも近いと考えたい。3～5号掘立柱建物については、4号竪穴建物を切ることから、弥生時代中期後半以降としておく。

土坑については、2～4号土坑からは弥生土器の甕や器台が出土しており、弥生時代中期6～7期、中期後半から末頃のものと考えられる。

溝は1号溝より弥生時代後期5期、後期後半頃の台付甕が出土しており、この時期のものと考えていいだろう。その他の溝については、時期が分かるような遺物は出土していない。

以上、A区の遺構変遷を見ると、弥生時代中期から後期に建物・土坑・溝に加え、若干の遺物が見られるものの、古墳時代の遺構は見られない。その後、8世紀中頃に、再び集落が営まれるようになり、この時期とこれに続く掘立柱建物の時期がA区で集落規模が最も大きくなる(第1表)。

続いて、C区についてみていく。竪穴建物については、1号A竪穴建物から出土した土師器甕(第19図12)はIV期とみられ、古墳時代中期前半から中頃、これに切られる1号B竪穴建物は、ⅢB期からIV期の土師器甕(第21図5)・高坏(同図8～10)が中期前半のものともみられる。2号ABC竪穴建物は、2号CからMT85～TK43の時期の須恵器坏身(第24図13)や甕(同図14)、2号Aと2号Cの接合関係にある須恵器坏蓋(第24図9・10)はMT85～TK43であり、これは2号Aに伴うものと考えられることから、TK10～TK43、古墳時代後期前半から後半の時期にかけて、A→B→Cの順になると考えられ、切り合い関係とも齟齬をきたさない。

また、2号ABCのいずれの建物から出土したか明確ではないが、第24図1・2の須恵器蓋は7世紀後半から8世紀にかけてのものである。これらの建物に伴うものとは考えにくく、他遺構からの混入であろう。

3号竪穴建物は、出土した土師器坏(第26図1)がⅦ期、古墳時代後期後半と思われる。4号竪穴建物については、ABCのどの建物出土かはっきりしないものの、出土遺物と切り合い関係から、BがTK10の須恵器坏蓋(第26図2・5)から古墳時代後期中頃、CがMT85～TK43の須恵器坏蓋(同図4・6・10)から同後期後半、Aが須恵器蓋(同図7・8)から7世紀後半から8世紀と3つの時期が考えられ、5・6号竪穴建物は4号ABC竪穴建物に切られることから古墳時代後期中頃以前のものであるが、4号竪穴建物からIV期の土師器高坏(同図20)が出土しており、これが5号もしくは6号竪穴建物からの混入であるならば、この建物の時

期は古墳時代中期前半から中頃の可能性がある。

次に掘立柱建物についてみると、6～9号掘立柱建物は2間×2間の総柱建物の倉庫で、軸方向もほぼ合っていることから、同時期と考えていいだろう。6号掘立柱建物が1号B竪穴建物を切っていることから、それ以降の時期、1号A竪穴建物などの時期と同じ可能性があると考えられる。一方、1～5号掘立柱建物については、1～3号と4・5号がそれぞれ軸方向を一にしており、同時期のもと考えられる。時期については、遺物が出土していないものの、6～9号掘立柱建物に比べ、軸方向や柱穴の大きさが異なる点などから、これらの建物と時期が異なると思われる。ピットや水田層から14世紀前半代の蓮弁文を施した青磁（G期、青磁蓮弁文碗A群）が出土していることから（第44～46図）、この時期、もしくはそれ以前の可能性がある。合わせて、5号掘立柱建物が隣接するP 147からは13世紀後半から14世紀前半に当たるI期の土師質土器皿が出土しており、時期的にも齟齬をきたさないとと言える。

土坑については、時期を決定する遺物の出土が少ない。まず、20号土坑から出土した陶質土器の高坏（第36図1）や壺に近い形態の壺（同図4・5）、複数の蒸気孔を持つ土師器甑（同図23）などはIV期、古墳時代中期前半から中頃のものと考えられる。陶質土器や多数の蒸気孔を持つ甑など、外来系の遺物が見られ、通常の廃棄に伴うものとは考えにくく、何らかの祭祀行為に伴うものであった可能性もある。このほかにも6・11・13・24号土坑からはIV期の土師器坏（第34図7・10～12、第38図5）、23・29号土坑からもIV期の土師器高坏や甕・甑（第38図2～4、7～9）が出土しており、20号土坑と同じく、古墳時代中期前半から中頃のものであろう。

また、5号土坑は8世紀中頃の須恵器高台付坏（第34図5）が出土している。この他、1号土坑からは8世紀の須恵器の高台付坏（第34図2）、青磁碗や同安窯の青磁皿（同図3・4）が出土している。どちらかの遺物が混入によるものと思われるが、竪穴建物や掘立柱建物の時期と齟齬をきたすものではないことから、この時期の土坑も複数存在すると考えられる。28号土坑出土の石鍋は中世の所産であり、1～5号掘立柱建物と同時期の可能性がある。

溝では、2・3・5号溝から7世紀後半から8世紀とみられる須恵器蓋や壺（第41図2・3・第43図17・18）などが出土している。また、1号溝出土の須恵器蓋（第41図1）は新しい2・3号溝と同時期の可能性があるものの、8・9号掘立柱建物や24号土坑に切られていることから、混入した可能性が高く、古墳時代中期前半より前の時期と考えたい。4・8号溝からは18世紀代の大量の陶磁器が出土している（第41図5～14、第42図、第43図1～16・19～25）。これらの遺物は、出土状況から廃棄されたものと考えられ、調査地の東側に屋敷地があり、それを囲む溝であった可能性が高い。

以上、C区での遺構変遷をみると、古墳時代中期になって集落が営まれ始め、8世紀まで継続する。その後の状況ははっきりしないものの、13世紀後半から14世紀前半以降、18世紀にかけて再び集落や水田として利用され、中世から近世の集落景観が維持されていた可能性が高い。

このように弥生時代中期以降、調査地一帯では継続的に生活が営まれていることが分かったが、今回の調査で確認された遺構の変遷について、周辺の調査事例とともにまとめ、その特徴について整理する。

まず、弥生時代中期から後期の集落は、求来里川対岸の金田遺跡や下流の小西遺跡で多数確認がされているが、これらの遺跡に比べて、本遺跡では、A区とB区・D区に若干見られる程度で多くはない。これは金田遺跡や小西遺跡の立地が台地裾や、南側斜面の日当たりの悪い場所であるの対して、町ノ坪遺跡一帯は比較的広い沖積面にあり、日当たりもよいことから、耕地として利用された可能性が考えられるか、あるいは未調査の北側台地裾に広がっているものと考えられる。

古墳時代前期には生活遺構がほとんど確認されていないが、古墳時代中期になると、B区・C区に加えD区⁽²⁾でも集落が営まれはじめ、居住域が広がる。一方でA区では、古墳時代を通じて遺構は確認されず、この一帯の

第2表 出土土器観察表(1)

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量、○は復元径・残存高				調整(磁器は文様)		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	
第5図 1	A	1竪建	土師器	環	(8.0)	-	3.1	2.8	指オサエ・後ナデ・ 摩耗のため不明瞭	指オサエ・後ナデ・ 摩耗のため不明瞭	B・C・E・ F・I	良	橙色	橙色	
第5図 2	A	1竪建	土師器	環	(17.6)	-	11.0	5.8	ナデ	ナデ	B・C・E・ F・G・I	良	淡橙色	淡橙色	
第5図 3	A	1竪建	土師器	甕	-	-	-	(8.6)	ナデ・摩耗のため不明瞭	ナデ・摩耗のため不明瞭	B・D・E・ F・G	良	橙色	橙色	
第5図 4	A	1竪建	土師器	甕	-	-	-	(13.2)	ナデ・工具ナデ	ナデ・ハケ	A・B・C・ D・E・F・ G・I	良	橙茶色	橙色	
第5図 5	A	1竪建	土師器	甕	(21.4)	-	-	(4.6)	ナデ	ナデ	A・B・C・ D・E・F	良	灰色、淡茶色、 橙色	暗灰色、淡茶 色、橙色	
第5図 6	A	2竪建	土師器	環	-	-	-	(1.9)	ナデ・摩耗のため不明瞭	ナデ・摩耗のため不明瞭	B・F・I	良	黄白色、灰白色	黄白色、灰白色	
第5図 7	A	2竪建	土師質土器	環	(14.6)	-	(7.6)	3.2	回転ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	A・D・E・ F・I	良	淡灰色、淡橙茶 色、橙色	淡灰色、淡橙茶 色、橙色	
第5図 8	A	2竪建	土師器	環	(13.2)	-	-	(3.4)	ナデ・摩耗のため不明瞭	ナデ	E・G・I	良	淡橙色	暗灰色、橙色	
第5図 9	A	3竪建	土師器	鉢	(9.2)	-	-	(9.5)	ナデ・工具ナデ	ナデ	A・B・C・ E・I	良	暗橙茶色	暗橙茶色	
第5図 10	A	2竪建	土師器	甕	(30.0)	-	-	(8.6)	工具ケズリ、ヨコナ デ	ヨコナデ、ナデ	A・B・C・ E・F	良	暗橙色	黒色、暗橙色	
第5図 11	A	3竪建	弥生土器	甕	-	-	-	(7.8)	ナデ・摩耗のため不明瞭	ナデ・ハケ・摩耗のため不明瞭	A・B・C・ E・I	良	橙茶色	暗灰色～橙色	
第12図 1	A	2土	弥生土器	甕	(27.0)	(26.8)	-	(15.4)	ヨコナデ・ナデ・工 具ナデ	ヨコナデ・ハケ	A・B・C・ E・G・I	良	暗灰色、淡茶色	暗灰色、暗茶色	
第12図 2	A	3土	弥生土器	甕	-	-	-	(10.7)	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・D・ E	良	にぶい黄褐色	褐灰色	
第12図 3	A	3土	弥生土器	甕	-	-	7.4	(4.2)	工具ナデ	ヨコナデ	A・C・D・ E	良	灰白色	赤褐色、灰白色	丹塗り(赤褐色)
第12図 4	A	3土	弥生土器	器台	-	-	-	(13.2)	ナデ・ハケ	ナデ	A・B・C・ D・E・F・ G	良	淡橙茶色、橙色	淡橙茶色、橙色	
第12図 5	A	4土	弥生土器	甕	-	-	-	(8.4)	ナデ・摩耗のため不明瞭	ナデ・摩耗のため不明瞭	A・B・C・ E・F・I	良	橙色	橙色	
第13図 1	A	1溝	弥生土器	台付甕	-	-	(11.4)	(6.7)	ナデ・工具ナデ・ヨ コナデ	ミガキ・ヨコナデ	A・B・C・ E・G	良	暗灰色、淡橙茶 色、橙色	淡灰色、淡橙茶 色、橙色	
第13図 2	A	1溝	弥生土器	台付甕	-	-	10.4	(3.4)	指オサエ後ナデ・ナ デ	指オサエ・ナデ	A・B・C・ E・G・I	良	暗灰色、淡橙茶 色、橙色	淡橙茶色、橙色	
第15図 1	A	P1	弥生土器	高環	(12.4)	-	-	(10.3)	ナデ後、ミガキ	ヨコナデ・ハケ目・ 指オサエ・ミガキ	A・B・C・ D・E・F・ G	良	明赤褐色、橙色	明赤褐色	丹塗り 突帯
第15図 2	A	P43	弥生土器	甕	-	-	-	(6.4)	ナデ・摩耗著しい	ナデ・摩耗著しい	A・B・C・ D・E・F・ G	良	淡橙茶色	淡橙茶色	
第15図 3	A	P43	土師器	鉢	-	-	-	(7.1)	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・指オサエ	A・B・E・ F・G・I	良	灰色	灰色、淡橙茶色	
第15図 4	A	一括	土師器	蓋	(19.8)	-	-	(2.2)	ヨコナデ	ケズリ	B・C・D・ E	良	褐色	褐色、灰白色	
第19図 1	C	1竪建	土師器	ミガキ 土器	-	-	-	(2.7)	指オサエ	指オサエ	C	良	明赤褐色	橙色	傾き不確実
第19図 2	C	1竪建	土師器	高環脚部	-	-	(12.6)	(3.6)	ナデ	ミガキ後ナデ	B・C・D・ E・F	良	明橙茶色	明橙茶色	部分復元
第19図 3	C	1A竪建	須恵器	甕	-	-	-	(4.9)	回転ナデ、自然釉	回転ナデ、波状文	E	良	黄灰色	灰色	
第19図 4	C	1A竪建	土師器	環	(14.0)	-	-	4.6	ヨコナデ・不定方向 のナデ	ヨコナデ・指オサエ 後ナデ	A・B・C・ E・I	良	明橙茶色	明橙茶色	
第19図 5	C	1A竪建	土師器	環	14.6	-	-	6.6	ナデ・工具ナデ	ナデ・ハケ後ナデ・ 摩耗著しい	A・B・E・ F・I	良	黒色(黒変)	橙色	内面黒変
第19図 6	C	1A竪建	土師器	小型壺	(9.4)	10.9	-	(5.9)	ナデ	ナデ	A・B・C・ D・E・F	良	橙色	淡橙茶色 橙色	
第19図 7	C	1A竪建	土師器	鉢	(10.6)	-	-	8.9	ナデ・摩耗著しい	ナデ・摩耗著しい	A・B・C・ E・F・I	良	暗灰色 赤褐色	赤褐色	
第19図 8	C	1A竪建	土師器	高環環部	(11.5)	-	-	(9.6)	ナデ	ナデ・ミガキ後ナ デ・摩耗著しい	A・B・C・ E・F	良	橙色	暗橙色	外面に黒変有り
第19図 9	C	1A竪建	土師器	高環環部	16.4	-	-	(6.8)	ヨコナデ・ナデ・摩 耗著しく不明瞭	ヨコナデ・ミガキ後 ナデ	A・B・C・ D・E・F・ I	良	暗灰色 赤褐色	暗灰色 赤褐色	
第19図 10	C	1A竪建	土師器	小型壺	(9.2)	-	-	(5.3)	ハケ後ナデ	ナデ・摩耗著しい	A・B・C・ D・E	良	淡橙色	淡橙色	
第19図 11	C	1A竪建	土師器	甕	-	-	-	(4.6)	ナデ・指オサエ後ナ デ	ナデ・摩耗著しい	A・B・C・ E	良	橙色	橙色	
第19図 12	C	1A竪建 24土	土師器	甕	(20.0)	(23.6)	-	27.9	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ・ハ ケ目あり	A・C・E・ F・I	良	淡橙茶色	橙茶色、黒色 淡橙茶色	部分合成、黒斑あり
第19図 13	C	1A竪建	土師器	小型壺	-	(12.4)	-	(6.4)	ナデ	ナデ	A・B・C・ E	良	暗灰色 暗褐色	黒色 暗褐色	
第19図 14	C	1A竪建	土師器	甕	(14.2)	-	-	(4.9)	ナデ・指オサエ後ナ デ	ナデ・ヨコナデ・摩 耗著しい	A・B・C・ E	良	橙色	橙色	粘土積み重ね痕有り
第21図 1	C	1B竪建	須恵器	甕	-	-	-	6.6	回転ナデ	回転ナデ	E・H	良	灰白色	灰白色	
第21図 2	C	1B竪建	土師器	環	(12.4)	-	-	4.3	ナデ・ミガキ摩耗に より調整不明瞭	ナデ・ミガキ摩耗に より調整不明瞭	A・C・G	良	灰黄色 橙茶色	灰黄色、にぶい 橙色	外面、内面ともに黒斑あり

法量の単位はcm。○ 書きは、残存と復元を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒 Iその他(橙色粒子等)

第3表 出土土器観察表(2)

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量、○は復元径・残存高				調整(磁器は文様)		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	
第21図 3	C	1B竪建	土師器	環	(14.0)	-	-	6.0	ヨコナデ・指オサエ・摩耗により調整不明瞭	ヨコナデ・指オサエ・摩耗により調整不明瞭	A・B・C・F・G・I	良	灰黄色 明黄色	明赤褐色、灰黄色	
第21図 4	C	1B竪建	土師器	甕	(18.7)	-	-	(5.6)	ヨコナデ・指オサエ・摩耗しており不明瞭	ヨコナデ・指オサエ・摩耗しており不明瞭	A・B・C・E・F・I	良	淡黄褐色 橙茶色	淡灰黄色、淡橙茶色	
第21図 5	C	1B竪建 1A竪建	土師器	甕	-	25.0	-	(23.3)	ナデ・不定方向のナデ(工具ナデ)	ナデ・不定方向のナデ・ハケ目・ヘラケズリ	A・B・C・E・F・I	良	橙色	橙茶色、淡黄褐色、橙色、	
第21図 6	C	1B竪建	土師器	甕	-	-	-	(0.9)	工具ナデ	ナデ・指オサエ	A・C・E・F・I	良	淡灰黄色、灰黄色	淡黄褐色、淡灰黄色	多孔式甕底部
第21図 7	C	1B竪建	土師器	高環	-	-	-	-	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	C・E・F・I	良	灰白色、橙色、 明黄色	灰白色、黄白色、 灰白色	高環脚部を転用した輪 最大幅 4.4cm 最大長 5.1cm以上 最大厚 1.3cm
第21図 8	C	1B竪建	土師器	高環	15.4	-	-	(5.1)	ヨコナデ・不定方向のナデ・摩耗により不明瞭	ヨコナデ・指オサエ・摩耗により不明瞭	A・B・D・E・G	良	灰黄色、淡黄褐色	灰黄色、淡黄褐色	
第21図 9	C	1B竪建	土師器	高環	(19.0)	-	-	(5.6)	ヨコナデ・不定方向のナデ・摩耗により調整不明瞭	ヨコナデ・摩耗により調整不明瞭	A・C・E・F・I	不良	淡橙茶色	黒色、淡橙茶色	外面黒斑あり、内面煤附着
第21図 10	C	1B竪建	土師器	高環	(18.0)	-	-	(6.3)	ヨコナデ・不定方向のナデ・摩耗により調整不明瞭	ヨコナデ・摩耗により調整不明瞭	A・B・C・E・F	やや不良	灰黄色、茶褐色	黒色、明赤褐色	外面、内面ともに煤附着
第24図 1	C	2竪建	須恵器	蓋	-	-	-	(2.5)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	E・H	良	暗灰色	灰黒色	口縁端部、丁寧に仕上げられてない
第24図 2	C	2竪建	須恵器	蓋	-	-	-	(1.5)	回転ナデ	回転ヘラケズリ、回転ナデ	E・H	やや不良	灰白色	灰白色	
第24図 3	C	2C竪建	須恵器	環身	(13.0)	-	-	(4.5)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	A・E	良	暗灰色	灰黒色	4竪建の出土と接合
第24図 4	C	2A竪建	須恵器	器台	-	-	-	(9.2)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	E	良	灰褐色	灰色	頸部径(6.5cm)四方スカシ、三角
第24図 5	C	2A竪建	土師器	環	(12.8)	-	-	3.2	ナデ・工具ナデ	ナデ	C・E・G・I	良	淡灰黄色	淡灰黄色	
第24図 6	C	2B竪建	須恵器	器台	-	-	-	(6.0)	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰白色	灰白色	四方スカシ、段ちがい
第24図 7	C	2B竪建	土師器	小型壺	(13.8)	-	-	(6.7)	ヨコナデ・指オサエ・摩耗により調整不明瞭	ヨコナデ・指オサエ・摩耗により調整不明瞭	A・C・E・F・G	良	淡橙茶色、橙茶色	橙茶色	
第24図 8	C	2A・2B竪建	土師器	環	(15.0)	-	-	4.5	ナデ・工具ナデ	ナデ、指オサエ	A・C・G・E・F・I	良	にぶい橙色、灰黄色、橙茶色	明赤褐色、淡黄色、にぶい黄褐色	
第24図 9	C	2A・2C竪建	須恵器	環蓋	(14.3)	-	-	4.1	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	D・E	良	灰白色	灰色	
第24図 10	C	2A・2C竪建	須恵器	環蓋	(15.4)	-	-	(3.1)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	E	良	灰色	灰色	
第24図 11	C	2C竪建	須恵器	長頸壺?	-	-	-	(5.5)	ナデ	回転ナデ	B・H	良	赤茶色	暗灰色	被熱温度の違いしかし焼成良好、しっかりしまっている
第24図 12	C	2C竪建	須恵器	環蓋	-	-	-	(2.9)	回転ナデ、ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	E・H	良	灰色	灰黒色	
第24図 13	C	2C竪建	須恵器	環身	(13.2)	-	-	(4.4)	回転ナデ、ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	H	良	灰色	灰黒色	
第24図 14	C	2C竪建	須恵器	甕	(13.4)	(9.4)	-	(15.8)	灰かぶり	回転ナデ、灰かぶり、ハクリ、回転ヘラケズリ	E・H	良	灰褐色	灰褐色	ほぼ完形、口縁部一部欠損
第24図 15	C	2C竪建	土師器	環	-	-	-	(2.1)	ナデ	ナデ・不定方向ナデ	A・C・G・E・F	良	橙色	橙色	全体的に摩滅により調整不明瞭
第24図 16	C	2C竪建	土師器	高環	-	-	-	(3.9)	不明瞭	ナデ?	C・D・E	良	黄褐色	灰褐色・橙褐色	?へ転用
第24図 17	C	2C竪建	土師器	甕	-	-	-	(4.4)	指オサエ・ナデ	ナデ	A・C・I	良	黒褐色・褐色	褐色	
第24図 18	C	2C竪建	土師器	壺	(18.7)	-	-	36.0	ヨコナデ?(摩擦著しく不明瞭)、ナデヘラケズリ、ナデ	ヨコナデ?(摩擦著しく不明瞭)、ハケ	A・B・C・E・F・G・I	良	暗灰色、淡茶黄色、 橙色	黒色、淡黄褐色、 橙色	黒変有り
第26図 1	C	3竪建	土師器	環	(11.5)	-	-	(5.2)	ナデ 不定方向のナデ	ナデ 不定方向のナデ	A・C・E・F・I	良	橙色・淡橙茶色	橙色・灰黄色	外面黒斑あり
第26図 2	C	4竪建	須恵器	環蓋	-	-	-	(5.2)	回転ナデ	灰かぶり、回転ヘラケズリ、一部回転ナデ	A・B	良	灰白色	灰褐色	
第26図 3	C	4竪建	須恵器	環蓋	-	-	-	(3.2)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	A・B・I	良	灰茶褐色	灰褐色	
第26図 4	C	4竪建	須恵器	環蓋	(13.8)	-	-	4.4	回転ヘラケズリ後ナデ	回転ヘラケズリ	E・F・H	良	灰色	黄灰褐色	
第26図 5	C	4竪建	須恵器	環蓋	(13.6)	-	-	(4.6)	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ヘラケズリ、回転ナデ	E・H	良	灰褐色	灰褐色	
第26図 6	C	4竪建	須恵器	環蓋	(15.0)	-	-	(3.8)	回転ナデ、ナデ	回転ヘラケズリ、ナデ	E・H	良	暗灰色	灰褐色	
第26図 7	C	4竪建	須恵器	蓋	-	-	-	(1.3)	回転ナデ	回転ヘラケズリ、ナデ	E・H	良	灰白色	暗灰色	
第26図 8	C	4竪建	須恵器	蓋	-	-	-	(1.3)	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ヘラケズリ、回転ナデ	A・E	良	灰色	灰色	
第26図 9	C	4竪建	須恵器	環身	(11.4)	-	(8.6)	(3.9)	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ	A・B・E	良	灰褐色	灰褐色	

法量の単位はcm。○書きは、残存と復元を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒 Iその他(橙色粒子等)

第4表 出土土器観察表(3)

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量、○は復元径・残存高				調整(磁器は文様)		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	
第26図 10	C	4竪建	須恵器	坏身	-	-	-	(3.5)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	A・B	良	灰白色	灰黒色	かえり受け部は灰白色
第26図 11	C	4竪建	須恵器	甕? 器台?	-	-	-	(4.4)	回転ナデ	回転ナデ後波状文	B・E	良	灰白色(灰かぶり)	灰黒色	
第26図 12	C	4竪建	須恵器	甕	-	-	-	(4.6)	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰黒色	灰色	
第26図 13	C	4竪建	須恵器	甕	-	-	-	(4.6)	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰白色	灰黒色	
第26図 14	C	4竪建	須恵器	甕? 器台?	-	-	-	(4.4)	回転ナデ	回転ナデ	A・E	不良	黄灰褐色	灰黒色	
第26図 15	C	4竪建	須恵器	器台	-	-	-	(5.9)	回転ナデ後ヨコナデ	回転ナデ後波状文	B	良	灰色	灰色	透かし2ヶ所残存
第26図 16	C	4竪建	須恵器	器台	-	-	-	(5.6)	回転ナデ後ヨコナデ・ナデ	回転ナデ後波状文	B	良	灰色	灰色	透かし3ヶ所残存
第26図 17	C	4竪建	土師器	坏	(15.0)	-	-	4.2	ナデ	ナデ	B・C・D・E・F・G	良	橙色	橙色	黒斑あり
第26図 18	C	4竪建	土師器	坏	(14.0)	-	-	4.8	ナデ・指オサエ	ナデ・不定方向のナデ	A・B・E・F・I	良	にぶい橙色・淡黄褐色	淡灰黄色・にぶい橙色・淡灰黄色・橙色	黒斑あり口縁部に焼付着
第26図 19	C	4竪建	土師器	坏	8.6	-	-	4.2	ナデ・工具ナデ	ナデ・ヘラケズリ	A・B・G	良	淡茶白色	淡茶白色	
第26図 20	C	4竪建	土師器	高坏	-	-	(13.2)	8.1以上	絞り痕をナデ消し?	不明瞭 ケズリ?	A・C・D・I	良	明黄褐色	明黄褐色	脚部推定復元
第26図 21	C	4竪建	土師器	甕	(16.0)	-	-	10以上	ケズリ・ナデ	ナデ	A・C・I	良	褐灰色・にぶい黄橙	明黄褐色	
第26図 22	C	4竪建	土師器	甕	(17.8)	-	-	(9.8)	ナデ	ナデ・指オサエ	A・B・C・E・F・G・I	良	暗茶色・淡茶色	黒色・淡灰茶色	黒変
第26図 23	C	4竪建	土師器	壺	-	(11.8)	-	11.5以上	ナデ・指オサエ	ナデ?ハケ	A・B・C・D・E・F	良	暗茶灰色	暗灰色・橙色	内面焼付着
第34図 1	C	1土	須恵器	甕	-	-	-	(2.1)	回転ナデ、タタキ	回転ヘラケズリ	E・H	良	灰色	灰黒色	
第34図 2	C	1土	須恵器	坏	-	-	(8.2)	(1.5)	回転ナデ、不定方向のナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ	A・H	良	灰色	灰赤褐色	
第34図 3	C	1土	青磁	碗	-	-	-	(3.6)	圈文	櫛目文	緻密	-	青緑色	青緑色	
第34図 4	C	1土	青磁	小皿	(11.2)	-	(5.4)	2.4	櫛描文	-	緻密	-	青緑色	青緑色	片切彫り
第34図 5	C	5土	須恵器	坏	-	-	-	(3.0)	回転ナデ	回転ナデ、回転ナデ、一部ヘラケズリ有	B・E	良	灰褐色	灰褐色	ロク口切り離し痕残る
第34図 6	C	5土	須恵器	器台	-	-	-	(4.6)	回転ナデ後ヨコナデ	回転ナデ・波状文	B	良	灰色	灰色	透かし1ヶ所残存
第34図 7	C	6土	土師器	坏	13.0	-	-	4.2	ナデ・工具痕	摩耗のため調整不明瞭	A・C・D・E	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面に黒斑あり
第34図 10	C	11土	土師器	碗	(13.4)	-	-	(5.4)	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	にぶい黄褐色	灰褐色	
第34図 11	C	11土	土師器	坏	-	-	-	(4.1)	摩耗のため調整不明瞭	ハケ目・摩耗のため調整不明瞭	A・C・D	良	橙色	橙色	
第34図 12	C	13土	土師器	坏	(17.0)	-	-	(4.0)	摩耗のため調整不明瞭	ハケ目残存・不明瞭	A・C・D	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面に黒斑あり
第36図 1	C	20土	陶質土器	高坏	(15.0)	-	(11.2)	(11.7)	回転ナデ、一部灰かぶり	回転ナデ	A・E	良	灰黒色	灰黒色	脚部内面接合跡か?
第36図 2	C	20土	須恵器	器台	-	-	-	(10.0)	回転ナデ	回転ナデ後波状文	B	良	灰色	灰色	
第36図 3	C	20土	須恵器	器台	-	-	-	(2.7)	回転ナデ	回転ナデ後波状文	B	良	灰褐色	灰色	
第36図 4	C	20土	須恵器	甕?	(9.0)	-	-	(3.2)	回転ナデ	回転ナデ	B・H	良	灰褐色		
第36図 5	C	20土	須恵器	甕	-	(15.0)	-	(8.7)	回転ナデ、タタキ?	回転ナデ	E・H	良	灰褐色	黄灰褐色	
第36図 6	C	20土	手づくね土器	坏	6.4	-	3.2	3.5	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D・E	良	橙色	橙色	
第36図 7	C	20土	土師器	坏	(12.0)	-	-	(4.9)	工具痕残存	摩耗のため調整不明	A・E	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面に黒斑あり
第36図 8	C	20土	土師器	碗	(11.8)	-	-	5.1	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D	良	橙色	橙色	一部合成復元
第36図 9	C	20土	土師器	碗	(15.4)	-	-	(6.4)	摩耗のため調整不明	ハケ目(不明瞭)	A・C	良	淡黄色	淡黄色	
第36図 10	C	20土	土師器	甕	(13.8)	-	-	(7.4)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	灰褐色	灰褐色	
第36図 11	C	20土	土師器	甕	14.1	-	-	12.7	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C	良	橙色	橙色	
第36図 12	C	20土	弥生土器	甕	17.1	-	-	29.3	ヨコナデ・指オサエ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ(一部ハケ目残存)	A・C・D・E	良	にぶい黄褐色	橙色	外面に煤付着 口縁内面に黒斑あり 部分合成復元
第36図 13	C	20土	土師器	高坏	(20.0)	-	-	(5.3)	赤色顔料残存・工具痕	ハケ目・摩耗のため調整不明瞭	A・C・E	良	橙色	浅黄褐色	内面に赤色顔料残存
第36図 14	C	20土	土師器	高坏	-	-	-	(6.0)	ナデ	ヨコナデ・ナデ	A・C・D・E	良	橙色	橙色	
第36図 15	C	20土	土師器	高坏	(18.2)	-	-	(5.6)	摩耗のため調整不明瞭	摩耗のため調整不明瞭	A・C・D・E	良	橙色	橙色	
第36図 16	C	20土	土師器	鉢	-	-	-	(7.3)	ヘラケズリ	指オサエ・工具ナデ・工具痕	A・B・C	良	にぶい褐色	灰黄色	
第36図 17	C	20土	土師器	高坏	-	-	-	(7.2)	ナデ・シボリ痕	摩耗のため調整不明	A	やや不良	淡黄色	淡黄色	一部合成復元

法量の単位はcm。○書きは、残存と復元を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒 Iその他(橙色粒子等)

第5表 出土土器観察表(4)

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量、○は復元径・残存高				調整(磁器は文様)		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	
第36図 18	C	20土	土師器	高環	(18.6)	-	-	(6.1)	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第36図 19	C	20土	土師器	高環	(19.8)	-	-	(5.7)	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D	良	にぶい黄褐色	褐色	
第36図 20	C	20土	土師器	高環	(20.6)	-	-	(7.5)	摩耗のため調整不明	ハケ目後ヨコナデ・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	褐色	褐色	
第36図 21	C	20土	土師器	甌	-	-	-	(5.5)	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D・E	良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第36図 22	C	20土	土師器	甌	(18.6)	-	-	(6.3)	ケズリ・ヨコナデ・摩耗のため調整不明	ヨコナデ・ハケ目・摩耗のため調整不明	A・C	良	灰黄色	灰黄色	外面に黒斑あり
第36図 23	C	20土	土師器	甌	-	-	-	(4.5)	工具ナデ・ナデ	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	黄褐色	黄褐色	楕円状の穿孔4個残存、外面に黒斑あり
第36図 24	C	20土	土師器	甌	(20.2)	-	-	(16.8)	ハケ目・摩耗のため調整不明	ハケ目・摩耗のため調整不明	A・E・D	良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第38図 1	C	21土	須恵器	器台	-	-	-	(13.2)	回転ナデ・タタキ	回転ナデ・波状文	B	良	灰色	灰色	
第38図 2	C	23土	土師器	高環	15.8	-	11.4	12.8	ケズリ・摩耗のため調整不明	ナデ・摩耗のため調整不明	C・E	良	にぶい褐色	にぶい黄褐色	
第38図 3	C	23土	土師器	高環	15.7	-	(11.4)	11.2	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	褐色	褐色	
第38図 4	C	23土	土師器	高環	-	(19.3)	13.0	14.1	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	褐色	褐色	外面に黒斑あり一部合成復元
第38図 5	C	24土	土師器	環	13.0	-	-	5.1	摩耗のため調整不明	ハケ目(不明)	A・D	良	にぶい褐色	にぶい褐色	
第38図 7	C	29土	土師器	甌	(15.7)	-	-	(7.3)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ハケ目後ヨコナデ・ハケ目残存	A・C・E	良	褐色	褐色	
第38図 8	C	29土	土師器	高環	-	-	14.9	(8.3)	ナデ・ヨコ方向工具ナデ(ケズリ)	摩耗のため調整不明、工具痕残存	A・C・E	良	褐色	褐色	外面に黒斑あり一部合成復元
第38図 9	C	29土	土師器	甌	-	-	-	(3.5)	ナデ	ナデ	A・B・C・D	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	穿孔2個残存外面に黒斑あり
第41図 1	C	1溝	須恵器	蓋	-	-	-	(1.5)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	C・H	良	灰白色	灰褐色	
第41図 2	C	2溝	須恵器	壺? 甌?	-	-	-	(3.4)	ナデ指オサエ	タタキの後ナデ消し	A・E・H	良	灰色	灰褐色	
第41図 3	C	3溝	須恵器	蓋	-	-	-	(1.6)	回転ナデ	回転ナデ	E・H	良	灰褐色	灰褐色	
第41図 4	C	4溝	須恵器	蓋	-	-	-	(2.0)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	A・E	やや不良	灰白色	灰白色	
第41図 5	C	4溝	瓦質土器	鉢	-	-	-	(8.0)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・スタンプ文・ヨコナデ後ミガキ	E	良	灰色	灰色	
第41図 6	C	4溝	瓦質土器	鉢	-	-	-	(6.3)	ハケ目	スタンプ文	E	良	青灰色	青灰色	
第41図 7	C	4溝	瓦質土器	鉢	-	-	-	(5.7)	調整不明	スタンプ文・調整不明	B・C	良	灰色	灰色	
第41図 8	C	4溝	陶器	椀	(4.7)	-	3.8	5.1	-	露胎	精製土	-	茶色	茶色	
第41図 9	C	4溝	陶器	蓋	6.7	-	3.8	1.1	-	露胎・回転糸切り	精製土	-	緑白色	緑白色	完形
第41図 10	C	4溝	陶器	乗燭	4.9	-	3.8	3.4	露胎	露胎	精製土	-	茶色	茶色	
第41図 11	C	4溝	陶器	皿	13.0	-	4.2	3.7	露胎	露胎	精製土	-	淡黄色	淡黄色	見込み、蛇ノ目軸剥ぎ
第41図 12	C	4溝	陶器	皿	(14.0)	-	4.7	4.0	露胎・砂目	露胎	精製土	-	黄褐色	黄褐色	内面蛇ノ目軸剥ぎ、見込み中央に砂目
第41図 13	C	4溝	陶器	火入	9.9	-	9.2	6.7	ヨコナデ・ナデ	ミガキ・ナデ	A・C	良	黒褐色	黒褐色	脚部3ヶ所
第41図 14	C	4溝	陶器	播鉢	(21.0)	-	10.7	10.0	播目	ヨコナデ	A・C	良	茶褐色	茶褐色	底外面に砂目3ヶ所残存、底内面にも重ね焼き跡(砂目など)
第43図 17	C	5溝	須恵器	壺	-	(20.9)	-	(4.3)	回転ナデ	回転ナデ	E・H	良	灰褐色	暗灰色・灰白色	27土と接合
第43図 18	C	5溝	須恵器	高台付環	(13.7)	-	(10.1)	(3.9)	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ	B・E	良	灰黒色	灰黒色	表面のみ灰黒色で内部は赤くなっている
第44図 1	C	P48	青磁	碗	-	-	-	(3.9)	蓮弁文	-	緻密	-	青緑色	青緑色	龍泉窯系
第44図 2	C	P141	青磁	碗	-	-	-	(4.2)	-	鎚蓮弁文	緻密	-	青緑色	青緑色	龍泉窯系
第44図 3	C	P147	土師器	皿	(13.9)	-	8.9	3.1	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・糸切り痕・板状圧痕	A・C・E	良	黒褐色	黄灰色	
第44図 4	C	P147	土師器	皿	(12.5)	-	(10.6)	2.7	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・糸切り痕・板状圧痕	A・C・D	良	浅黄褐色	浅黄褐色	底部に穿孔あり
第44図 5	C	P174	須恵器	蓋	(14.5)	-	-	(10.9)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	E	良	灰白色	灰白色	
第44図 6	C	P177	須恵器	甌	(23.2)	-	-	(5.4)	回転ナデ、同心円タタキ後ナデ消し	回転ナデ	E・H	良	灰黒色	灰黒色	頸部径(18.0)
第44図 7	C	P208	須恵器	蓋	-	-	-	(1.2)	回転ナデ	回転ナデ	E・H	良	明灰茶色	明灰茶色	
第44図 8	C	P217	須恵器	環	-	-	(11.5)	(1.5)	回転ナデ	回転ヘラケズリ後、回転ナデ	E・H	良	灰黒色	灰黒色	

法量の単位はcm。○書きは、残存と復元を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒 Iその他(褐色粒子等)

第6表 出土土器観察表(5)

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量、○は復元径・残存高				調整(磁器は文様)		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	内面	外面			内面	外面	
第45図 1	C	水田層下	須恵器	高環	-	-	-	(2.1)	-	波状文、回転ヘラケズリ	H	良	緑褐色	灰白色	自然釉全体に付着
第45図 2	C	水田層	青磁	碗	-	-	-	(2.7)	-	鎚蓮弁文	緻密	-	青緑色	青緑色	龍泉窯系
第45図 3	C	水田層	青磁	碗	-	-	-	(5.1)	-	鎚蓮弁文	緻密	-	青緑色	青緑色	龍泉窯系
第45図 4	C	水田層	青磁	碗	-	-	4.1	(2.3)	-	鎚蓮弁文	緻密	-	青緑色	青緑色	龍泉窯系
第45図 5	C	水田層	青磁	碗	-	-	-	(3.9)	-	鎚蓮弁文	緻密	-	青緑色	青緑色	龍泉窯系
第45図 6	C	水田層	青磁	碗	-	-	-	(3.6)	-	鎚蓮弁文	緻密	-	青緑色	青緑色	龍泉窯系
第45図 7	C	水田層	青磁	碗	-	-	-	(3.8)	-	鎚蓮弁文	緻密	-	青緑色	青緑色	龍泉窯系
第45図 8	C	水田層	青磁	碗	(16.9)	-	-	(2.8)	-	鎚蓮弁文	緻密	-	青緑色	青緑色	龍泉窯系
第46図 1	C	水田層	須恵器	蓋	-	-	-	(2.4)	回転ナデ	回転ヘラケズリ	B・E	良	灰褐色	灰褐色	やや軟質
第46図 2	C	水田層	青磁	碗	-	-	(5.1)	(2.1)	葉文	-	緻密	-	青緑色	青緑色	
第46図 3	C	水田層	青磁	皿	-	-	-	(2.4)	柳描文	-	緻密	-	青緑色	青緑色	
第46図 4	C	水田層	青磁	皿	-	-	(4.9)	(1.2)	柳描文・花文	-	緻密	-	青緑色	青緑色	同安窯
第46図 5	C	水田層	青磁	碗	(14.7)	-	-	(5.7)	柳描文・花文	柳目文	緻密	-	青緑色	青緑色	同安窯

法量の単位はcm。○書きは、残存と復元を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒 Iその他(橙色粒子等)

第7表 出土磁器観察表(1)

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量、○は復元径・残存高				文様		胎土	成形	装飾	製作年代	産地	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	内面	外面						内面	外面	
第42図 1	C	4溝	磁器	碗	(7.0)	-	3.3	5.4	-	草花 雲 團線	精製土	ロクロ	染付透明釉	-	-	青白色	青白色	
第42図 2	C	4溝	磁器	碗	(10.4)	-	(3.8)	5.0	施釉(見込) 團線 格子	施釉・露胎 付着物	精製土	ロクロ	染付透明釉	19C中頃	肥前	青白色	青白色	
第42図 3	C	4溝	磁器	碗	(9.4)	-	(3.4)	5.5	格子つなぎ(見込) 團線・不明	直線と波 團線	精製土	ロクロ	染付透明釉	18C後半	肥前	青白色	青白色	くらわんか手
第42図 3	C	4溝	磁器	碗	(9.4)	-	(3.4)	5.5	格子つなぎ(見込) 團線・不明	格子に蘭	精製土	ロクロ	染付透明釉	18C後半	肥前	青白色	青白色	くらわんか手
第42図 4	C	4溝	磁器	小碗	6.9	-	3.4	5.3	施釉	施釉・露胎 薄丸文	精製土	ロクロ	染付透明釉	18C末-19C	肥前	青白色	青白色	
第42図 5	C	4溝	磁器	碗	(7.4)	-	(4.0)	5.5			精製土	ロクロ	染付透明釉	-	肥前	青白色	青白色	
第42図 6	C	4溝	磁器	碗	(8.2)	-	(3.4)	5.3	施釉(見込) 岩波文	施釉・露胎 花文、花、濃緑(ダミ)	精製土	ロクロ	染付透明釉	-	-	青白色	青白色	
第42図 7	C	4溝	磁器	皿	(12.4)	-	(4.4)	4.9	施釉・(見込) 蛇ノ目輪ハギ	施釉・露胎 雲文 團線	精製土	ロクロ	染付透明釉	18C末-19C	肥前	黄白色	黄白色	見込蛇ノ目輪ハギ
第42図 8	C	4溝	磁器	碗	(12.0)	-	(4.8)	5.7	團線	團線、朝顔	精製土	ロクロ	染付透明釉	-	-	青白色	青白色	端反碗
第42図 9	C	4溝	磁器	皿	(14.2)	-	5.0	3.7	施釉・蛇ノ目輪ハギ	施釉・露胎 付着物	精製土	ロクロ	染付透明釉	18C	肥前	黄白色	黄白色	見込蛇ノ目輪ハギ、高台端部砂付着、端反皿
第42図 10	C	4溝	磁器	蓋	(9.7)	-	-	3.0	團線、すずき(見込) 水辺・鳥	-	精製土	ロクロ	染付透明釉	-	-	青白色	青白色	つまみ径(5.2)
第42図 11	C	4溝	磁器	碗	(7.4)	-	(3.8)	5.5	施釉	施釉・露胎 付着物 山水文 團線	精製土	ロクロ	染付透明釉	18C末-19C	肥前	青白色	青白色	
第42図 12	C	4溝	磁器	小碗	(7.2)	-	(2.8)	4.0	施釉	施釉・露胎 蘭文 團線	精製土	ロクロ	染付透明釉	19C	肥前	青白色	青白色	
第42図 13	C	4溝	磁器	碗	(10.2)	-	(4.0)	4.4	施釉	施釉・露胎 松竹梅 團線	精製土	ロクロ	透明釉	18C	肥前	青白色	青白色	
第43図 1	C	4溝	磁器	紅皿	5.3	-	2.8	2.0	-	露胎付着物、世	精製土	ロクロ	染付透明釉	18C末-19C	肥前	黄白色	黄白色	高台端部付着物あり
第43図 2	C	4溝	磁器	猪口	(7.4)	-	(5.0)	6.1	團線	果樹	精製土	ロクロ	染付透明釉	-	-	青白色	青白色	蛇ノ目凹形高台
第43図 3	C	4溝	磁器	小碗	(7.2)	-	3.2	5.0	-	山水文	精製土	ロクロ	染付透明釉	-	-	青白色	青白色	端反碗
第43図 4	C	4溝	磁器	小碗	(7.1)	-	-	(4.7)	施釉	施釉	精製土	ロクロ	染付透明釉	18C末-19C	肥前	青白色	青白色	
第43図 5	C	4溝	磁器	碗	(7.0)	-	(4.0)	5.7	-	二重格子・團線	精製土	ロクロ	染付透明釉	-	-	青白色	青白色	
第43図 6	C	4溝	磁器	碗	(9.1)	-	3.7	4.7	-	井桁・團線	精製土	ロクロ	染付透明釉	18C中頃～末	-	青白色	青白色	高台端部砂付着、くわらんか手、コンニャク印判
第43図 7	C	4溝	磁器	碗	(9.1)	-	(3.5)	4.6	施釉	施釉・露胎 梅花雪洞團線	精製土	ロクロ	染付透明釉	18C中頃末	肥前	青白色	青白色	くらわんか手
第43図 8	C	4溝	磁器	碗	(9.7)	-	3.8	5.3	-	二重網目	精製土	ロクロ	染付透明釉	18C中頃末	肥前	青白色	青白色	高台端部砂付着 見込付着物有
第43図 9	C	4溝	磁器	碗	(10.8)	-	-	(4.6)	山水文	丸文(四方罫 格?格子)	精製土	ロクロ	染付透明釉	-	-	青白色	青白色	
第43図 10	C	4溝	磁器	碗	(9.4)	-	-	(4.6)	施釉	施釉・稲束、花唐草	精製土	ロクロ	染付透明釉	-	-	青白色	青白色	

法量の単位はcm。○書きは、残存と復元を表す。

第8表 出土磁器観察表(2)

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量、○は復元径・残存高				文様		胎土	成形	装飾	製作年代	産地	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	内面	外面						内面	外面	
第43図 11	C	4溝	磁器	碗	(10.0)	-	-	(3.9)	施釉 環路文	施釉・環路文	精製土	ロクロ	染付 透明釉	19C前半	肥前	青白色	青白色	
第43図 12	C	4溝	磁器	碗	(4.6)	-	-	(3.2)	のこぎり文、墨弾き	窓絵・風景	精製土	ロクロ	染付 透明釉	-	-	青白色	青白色	
第43図 13	C	4溝	磁器	碗	(7.0)	-	3.4	5.4	施釉 格子時に菊花、井桁、環線 (見込)五弁花	施釉・露胎 環線	精製土	ロクロ	染付 透明釉	18C末-19C	肥前	黄白色	黄白色	筒状碗、焼成不良
第43図 14	C	4溝	磁器	筒形碗	(7.4)	-	-	(5.0)	環線	菱形文、格子	精製土	ロクロ	染付 透明釉	-	-	黄白色	黄白色	
第43図 15	C	4溝	磁器	蓋	(6.9)	-	-	(4.5)	四方禰 (見込)環線	七宝繋	精製土	ロクロ	染付 透明釉	18C後半	-	黄白色	黄白色	筒形碗
第43図 16	C	4溝	磁器	碗	-	-	3.4	(3.5)	施釉	施釉・露胎	精製土	ロクロ	染付 透明釉	19C	肥前	青白色	青白色	
第43図 19	C	8溝	磁器	皿	(13.7)	-	(5.0)	3.9	施釉・蛇ノ目軸ハギ	施釉・露胎砂付着	精製土	ロクロ	染付 透明釉	18C	肥前	黄白色	黄白色	見込み蛇ノ目軸割ぎ高台端 部砂付着、端反皿
第43図 20	C	8溝	磁器	碗	-	-	-	(2.3)	環線	菊花	精製土	ロクロ	染付 透明釉	18C末-19C	肥前	青白色	青白色	筒状碗
第43図 21	C	8溝	磁器	碗	-	-	4.2	(4.5)	施釉 (見込)岩波文	施釉・露胎 水辺風景	精製土	ロクロ	染付 透明釉	18C後半	肥前	青白色	青白色	焼継痕あり
第43図 22	C	8溝	磁器	碗	(11.6)	-	4.7	5.8	施釉・蛇ノ目軸ハギ	施釉・露胎	精製土	ロクロ	染付 透明釉	18C後半	肥前	黄白色	黄白色	見込み蛇ノ目軸割ぎ 広東碗
第43図 23	C	8溝	磁器	碗	-	-	-	(1.9)	施釉	施釉 井桁	精製土	ロクロ	染付 透明釉	-	-	青白色	青白色	コンニャク印判
第43図 24	C	8溝	磁器	碗	-	-	-	(4.0)	施釉 二重格子	施釉	精製土	ロクロ	染付 透明釉	-	-	青白色	青白色	筒状碗
第43図 25	C	8溝	磁器	碗	-	-	(5.6)	(3.7)	施釉 (見込)環線	施釉・露胎 草花	精製土	ロクロ	染付 透明釉	18C末-19C	肥前	青白色	青白色	広東碗
第46図 6	C	一括	磁器	小碗	(6.4)	-	-	(4.0)	施釉	薄丸文	精製土	ロクロ	染付 透明釉	18C末-19C	肥前	青白色	青白色	
第46図 7	C	13溝	磁器	碗	-	-	-	(2.7)	施釉	施釉・露胎 環線	精製土	ロクロ	染付 透明釉	-	-	青白色	青白色	

法量の単位はcm。○書きは、残存と復元を表す。

第9表 出土石器観察表

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量 (cm) ○は残存			重さ (g)	石材	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
第34図 8	C	6土	石器	砥石	12.4	5.0	4.7	575.0	砂岩	磨り・新欠
第34図 9	C	6土	石器	磨石	12.0	14.2	1.8	224.0	砂岩	磨り・木の葉の化石あり
第41図 15	C	4溝	石製品	硯	(4.9)	(4.1)	(0.9)	18.7	砂岩	
第41図 16	C	4溝	石器	砥石	(4.8)	4.3	1.4	26.9	砂岩	
第46図 8	C	一括	石器	打製石斧	7.2	6.3	1.8	134.0	安山岩	
第46図 9	C	一括	石器	砥石	10.7	5.4	3.8	230.0	砂岩	



① A区垂直写真（上が北東）



② A区1号竪穴建物発掘状況（北西から）



③ A区1号竪穴建物カマド発掘状況（南西から）



④ A区2号竪穴建物カマド発掘状況（南から）

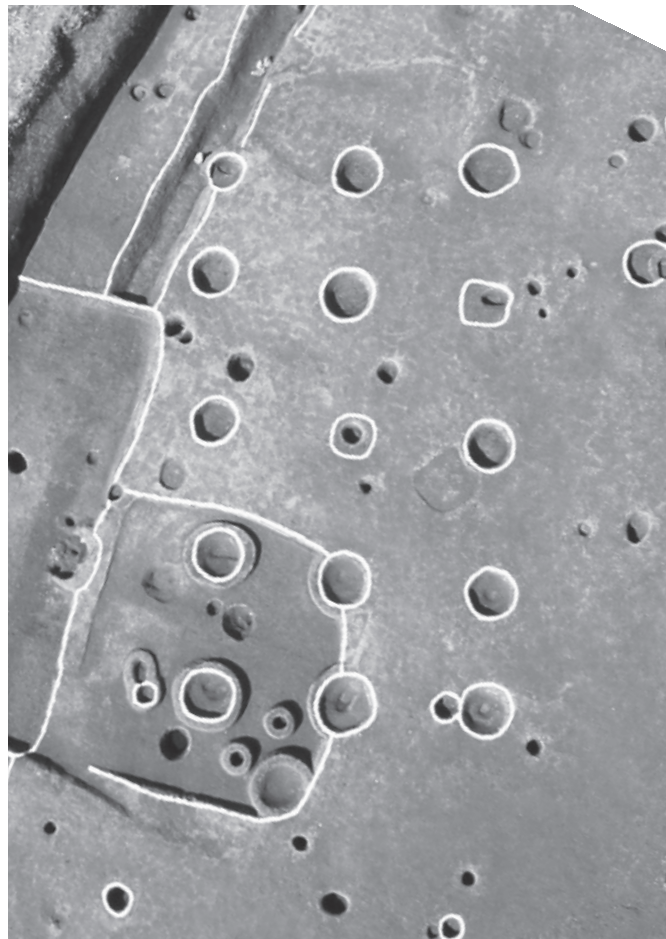


⑤ A区4号竪穴建物発掘状況（南から）

写真図版 2



① A区 5号 竪穴建物発掘状況 (北から)



② A区 1号 掘立柱建物発掘状況 (上が北西)



③ A区 3号 掘立柱建物発掘状況 (北西から)



④ C区 垂直写真 (上が南東)



① C区1号A 竪穴建物完掘状況 (南西から)



② C区1号A 竪穴建物焼土・炭検出状況 (南西から)



③ C区1号B 竪穴建物発掘状況 (南から)



④ C区1号B 竪穴建物発掘状況 (東から)



⑤ C区2号ABC 竪穴建物発掘状況 (西から)



⑥ C区2号ABC 竪穴建物発掘状況 (南東から)



⑦ C区2号C 竪穴建物カマド発掘状況 (南から)

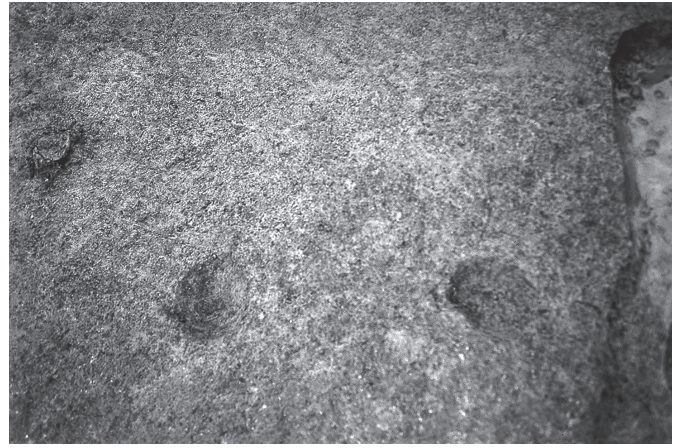


⑧ C区2号C 竪穴建物遺物出土状況

写真図版 4



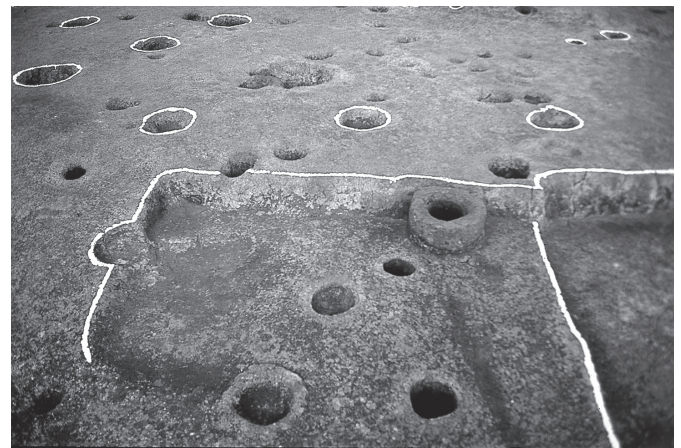
① C区 4号 A 竪穴建物発掘状況 (南東から)



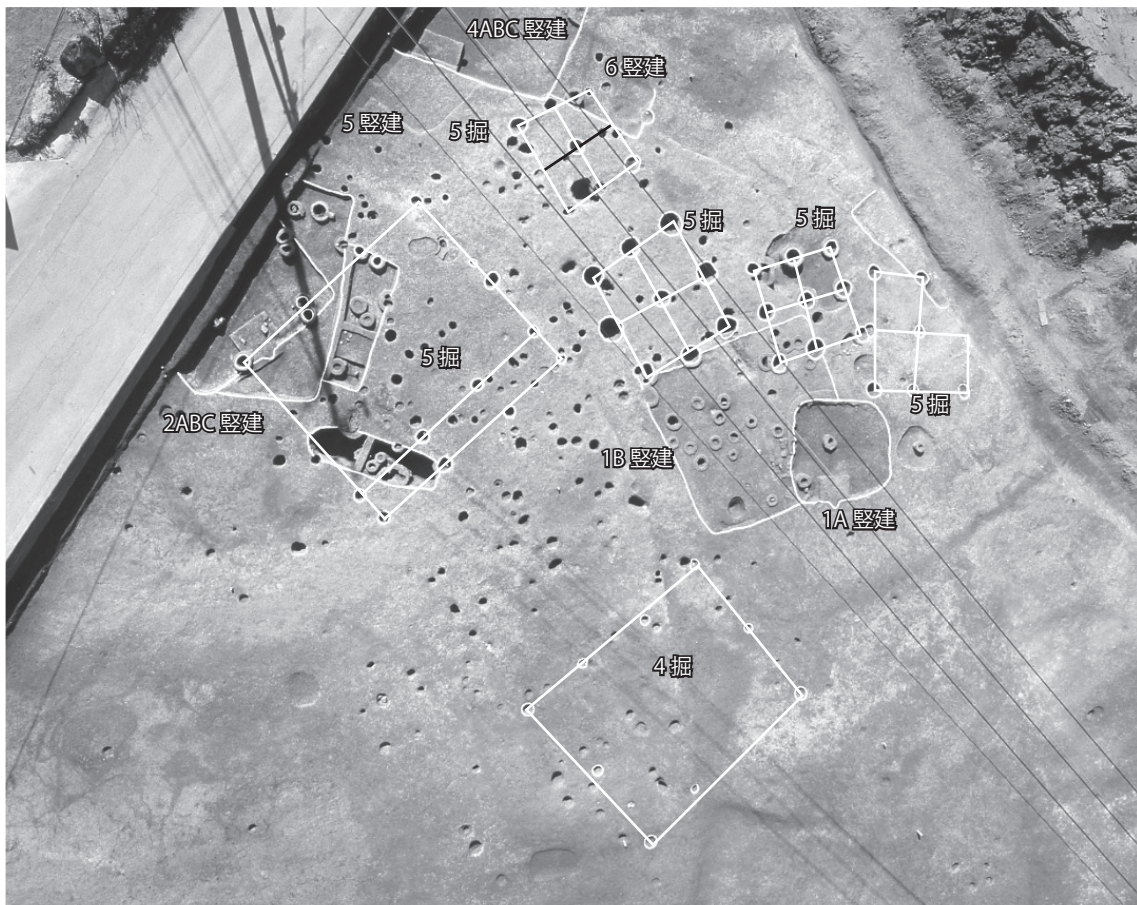
② C区 4号 B 竪穴建物カマド発掘状況 (北西から)



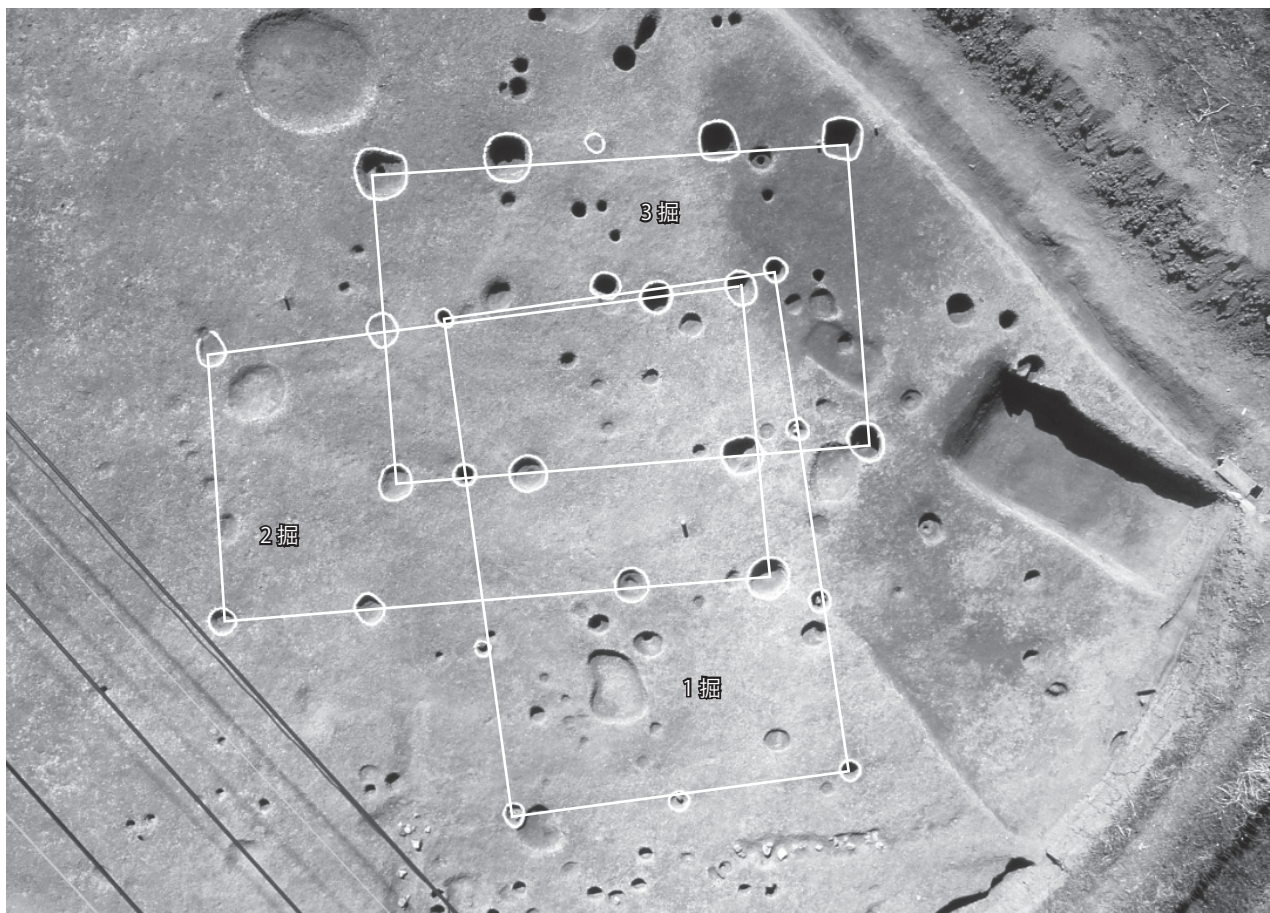
③ C区 4号 C 竪穴建物カマド発掘状況 (北西から)



④ C区 6号 竪穴建物発掘状況 (南東から)



⑤ C区 1～6号 竪穴建物、4～9号 掘立柱建物発掘状況 (上が南)



① C区 1～3号掘立柱建物発掘状況（上が南）



② C区 1～3号掘立柱建物発掘状況（南から）



③ C区 1号土坑発掘状況（南西から）



④ C区 1号土坑遺物出土状況



⑤ C区 7号土坑完掘状況（北西から）



①C区 11号土坑遺物出土状況



③C区 20号土坑遺物出土状況



②C区 20号土坑完掘状況（北西から）



④C区 20号土坑土層堆積状況



⑤C区 24号土坑発掘状況（東から）



⑥C区 29号土坑遺物出土状況



⑦C区 29号土坑発掘状況



① C区4号溝遺物出土状況(1)(北西から)



② C区4号溝遺物出土状況(2)(南東から)



③ C区4号溝発掘状況(南東から)

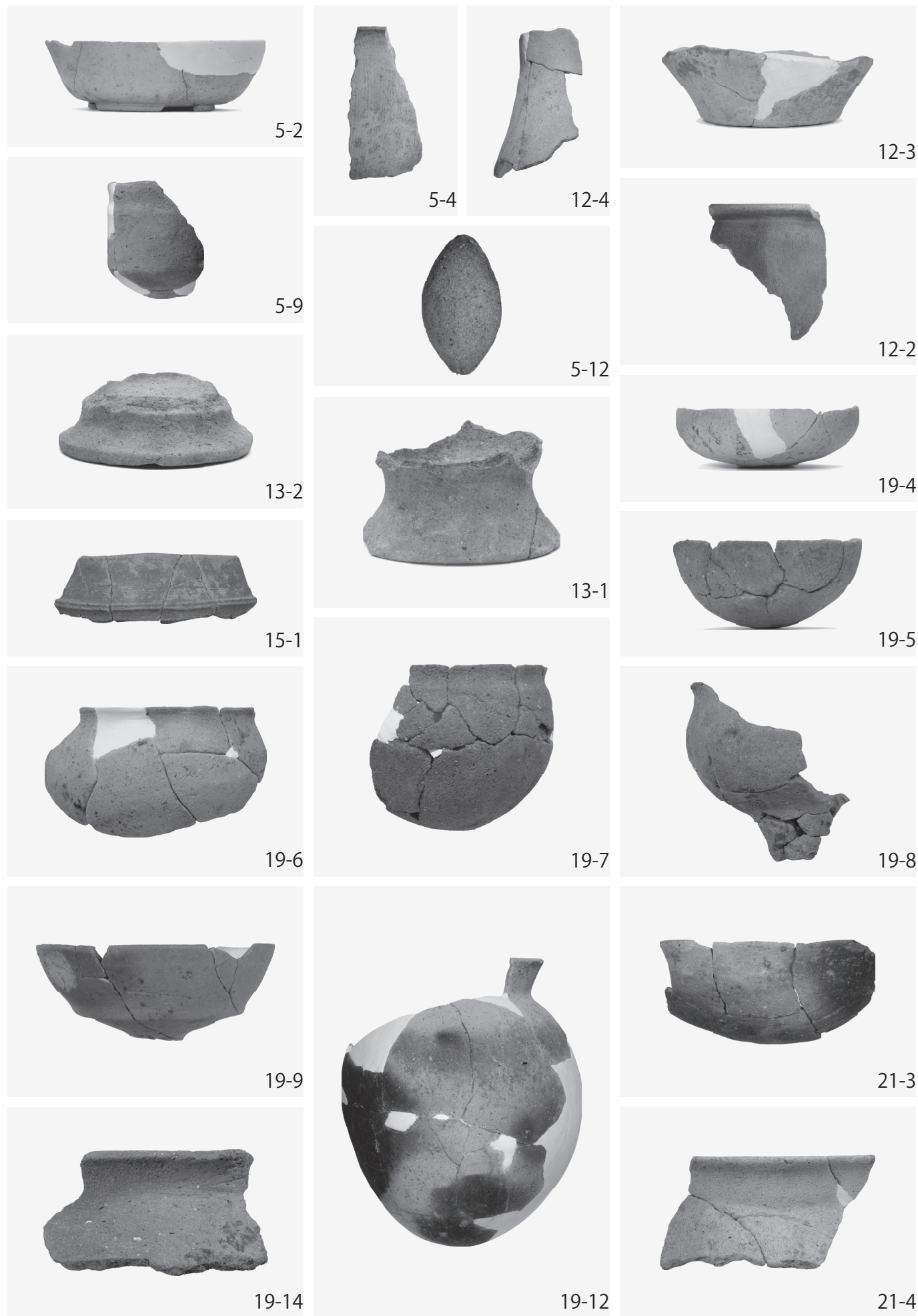


④ C区4号溝遺物出土状況(3)(北西から)



⑤ C区4号溝土層堆積状況

写真图版 8





21-5



21-6



21-7



21-8



21-10



24-3



24-4



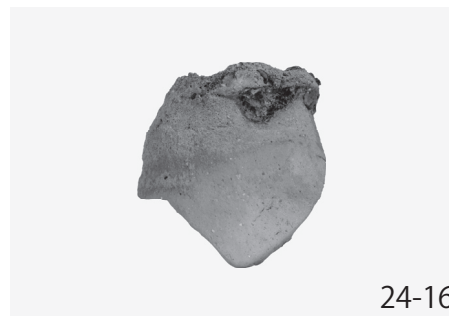
24-9



24-10



24-14



24-16



24-11



26-1



26-4



24-18



26-2



26-6

写真図版 10



26-9



26-13



26-15



26-16



26-17



26-18



26-19



26-20



26-21



26-22



26-23



26-24



343



34-6



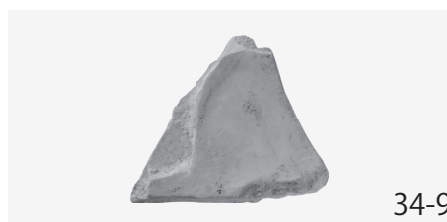
34-7



34-4 (見込)



34-8



34-9



34-4 (外面)



34-10



34-12



36-1



36-2



36-3



36-4



36-5



36-6



36-8



36-12



36-7



36-10



36-11



36-23 (底部)



36-17



36-21



36-23 (外面)



36-22



36-24



38-1



38-2



38-3



38-4



38-5



38-6



38-7



38-8



38-9



41-1



41-5



41-6



41-14



41-15



41-16



43-18



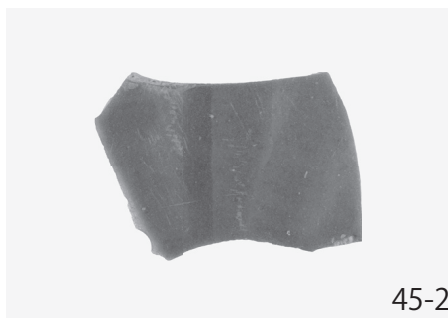
44-1



44-2



44-6



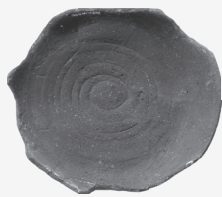
45-2



45-3



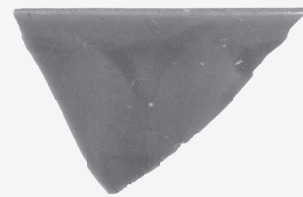
45-4



44-3 (見込)



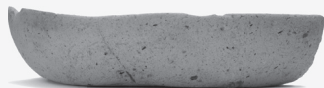
44-4 (見込)



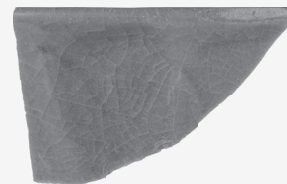
45-5



44-3 (外面)



44-4 (外面)



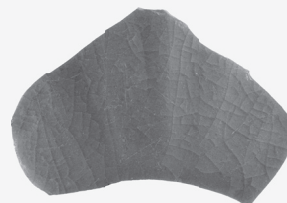
45-6



44-3 (底面)



44-4 (底面)



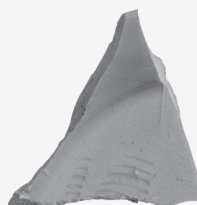
45-7



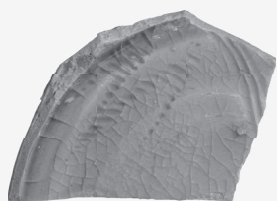
45-8



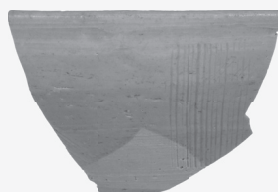
46-2



46-3



46-4



46-5 (外面)



46-5 (内面)



46-8



46-9



46-10

報告書抄録

ふりがな	くくりのいせき5 まちのつばいせきA・Cくのちょうさ
書名	求来里の遺跡V 町ノ坪遺跡A・C区の調査
副書名	県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	(5)
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第132集
編著者名	若杉竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1 0973(24)7171
発行年月日	2018年(平成30年)3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まちのつばいせき 町ノ坪遺跡	おおいたけんひたし 大分県日田市 おおあざくくり 大字求来里	44204-6	204240	A区 33° 18' 58" C区 33° 18' 52"	A区 130° 58' 4" C区 130° 58' 4"	20031110 ～ 20040326	A区 678㎡ C区 1,188㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
町ノ坪遺跡 A・C区	集落	弥生 古墳 奈良 中世 近世	A区 竪穴建物6軒 掘立柱建物7棟 土坑6基 溝3条 C区 竪穴建物13軒 掘立柱建物9棟 土坑30基 溝6条	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 青磁 近世陶磁器 石器 鉄滓・鞆	初期須恵器や多孔式甑 など、朝鮮半島系の文 物が出土した祭祀土坑、 大量の陶磁器が廃棄さ れた近世の屋敷溝を確 認。

要約	<p>町ノ坪遺跡は、求来里川右岸の沖積面に広がり、調査地付近の標高は約126～129mを測る。調査では、弥生時代中期後半・後期後半、古墳時代中期から後期、奈良時代の建物や中世の水田層、近世の屋敷溝が確認された。弥生時代から奈良時代の集落の展開については、これまでに指摘されていた求来里川流域の集落動向をさらに裏付けるものである。また、弥生時代から近世に至るまで、断続的ではありながら、長期間にわたり人々の生活痕跡が確認されるなど、調査地一帯が人々が生活する上で、好条件の立地であったことを指摘することができる。</p>
----	---

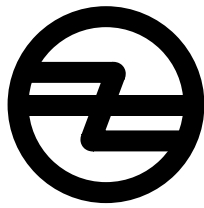
求来里の遺跡Ⅴ

- 県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (5) -

町ノ坪遺跡A・C区の調査

2018年3月20日

編 集	日田市教育庁文化財保護課 〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1
発 行	日田市教育委員会 〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1
印 刷	尾花印刷有限会社 〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8



日田市